

日本で育つネパールルーツの子ども世代と
保護者における困難と支援ニーズの意味づけ
—日本語支援を主たる課題としない層に着目した親子ペア調査—

慶應義塾大学 環境情報学部 環境情報学科

72242504

カフレスレヤ

Shreya Kafle

要旨

本研究は、日本で育つネパールルーツの子ども世代とその保護者が、成長過程における困難と支援ニーズをどのように意味づけているのかを明らかにすることを目的とする。外国ルーツの子どもへの支援では、日本語指導や学習支援が中心的に扱われてきたが、日本語による学校生活に大きな困難を抱えていない層の経験は見えにくい。

本研究では、子ども世代20名と保護者20名への質問票調査、および子ども世代6名と保護者7名への半構造化インタビューを実施した。分析の結果、子ども世代は日本語や学校生活に一定程度適応している一方で、制度仲介の負担、親子間の価値観差、教育期待へのプレッシャー、ルーツをめぐる揺らぎ、相談相手の不足を経験していた。保護者は子どもの適応を肯定的に捉えつつも、進路情報、文化継承、同じ背景を持つ友人とのつながりを必要としていた。

以上より、外国ルーツの子どもへの支援は、日本語指導に限定されず、親子間コミュニケーション、心理的支援、文化的承認、進路情報、同じ背景を持つ人との横のつながりを含む包括的な支援として捉える必要がある。

キーワード：ネパールルーツ，外国ルーツの子ども，親子間の認識差

Abstract

This study examines how youth of Nepali background growing up in Japan and their parents make sense of difficulties and support needs during the process of growing up. Previous support for children with foreign roots in Japan has mainly focused on Japanese language instruction and academic support. However, the experiences of children who do not face major difficulties in Japanese-language school life tend to remain invisible.

This study draws on questionnaire surveys with 20 youth and 20 parents, as well as semi-structured interviews with 6 youth and 7 parents. The findings show that although many youth were relatively well adapted to Japanese language and school life, they experienced burdens such as mediating school information for their parents, differences in values between parents and children, pressure from educational expectations, ambivalence about their roots, and a lack of people to consult. Parents generally viewed their children's adaptation positively, while also recognizing the need for information on educational pathways, heritage culture maintenance, and connections with peers of similar backgrounds.

These findings suggest that support for children with foreign roots should not be limited to Japanese language instruction. It should also include parent-child communication, psychological support, cultural recognition, career and educational information, and horizontal connections with people of similar backgrounds.

Key words: youth of Nepali background, children with foreign roots, parent-child perception gap

目次

1 問題意識と研究目的	7
1.1 研究背景	7
1.2 ネパールルーツの子どもをめぐる教育環境	9
1.3 外国ルーツの子どもをめぐる支援の現状	10
1.4 日本語支援を主たる課題としない層に着目する意義	11
1.5 ネパールルーツの子ども世代と保護者に着目する理由	12
1.6 研究目的と研究質問	12
1.7 本論文の構成	13
2 先行研究の検討と本研究の位置づけ	15
2.1 外国ルーツの子どもに対する政策的支援の現状	15
2.2 外国ルーツの子どもに対する教育支援研究	15
2.3 日本語能力だけでは捉えられない困難	17
2.4 滞日ネパール人家庭の学校適応と保護者の懸念	18
2.5 母国での教育経験・家族観・移住経験と教育期待	19
2.6 移民第二世代の文化適応研究	20
2.7 親子間の文化適応・認識差に関する研究	22
2.8 Significant Others と横・縦のつながりに関する研究	23
2.9 親子双方を対象とする調査研究の意義	23
2.10 先行研究の限界と本研究の位置づけ	24
3 理論枠組みと分析視角	25
3.1 分節化された同化理論	25
3.2 選択的文化適応——文化的両立の意味づけ	26
3.3 不協和的文化適応——親子間文化適応差	26
3.4 親子間の一致と不一致	27
3.5 重要な他者	28
3.6 本研究における「横のつながり」と「縦のつながり」	29
3.7 Alba and Nee の新同化理論	30
3.8 本研究の分析方針	31

4	調査方法	33
4.1	研究デザイン	33
4.2	調査対象者の選定	33
4.3	半構造化インタビューの対象と構成	34
4.4	質問票調査	34
4.5	きょうだいを含む家族事例	35
4.6	インタビューの実施方法	35
4.7	インタビュー項目	36
4.8	分析方法	37
4.9	研究者の言語的・文化的位置	37
4.10	倫理的配慮	38
5	子ども世代質問票からみる困難と支援ニーズ	39
5.1	子ども世代回答者の属性と分析の位置づけ	39
5.2	日本語の壁は主な困難だったのか	41
5.3	学校生活・社会適応に関する回答傾向	42
5.4	ルーツの意味づけ	43
5.5	親子関係・相談しやすさ	44
5.6	教育期待・プレッシャー	45
5.7	横のつながり	46
5.8	縦のつながり	48
5.9	将来展望	49
5.10	支援ニーズ	50
5.11	アイデンティティ類型への自己位置づけ	52
5.12	小括	54
6	保護者の認識と支援ニーズ	56
6.1	保護者回答者の属性と分析の位置づけ	56
6.2	保護者回答に共通する認識枠組み	58
6.3	日本語の壁は子どもの困難として認識されていたのか	60
6.4	学校生活・社会適応に関する保護者の認識	61
6.5	ルーツ・文化継承の意味づけ	62

6.6	親子関係・相談しやすさに関する保護者の認識	64
6.7	教育期待・進路不安・将来安定への願い	65
6.8	横のつながりに関する保護者の認識	66
6.9	縦のつながりに関する保護者の認識	68
6.10	将来展望に関する保護者の認識	69
6.11	保護者が必要としていた支援ニーズ	70
6.12	小括	73
7	親子ペア事例の比較	75
7.1	親子ペア分析の方法	75
7.2	事例A：安定した学校適応と文化継承をめぐる親子の認識差	75
7.3	事例B：学校移動と進路選択をめぐる親子間の認識差	79
7.4	事例C：安定的な学校適応と支援認識	83
7.5	事例D：姉妹間の教育経路の違いとルーツの意味づけ	86
7.6	事例E：日本語の壁では捉えられない小学生期の孤立と親子間の認識差	90
7.7	親子比較から見える共通パターン	94
8	考察	96
8.1	日本語ができることと「困っていない」ことの違い	96
8.2	日本語支援中心の支援枠組みの限界	97
8.3	分節化された同化理論から見た多様な適応経路	98
8.4	選択的文化適応と文化維持の意味づけ	100
8.5	新同化理論から見た境界の弱まりと再浮上	101
8.6	不協和的文化適応と親子間の価値観差	101
8.7	重要な他者と横のつながり	103
8.8	保護者世代の教育期待の両義性	104
8.9	支援ニーズの再定義	105
8.10	本研究の理論的含意	107
9	結論	109
9.1	研究結果のまとめ	109
9.2	研究質問への回答	110
9.3	本研究の学術的意義	111

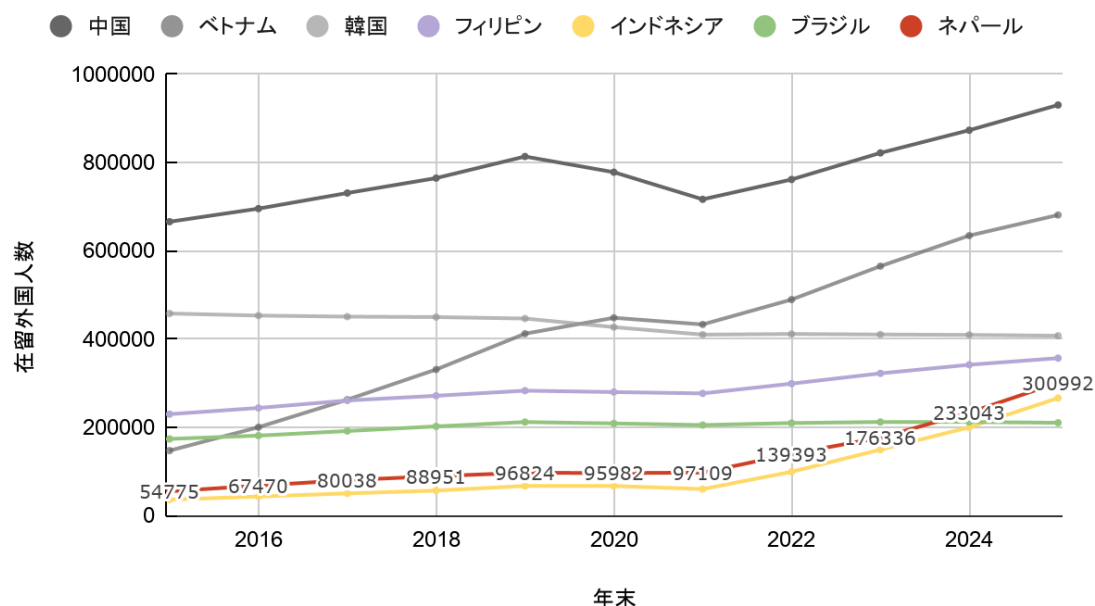
9.4	本研究の実践的意義	112
9.5	本研究の限界	113
9.6	今後の課題	114
文献		116
付録		119
付録1	若者向け事前質問・回答補足	119
付録2	保護者向け事前質問票・日英併記質問項目	123
付録3	若者インタビューガイド	134
付録4	保護者インタビューガイド	136

1 問題意識と研究目的

1.1 研究背景

近年、日本における在留外国人数は増加傾向にある。出入国在留管理庁の統計によれば、2025年6月末時点の在留外国人数は約396万人に達し、過去最多を記録した。なかでもネパール国籍者は273,229人であり、国籍・地域別では中国、ベトナム、韓国、フィリピンに次ぐ第5位に位置している。前年末からの増加数も40,186人と大きく、日本における在留外国人集団のなかでも、近年急速に規模を拡大している集団の一つである。

図1-1 上位国籍別在留外国人数の推移



出典：出入国在留管理庁「在留外国人統計」各年版より筆者作成。

こうしたネパール国籍者の増加は、単一の背景によって説明できるものではない。在留資格の内訳をみると、「留学」や「技術・人文知識・国際業務」といった修学・就労目的の在留資格のほか、「技能」や「家族滞在」なども含まれており、来日の経路は多様である。すなわち、留学や就労を契機として来日する者、特定の職能に従事する者、すでに日本で生活基盤を築いた家族のもとへ呼び寄せられる者など、ネパール国籍者の移住背景は重層的である。とりわけ、「家族滞在」や定住・永住に関わる在留資格の存在は、ネパール人の移住が個人単位の移動にとどまらず、家族単位的生活基盤形成を伴っていることを示している。そのため本研究では、子ども世代と関わりの深い在留資格として、「家族滞在」および定住・永住に関わる在留資格にも着目する。

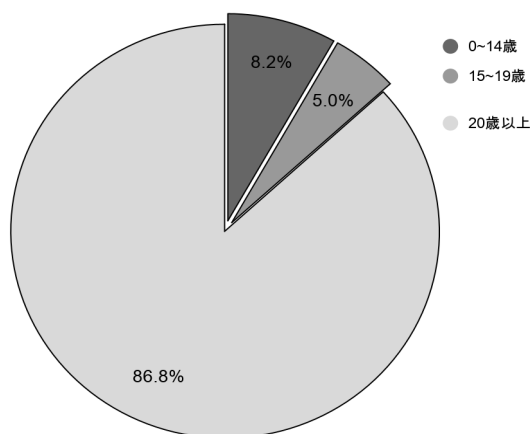


図 1-2 在留ネパール国籍者の年齢構成

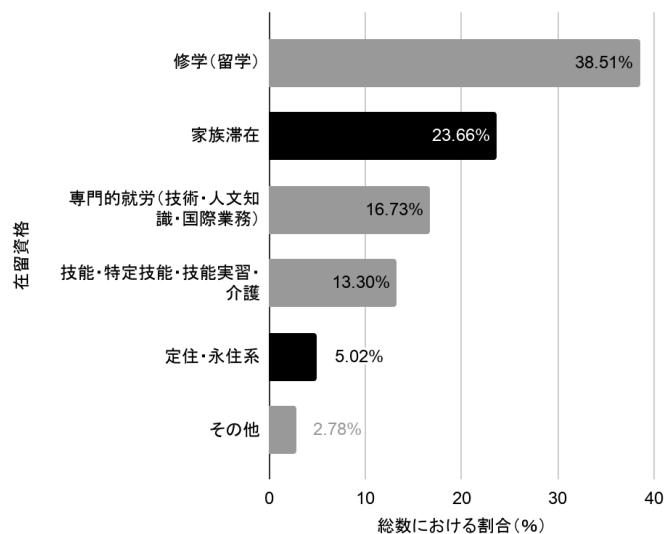


図1-3 在留ネパール国籍者の在留資格別構成

出典：出入国在留管理庁「在留外国人統計」令和7年6月末時点より筆者作成。

年齢構成に着目すると、学齢期を含む若年層の存在も確認できる。在留ネパール国籍者の年齢別集計では、0～4歳層が約1.2万人である一方、5～14歳層は約1万人弱にとどまっている。他方で、15～19歳層は約1.4万人であり、再び増加している。もっとも、15～19歳層には高校卒業後に来日した留学生等も含まれるため、この数値をそのまま学齢期の子ども増加として解釈することには慎重である必要がある。

公式統計のみから、こうした年齢構成の背景を特定することはできない。しかし、本研究の対象者のなかには、日本で生まれ育った者だけでなく、ネパールで一定期間教育を受けた後に来日した者や、日本とネパールの間を移動しながら成長した者も含まれていた。したがって本稿では、在留ネパール国籍者の年齢構成を、来日時期、本国での教育経験、日本の学校教育への編入過程を考えるための背景として位置づける。

以上のように、ネパール国籍者の増加は、単なる労働力移動や留学生の増加としてだけでなく、家族形成、子育て、教育経験の多様化と結びついている。本研究は、こうした背景のもとで、日本で育つネパールルーツの子ども世代とその保護者が、成長過程における困難や支援ニーズをどのように意味づけているのかを検討するものである。

1.2 ネパールルーツの子どもをめぐる教育環境

本稿における「ネパールルーツの子ども世代」とは、単に暦年上の未成年者を指す概念ではない。本研究では、移住を経験した保護者世代との関係において、日本で出生・成育した者、幼少期に来日した者、あるいはネパールで一定期間教育を受けた後に日本の学校教育を経験した者を含めて、「子ども世代」と呼ぶ。したがって、本研究の対象は、狭義の移民第二世代だけでなく、いわゆる1.5世代に近い経験を持つ者も含む。この呼称は、対象者の実年齢ではなく、移住を経験した保護者世代に対する社会的・世代的な位置を示すものである。

ネパールルーツの子ども世代が受ける教育の形態は一樣ではない。日本の公立学校や私立学校に通い、日本の教育制度の中で進学する子どもがいる一方で、インターナショナルスクールを選択する家庭も存在する。たとえば、Everest International School, Japan (EISJ) は、在日ネパール人ディアスポラの子どものための教育ニーズに応える学校として2013年に設立された。EISJはNurseryからGrade 12までの教育を行っており、ネパールのCurriculum Development Centerに基づくカリキュラムを用いている。このような学校の存在は、日本で育つネパールルーツの子どもたちが、必ずしも日本の公教育だけに包摂されているわけではないことを示している。

もっとも、インターナショナルスクールには学費や通学距離の問題が伴う。また、子どもの将来的な日本での進学や就職を見据え、日本語での教育や日本の学校文化への適応を重視して、公立学校を選択する家庭も少なくないと考えられる。そのため、ネパールルーツの子ども世代は、日本の公立学校、私立学校、インターナショナルスクール、ネパールの教育制度に基づく学校など、複数の教育経路の可能性の中に置かれている。

さらに、親の就労状況や家庭の事情によっては、子どもが一時的または長期的にネパールへ帰国し、祖父母など親族のもとで生活しながら現地の学校教育を受ける場合もある。したがって、ネパールルーツの子ども世代の教育経験は、日本国内の学校選択だけではなく、日本とネパールをまたぐ移動経験としても捉える必要がある。

こうした教育経路の多様性は、子ども世代の経験の多様性とも結びついている。日本で生まれ育ち、日本語を主たる生活言語として学校生活を送る子どももいれば、ネパールで一定期間教育を受けた後、日本の学校に編入する子どももいる。とくに中学生や高校生の時期に来日する場合、日本語習得、日本の学校文化への適応、受験制度の理解、進路選択が同時期に重なる可能性がある。親の移住や就労、家庭の事情によって来日時期が決まる場合、子どもは自らの意思だけではなく、家族の移動に伴って教育環境を大きく変化させられることになる。

このように、ネパールルーツの子ども世代の教育経験は、日本語能力や学校種だけでは捉えきれない。来日時期、本国での教育経験、日本の学校制度への編入過程、家庭の教育方針、文化継承への期待などが重なり合い、子ども世代の困難や支援ニーズを形づくっている。

1.3 外国ルーツの子どもをめぐる支援の現状

以下では、外国籍の子ども、日本国籍であっても外国につながる家庭背景を持つ子ども、および移民家庭の子ども世代を広く含む概念として、「外国ルーツの子ども」と表記する。外国ルーツの子どもをめぐるのは、日本語指導、不就学の防止、高校進学支援、進路情報提供などが重要な支援課題として扱われてきた。

文部科学省「令和7年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」によれば、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数は84,759人に達し、過去最高となっている。その内訳をみると、外国籍の児童生徒は73,313人、日本国籍の児童生徒は11,446人である。日本語指導が必要な児童生徒の増加は、外国ルーツの子どもへの教育支援が、現在もなお重要な政策課題であることを示している。

表1-1 日本語指導が必要な外国籍児童生徒の言語別人数

	平成20年度	平成22年度	平成24年度	平成26年度	平成28年度	平成30年度	令和3年度	令和5年度	令和7年度
日本語	-	-	-	-	-	-	1,929	2,671	2,526
英語	-	717	644	777	982	1,106	1,945	3,221	4,015
韓国・朝鮮語	-	751	624	614	627	595	466	482	513
スペイン語	3,634	3,547	3,480	3,576	3,600	3,788	3,714	3,668	3,442
中国語	5,831	6,154	5,515	6,410	8,204	9,712	9,939	11,862	17,821
フィリピン語	3,367	4,350	4,495	5,153	6,283	7,919	7,462	8,913	9,709
ベトナム語	-	1,151	1,104	1,215	1,515	1,845	2,702	3,756	6,014
ポルトガル語	11,386	9,477	8,848	8,340	8,779	10,404	11,956	12,026	11,933
ネパール語	-	-	-	-	-	-	-	-	5,100
その他の言語	4,357	2,364	2,303	3,113	4,345	5,386	7,506	11,119	12,240
合計	28,575	28,511	27,013	29,198	34,335	40,755	47,619	57,718	73,313

(人)

出典：文部科学省「令和7年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」より一部抜粋。なお、赤枠は筆者による強調である。

同調査では、日本語指導が必要な外国籍児童生徒の言語別集計において、「ネパール語」が独立した項目として示されている。令和7年度調査において、ネパール語を背景に持つ日本語指導が必要な外国籍児童生徒は5,100人であり、中国語、ポルトガル語、フィリピン語、ベトナム語に次ぐ規模である。これは、ネパール語を背景に持つ児童生徒が、従来の「その他の言語」に埋もれる周辺的な存在ではなく、日本語指導を必要とする児童生徒の中で一定の規模を持つ集団として認識され始めていることを示している。

日本語指導が必要な児童生徒をめぐる課題は、学校在籍中の日本語習得や授業理解にとどまらない。同調査によれば、令和7年度における公立の日本語指導が必要な高校生等の大学等進学率は41.2%であり、全高校生等の75.0%を大きく下回っている。また、就職者における非正規就職率は、日本語指導が必要な高校生等では49.6%であるのに対し、全高校生等では6.5%である。

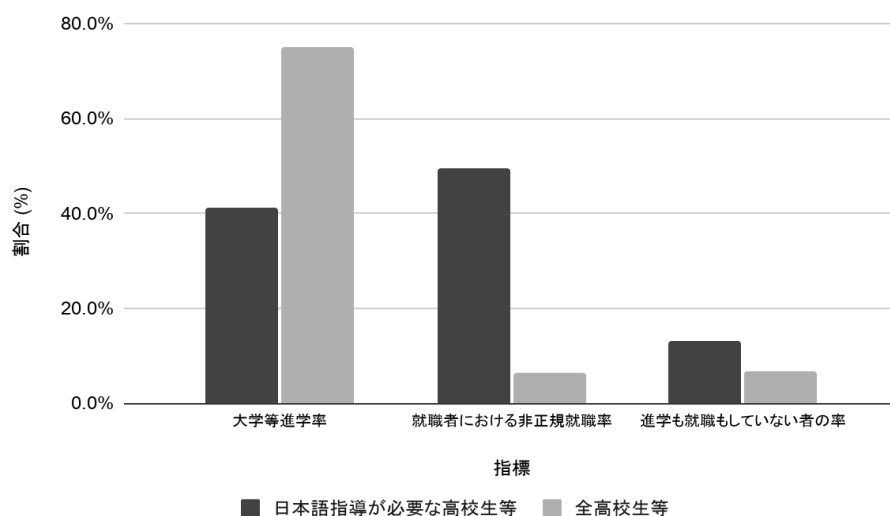


図1-4 日本語指導が必要な高校生等と全高校生等の進路状況の比較
 出典：文部科学省「令和7年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について」
 (令和8年5月) より筆者作成。

注：大学等進学率は「高等学校等を卒業した後、大学や専修学校などの教育機関等に進学等した生徒数」の割合を示す。
 非正規就職率は、就業者に占める「非正規又は一時的に就職した生徒数」の割合を示す。

これらの数値は、日本語指導が必要な児童生徒への支援が、学校在籍中の言語習得にとどまらず、高校卒業後の進路保障や雇用の安定にも関わる課題であることを示している。したがって、日本語指導、不就学防止、高校進学支援、進路情報提供といった支援は、引き続き不可欠である。

1.4 日本語支援を主たる課題としない層に着目する意義

一方で、外国ルーツの子どもを「日本語指導を必要とする存在」としてのみ捉えるならば、日本語による日常会話や学校生活に大きな困難を抱えていない層の経験は見えにくくなる。本研究では、こうした層を「日本語支援を主たる課題としない層」と呼ぶ。これは、日本語支援が不要であるという意味ではなく、困難の中心が日本語能力の不足としては現れにくい層を指す。

この層の子ども世代は、流暢な日本語を使い、日本の学校文化にも適応しているように見えるため、教員、支援者、保護者からも「困っていない」と見なされやすい。しかし、日本語能力だけでは捉えきれない困難が存在する可能性がある。その具体的な内実(制度仲介の負担、親子間の価値観差、アイデンティティの揺らぎなど)については、第2章の先行研究をもとに整理する。

したがって本研究は、日本語指導を必要とする層への支援課題を前提としつつ、あえて日本語支援を主たる課題としない層に焦点を当てる。これにより、「日本語ができること」と「困っていないこと」を区別し、外国ルーツの子どもへの支援を、言語支援や

進路保障に加え、親子間コミュニケーション、アイデンティティ形成、文化継承、心理的支援、横のつながり・縦のつながりへと拡張して捉える必要性を検討する。

1.5 ネパールルーツの子ども世代と保護者に着目する理由

本研究がネパールルーツの子ども世代と保護者に着目する理由は、第一に、日本におけるネパール国籍者の増加が著しいにもかかわらず、その子ども世代の教育経験や親子関係に関する研究が十分に蓄積されているとは言い難いからである。外国ルーツの子どもに関する研究では、中国、ブラジル、フィリピンなどの背景を持つ子どもたちや、日本語指導が必要な子どもたちに焦点が当てられることが多かった。これに対し、近年急増しているネパールルーツの子ども世代については、その教育経験、家族関係、進路選択、文化適応を具体的に明らかにする必要がある。

第二に、ネパール社会においては、教育達成、家族の将来、海外移動が結びついて語られる傾向があり、こうした背景は、在日ネパール人保護者の教育期待や進路観にも影響している可能性がある。親がよりよい教育や将来の安定を期待して日本に移住した場合、その期待は子どもへの教育投資や進路選択に反映される。一方で、子どもは日本の学校文化や若者文化の中で成長するため、親が望む進路や価値観と、本人が望む進路や生活のあり方との間にずれが生じることもある。この点については、第2章で、ネパールにおける教育期待、若者の海外志向、移住文化に関する先行研究を踏まえて検討する。

第三に、本研究では、子ども世代本人だけでなく保護者にも調査を行う。これにより、子ども本人が困難や支援ニーズをどのように語るのか、そして保護者がそれをどのように認識しているのかを比較することができる。子どもと保護者の語りを照合することで、親子間で共有されている困難と、共有されていない困難を明らかにし、支援のあり方をより具体的に検討することが可能になる。

以上の理由から、本研究は、日本で育つネパールルーツの子ども世代と保護者を対象に、困難と支援ニーズの意味づけを親子双方の視点から明らかにする。

1.6 研究目的と研究質問

本研究の目的は、日本で教育を受けて育ったネパールルーツの子ども世代とその保護者が、成長過程における困難と支援ニーズをどのように意味づけているのかを明らかにすることである。とくに、日本語支援を主たる課題としない層に着目し、表面的には学校生活や日本社会に適応しているように見える子ども世代が、親子関係、進路選択、教育期待、アイデンティティ、文化継承、同世代・世代間のつながりをどのように経験しているのかを検討する。

本研究の中心的な研究質問は、次の通りである。

日本で育つネパールルーツの子ども世代とその保護者は、成長過程における困難と支援ニーズをどのように意味づけているのか。

この問いを検討するため、以下の下位質問を設定する。

1. 子ども世代は、日本での学校経験および成長過程の中で、どのような経験を困難として語るのか。
2. 保護者は、子どもの教育、進路、人間関係、アイデンティティに関する困難をどのように認識しているのか。
3. 子ども世代と保護者の認識には、どのような一致と不一致がみられるのか。
4. その認識差は、文化適応、保護者世代の教育期待、家族内コミュニケーション、横のつながり・縦のつながりの観点からどのように説明できるのか。

1.7 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。第1章では、日本におけるネパール国籍者の増加、ネパールルーツの子ども世代をめぐる教育環境、日本語指導が必要な児童生徒をめぐる支援課題を整理し、本研究が日本語支援を主たる課題としない層に着目する意義を述べる。

第2章では、外国ルーツの子どもに対する教育支援研究、ネパール人家庭の教育・子育てに関する研究、移民第二世代の文化適応研究、親子間の認識差に関する研究を整理し、先行研究の到達点と限界を示す。第3章では、分節化された同化理論、選択的文化適応、不協和的文化適応、重要な他者、新同化理論を取り上げ、本研究の分析視角を提示する。

第4章では、本研究の調査方法を述べる。具体的には、親子ペアを対象とする半構造化インタビューと質問票調査の位置づけ、対象者の選定、分析方法、研究者の言語的・文化的位置、倫理的配慮について説明する。

第5章では、子ども世代質問票の回答分布を中心に、自由記述および補足的なインタビューの語りを参照しながら、学校生活、親子関係、教育期待、ルーツの意味づけ、横・縦のつながり、支援ニーズを整理する。第6章では、保護者向け質問票の回答分布を中心に、保護者が子どもの経験や支援ニーズをどのように認識しているのかを整理する。第7章では、親子ペアの質問票回答とインタビューの語りを比較し、認識の一致と不一致を検討する。

第8章では、調査結果を理論枠組みと照合し、日本語支援を越えた支援ニーズについて考察する。第9章では、本研究の結果をまとめ、学術的意義、実践的意義、限界、今後の課題を述べる。

2 先行研究の検討と本研究の位置づけ

2.1 外国ルーツの子どもに対する政策的支援の現状

近年、日本社会における外国人住民の増加に伴い、学校教育の場においても外国ルーツの子どもの存在がより可視化されている。こうした子どもたちは、日本語による日常会話が十分にできない場合から、日常会話には困らないものの学習言語に課題を抱える場合、さらには日本語能力自体には大きな困難が見られない場合まで、多様な状況に置かれている。

文部科学省は、公立小・中・高等学校等における日本語指導が必要な児童生徒の在籍状況、指導状況、進路状況等を把握するため、「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」を継続的に実施している。同調査において「日本語指導が必要な児童生徒」とは、日本語による日常会話が十分にできない児童生徒だけでなく、日常会話ができても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じている児童生徒も含むものとして捉えられている。この定義は、外国ルーツの子どもの困難が、日本語能力の程度に応じて多層的に存在していることを示している。

こうした政策的支援は、日本語を十分に習得していない子どもや、学習言語に困難を抱える子どもにとって不可欠である。しかし、政策的支援が日本語指導や学習参加の保障を中心に設計されている場合、日本語による日常生活や学校生活に大きな困難を抱えていない子どもは、支援対象として見えにくい。日本語能力がある程度高い子どもは、学校では「普通に馴染んでいる」と見なされやすく、進路や親子関係、アイデンティティに関わる困難が表面化しにくい可能性がある。

したがって、政策的支援の現状を確認することは、日本語指導の重要性を否定するためではなく、その支援枠組みでは捉えきれない困難を検討するために必要である。本研究は、この見えにくい層に焦点を当てる。

2.2 外国ルーツの子どもに対する教育支援研究

これまでの外国ルーツの子どもに関する教育支援研究は、日本語指導、学習支援、学校適応、不就学、高校進学、保護者支援など、多岐にわたる観点から蓄積されてきた。中矢ほか（2006）は、異文化を背景とする子どもたちへの教育支援において、学校、地域、支援者が果たす役割に注目し、子どもを取り巻く教育環境を重層的に捉える必要性を示している。この知見は、外国ルーツの子どもの課題が、個人の日本語習得だけではなく、学校制度、家庭、地域社会の資源との関係の中で形成されることを示している。

また、外国ルーツの子どもへの支援では、子ども本人への日本語指導や学習支援だけでなく、保護者の教育参加や地域社会による支援体制も重要な論点とされてきた。大野・原（2016）は、外国につながる子どもの保護者の教育参加に着目し、移住女性が「母」として学校や子どもの教育に関わる際の困難を論じている。川本（2020）や矢野（2020）も、外国にルーツを持つ親子への支援を、学校だけでなく地域社会や支援体制の課題として検討している。さらに、清水（2021）は、外国人の子どもたちの高校・大学進学率に着目し、日本の教育格差の中で外国ルーツの子どもが置かれる不利を論じている。これらの研究は、外国ルーツの子どもへの支援を、学校在籍中の日本語指導に限定せず、保護者支援、地域資源、進路保障を含む問題として捉える必要性を示している。

本研究では、これまでの研究関心がどのような主題に集中しているのかを把握するため、CiNii Researchを用いて文献検索を行った。検索語は、「外国人」'AND'「児童」'AND'「支援」および「外国人」'AND'「生徒」'AND'「支援」とし、重複を除いた220件の文献を対象として主題別に分類した。なお、本分類は網羅的なシステマティックレビューではなく、教育支援研究の大まかな傾向を把握するための予備的整理である。

表2-1 外国ルーツの子どもに対する教育支援研究の主題別分類

分類	件数	割合
日本語指導・日本語教育・教科学習支援	81	36.8%
制度・政策・支援体制	53	24.1%
その他（特別支援・教員養成等）	31	14.1%
進路・キャリア支援	15	6.8%
保護者・親子関係	15	6.8%
文化・母語継承	14	6.4%
心理・アイデンティティ・孤立	10	4.5%
差別・いじめ・排除	1	0.5%
合計	220	100%

出典：CiNii Research検索結果を重複除外後、筆者が分類。

表2-1が示す通り、最も大きな比重を占めるのは「日本語指導・日本語教育・教科学習支援」に関する研究であり、全体の36.8%を占めている。これは、日本語能力が授業理解や学校生活への参加の前提条件となるため、教育現場における実践上の必要性和密接に結びついていると考えられる。また、「制度・政策・支援体制」も24.1%を占めており、外国ルーツの子どもへの支援研究が、個別の教育実践だけでなく、制度的な受入体制の整備とも関わってきたことがわかる。

一方で、「心理・アイデンティティ・孤立」に関する文献は4.5%、「文化・母語継承」は6.4%にとどまっている。日本語が流暢であり、学校適応が良好に見える子どもたちであっても、内面では違和感やアイデンティティの揺らぎを抱えている可能性がある。しかし、こうした内面的な課題や、言語習得以外の発達の側面に関する研究は、日本語指導や制度整備に比べると、相対的に扱われにくかったと考えられる。

このように、教育支援研究の関心は、政策的に可視化されやすい日本語指導や学習参加の保障と重なりながら形成されてきたと考えられる。そのことは、日本語支援の基盤を強化してきた一方で、心理的負担、アイデンティティ、親子関係といった、制度上把握されにくい課題を相対的に見えにくくしてきた可能性もある。したがって、本研究では、日本語支援の重要性を前提としつつも、外国ルーツの子どもの経験を日本語能力の有無だけに還元せず、心理、アイデンティティ、親子関係、文化適応といった広い視点から捉え直す。

2.3 日本語能力だけでは捉えられない困難

これまでの教育支援研究が示唆するように、外国ルーツの子どもの困難は、日本語能力の有無だけでは十分に捉えられない。日本語能力が高い外国ルーツの子どもは、学校生活において目立った困難を示さない場合がある。日本語で友人と会話し、授業に参加し、日本の学校文化に馴染んでいるように見える子どもは、教師や周囲の大人から「適応している」と判断されやすい。しかし、そうした子どもが内面的な困難を抱えていないとは限らない。

第一に、日本語ができることと、自分の経験や悩みを適切に言語化できることは異なる。日常会話ができて、進路に関する不安、親との価値観の違い、アイデンティティの揺らぎ、差別や違和感の経験を誰かに相談できるとは限らない。むしろ、日本語ができる子どもは、周囲から「日本人と同じようにできる」と見なされることで、自らの困難を説明しにくくなる場合があると考えられる。

第二に、日本語ができる子どもは、家庭内で言語と制度の仲介者としての役割を担うことがある。保護者が日本語や日本の学校制度に十分に慣れていない場合、子どもは学校からの連絡、提出書類、学校行事、進路情報、面談内容について、内容を理解し、保護者に伝える立場に置かれやすい。宮本（2026）は、こうした子どもを「ことばのヤングケアラー」と捉え、子どもが言語面で家族を支える状況に注目している。宮本によれば、子どもは通訳や付き添いなど多様な役割を担い、とりわけ医療通訳への支援ニーズが高いことが示されている。また、「ことばのケア」は感情労働としての側面を持ち、親子の役割逆転を通じて、子どもの成長に負担をもたらす可能性も指摘されている。

この議論は、外国ルーツの子どもが担う言語仲介を、単なる通訳や手続きの手伝いとしてではなく、家族関係や子どもの心理的負担と結びついた問題として捉えるうえで重要である。Martinez et al. (2009) は、ラテン系移民家庭における子どもの言語仲介が、家族内の関係性や子どもの行動・情緒的適応と関わることを示している。対象地域や移民集団は本研究とは異なるが、子どもが家庭内で言語・制度の仲介を担うことを、単なる通訳行為ではなく、家族関係や心理的負担と結びついた経験として捉えるうえで参考になる。

第三に、外国ルーツの子どもは、学校や友人関係の中で、自分のルーツをどのように意味づけ、どの程度表出するかを調整している場合がある。西川・劉（2020）は、日本で育つ外国ルーツの子ども・若者にとって、日本語の習得だけでなく、ルーツを持つ国や地域の言語、すなわち継承語を学ぶことも重要であると指摘している。家庭文化や言語、外見の違いは、子どもが周囲との違いを意識する契機となりうる。その過程で、自分がどこに属しているのか、どの文化をどのように大切にするのかについて、アイデンティティの揺らぎが生じることも考えられる。

第四に、親子間の認識差が生じやすい。保護者は、子どもが日本語を話し、学校に通い、友人関係を築いていることを見て、順調に適応していると捉える場合がある。しかし子ども本人は、親に心配をかけたくない、説明しても伝わらない、親の価値観で判断されたくないと感じ、悩みを語らないことがある。この場合、保護者の認識と子ども本人の経験の間にはずれが生じる。

このように、日本語能力だけでは、外国ルーツの子どもの経験を十分に理解することはできない。日本語の壁が相対的に低い場合であっても、制度仲介、親子関係、進路選択、アイデンティティ、横・縦のつながり、相談資源の不足といった困難が残る可能性がある。本研究が着目するのは、この「日本語ができるからこそ見えにくい困難」である。

2.4 滞日ネパール人家庭の学校適応と保護者の懸念

ネパールルーツの子どもに関する研究は、日本における外国ルーツ研究全体の中ではまだ多くない。しかし近年、在日ネパール人家庭の増加に伴い、ネパール人の子どもの学校適応や家庭の教育経験に注目する研究が現れている。

Banstola and Inoue（2023）は、日本の小・中学校に通うネパール移民児童の学校適応上の困難について、保護者の懸念をもとに質的に検討している。同研究では、ネパール人保護者への調査から、言語や文化の違いが、子どもの友人関係、学校での所属感、給食、学習支援、いじめ、情緒的苦痛に影響していることが示された。特に、子どもが学校で感じる孤立感や排除経験、家庭での学習支援の難しさ、親が学校制度や日本語に十分対応できないことによる不安が重要な論点となっている。

Inoue and Banstola（2025）は、韓国、フィリピン、ベトナムにルーツを持つ保護者を対象に、日本の学校に通う移民児童の心理的ウェルビーイングに影響する適応課題を検討している。同研究は、ネパール人家庭を対象としたBanstola and Inoue（2023）の問題意識を他のアジア系移民家庭に広げたものとして位置づけられる。同研究では、言語障壁、友人関係、社会的つながり、文化的統合、いじめや差別、教師の支援、保護者の願いが主要なテーマとして示されている。特に、子どもが日本の学校で友人を作るこ

と、心理的に安心できること、教師が教室外でも子どもを見守ること、保護者が母語で相談できることの重要性が指摘されている。

これらの先行研究は、日本の学校における移民児童の困難を、単に日本語能力や学力の問題としてではなく、社会的関係、情緒的安定、心理的ウェルビーイングの問題として捉えている点で重要である。また、保護者の視点から、子どもの学校適応をめぐる心配や支援ニーズを明らかにしている点も、本研究にとって重要な先行知見である。

一方で、これらの研究は、主として保護者の認識を通じて子どもの学校適応を捉えている。そのため、子ども本人が自らの経験をどのように意味づけているのか、また保護者の認識と子ども本人の語りがどのように一致し、どのようにずれるのかについては、十分に検討されていない。本研究は、これらの知見を引き継ぎつつ、ネパールルーツの子ども世代本人と保護者双方を対象に、学校適応だけでなく、親子関係、教育期待、アイデンティティ、支援ニーズの意味づけを比較する。

2.5 母国での教育経験・家族観・移住経験と教育期待

ネパールルーツの子ども世代の経験を理解するためには、子ども本人の学校生活だけでなく、保護者世代の移住経験や母国での教育経験、家族観といった背景を踏まえる必要がある。とりわけ、ネパール社会において教育達成や海外移動がどのように意味づけられてきたのかを確認することは、在日ネパール人保護者の教育期待を理解するうえで重要である。

ネパールにおいて、教育は子ども個人の進路選択にとどまらず、家族の将来や若者の自己形成と深く結びついている。Basnet (2022) は、ネパールの若年女性の教育から就労への移行において、親の教育選択や介入が子どもの進路形成や将来像に影響していることを示している。親の関与は、子どもに教育機会を与える一方で、本人の希望や自己形成を制約する場合もありうる。この点は、親の教育期待が子どもにとって支えにも負担にもなりうることを示している。

Kölbel (2013) は、カトマンズにおける高等教育機会の拡大と、その中で若者が経験する世代差や将来展望の複雑化を論じている。同研究は、高等教育へのアクセス拡大が若者に新たな機会をもたらす一方で、教育達成と安定した将来との結びつきが必ずしも自明ではなくなっている状況を指摘している。すなわち、教育を受けることが直ちに安定した職業や社会的上昇につながるとは限らず、若者は複数の期待や不確実性の中で進路を選択している。

Bista, Sharma and Raby (2019) も、ネパールの高等教育を、政策、質保証、雇用可能性、学生移動、ディアスポラなどの観点から整理しており、ネパールの教育が国内制度だけでなく、グローバルな移動や将来形成と結びついていることを示している。とり

わけ、高等教育が国内の雇用機会だけでなく、海外留学や国外就労といった移動の可能性と結びついて語られる点は重要である。

ネパールにおける教育期待は、国内労働市場への不安とも関係している。International Labour Organization (2015) によると、ネパールの若者は成人よりも失業しやすく、就労している場合でもインフォーマルな雇用に置かれやすいことが指摘されている。同報告書は、若者の雇用見通しの乏しさが国外への一時的移動の拡大と結びついていることを示しており、ネパールにおける若者の将来形成が国内の教育・雇用機会だけでは完結しにくいことを示唆している。

さらに、ネパールでは、教育達成と国外移動が結びついた将来像も形成されている。Sharma, Ghimire and Pandit (2025) は、ネパール中南部の地方都市チトワンにおける若者と保護者の教育・海外就労／留学志向を検討し、若者本人だけでなく保護者も、子どもの将来的な海外移動を現実的な選択肢として捉えていることを示している。また、Koirala (2025) は、ネパールにおける移住行動が、経済的必要だけでなく、地位意識や将来機会を逃すことへの不安、周囲の成功事例の共有と結びつく「移住文化」として形成されていると論じている。これらの研究は、海外志向が個人の選択にとどまらず、社会的に共有・再生産される傾向を持つことを示している。

ただし、これらの先行研究を踏まえたとしても、在日ネパール人保護者が一様に同じ価値観や教育期待を抱いていると捉えるべきではない。ネパール社会において教育達成と国外移動が結びついて語られる傾向は確認されるものの、その内容や強さは家庭ごとに異なる。したがって本研究では、教育達成、家族の将来、海外移動の結びつきを、保護者世代が来日以前から持ちうる社会的背景として位置づけつつ、それが個別の家庭においてどのように再構成されているのかを検討する。保護者の教育期待は子どもの将来を思う願いであると同時に、子どもにとっては責任感やプレッシャーとして経験される場合もある。本研究では、このような教育期待の両義性を、親子双方の語りから検討する。

2.6 移民第二世代の文化適応研究

第1章で述べたように、本研究における「子ども世代」は、移住を経験した保護者世代との関係において位置づけられる。そのため、本研究の対象は、狭義の移民第二世代だけでなく、1.5世代に近い経験を持つ者も含むが、いずれも移民第二世代研究の視点から分析することが有効である。

移民第二世代研究において、同化は中心的な概念の一つである。古典的な同化論では、移民やその子ども世代が、時間の経過とともに受け入れ社会の文化や生活様式を身につけ、主流社会へ組み込まれていく過程が重視されてきた。しかし、その後の研究では、同化は単一の過程ではなく、文化、制度参加、社会関係、自己認識を含む多面的な過程

として捉え直されてきた。Gordon (1964) は、同化を文化的同化、構造的同化、婚姻、アイデンティティ、市民的同化などの複数の次元に分けて整理し、同化を一面的な文化変化ではなく、多層的な社会参加の過程として捉える視点を示した。

Berry (1997, 2005) の文化適応理論は、出身文化の維持と受け入れ社会への参加という二つの軸から、移民やマイノリティの文化適応を捉える枠組みを提示した。Berry は、この二つの軸の組み合わせによって、統合、同化、分離、周縁化という四つの文化適応戦略を整理している。この枠組みは、移民第二世代の経験を、単に受け入れ社会に近づくか否かではなく、出身文化との関係をどのように維持し、受け入れ社会にどのように参加するのかという観点から捉える点で重要である。日本社会に馴染みながらネパール文化や家族価値を維持する子ども世代の経験を考えるうえでも、この視点は有用である。

一方、Portes and Zhou (1993) およびPortes, Fernández-Kelly and Haller (2009) の分節化された同化理論は、移民第二世代の適応が一般的な過程ではなく、家庭の社会的資源、親の教育経験、学校環境、地域社会、差別経験、重要な他者の存在などによって複数の経路に分かれることを示している。同理論は、移民第二世代の経験を、主流社会への単線的な同化としてではなく、社会的条件や関係性によって異なる適応経路として捉える点に特徴がある。この視点は、同じネパールルーツであっても、家庭、学校、友人関係、相談資源の有無によって困難や支援ニーズの意味づけが異なる可能性を考えるうえで重要である。

日本語圏では、清水ほか (2021) は、日本社会における移民第二世代をエスニック・アイデンティティの観点から比較し、ホスト国文化志向型、出身国文化志向型、ハイブリッド志向型、マージナル型といった類型を提示している。この視点は、日本社会への適応と出身文化への帰属を二項対立としてではなく、複数の文化的所属の組み合わせとして捉えるうえで有用である。

また、Alba and Nee (2003) の新同化理論は、移民第二世代が時間の経過とともに受け入れ社会の主流制度や日常生活に参加し、エスニックな境界が弱まっていく過程に注目している。分節化された同化理論が、社会的条件によって適応経路が分岐することを強調するのに対し、新同化理論は、主流社会との境界がどのように緩み、あるいは特定の場面で再び意識されるのかという、より動態的な過程に注目する点に特徴がある。

以上の先行研究を踏まえ、本研究では、ネパールルーツの子ども世代の経験を、日本社会への単線的な同化としてではなく、家庭、学校、親子関係、文化的背景、支援資源の中で形成される多様な適応過程として捉える。なお、本研究で実際に用いる理論枠組みの詳細については、第3章で整理する。

2.7 親子間の文化適応・認識差に関する研究

移民家庭においては、親世代と子ども世代の間で、受け入れ社会への適応速度や文化的価値観に差が生じやすい。子どもは学校教育や友人関係を通じて受け入れ社会の言語や文化に早く馴染む一方で、親は母国で形成された価値観、教育観、家族観を維持しながら生活する場合が多い。この差は、親子間の文化適応ギャップとして現れる。

Harris and Chen (2023) は、移民家庭における親子間の文化適応ギャップが、親子関係や子どもの心理的適応に影響しうることを示している。同研究では、子どもが受け入れ社会の言語や文化に比較的早く適応する一方で、親が母国で形成された価値観や生活様式を維持する場合、親子間に認識や行動のずれが生じやすいことが指摘されている。こうしたずれは、親子間のコミュニケーションの困難や相互理解の不足を引き起こし、子どもの心理的ストレスや葛藤の要因となる可能性がある。特に、進路選択、交友関係、生活習慣といった日常的な場面では、親と子どもの期待や判断基準の違いが顕在化しやすい。

ただし、親子間の文化適応ギャップは、それ自体が常に問題を生むわけではない。Shukla et al. (2025) は、親子間の文化適応ギャップに関する既存研究を整理し、ギャップの影響は、親子間のコミュニケーションの質、家族関係の安定性、学校や地域社会からの支援の有無によって左右されることを指摘している。すなわち、親子間に文化的な差が存在していても、その差が家庭内でどのように語られ、調整され、支えられるかによって、子どもや家族関係への影響は異なる。

本研究でいう親子間の「認識差」は、文化適応ギャップそのものと同義ではない。文化適応ギャップが、主として親子の文化的志向や受け入れ社会への適応度の差を指すのに対し、本研究の認識差は、学校生活、孤立感、進路、教育期待、ルーツの意味づけ、支援ニーズをめぐって、親子が同じ経験をどのように異なって理解しているのかに注目する概念である。

この視点は、日本における外国ルーツ家庭の親子関係を捉えるうえでも重要である。保護者は、子どもが学校に通い、日本語を話し、友人関係を築いていることから、適応は順調であると捉える場合がある。しかし子ども本人は、学校で感じた違和感や孤立感、親に説明しにくい悩み、進路に関する不安を抱えていることがある。反対に、保護者は子どもの将来や教育に強い不安を持っている一方で、子ども本人はそれを大きな問題とは感じていない場合もある。このように、親子間の認識差は、困難の有無だけでなく、何を困難と見なすのか、どのような支援を必要と考えるのかという意味づけの違いとして現れる。

以上を踏まえ、本研究では、親子間の文化適応差を、単なる対立や葛藤としてではなく、移住経験、教育期待、家族内コミュニケーション、子どもの成長段階の中で生じる認識のずれとして捉える。特に、子ども本人と保護者の語りを比較することで、子どもの適応状況を親子がどのように捉えているのか、進路や教育期待をどのように意味づけ

ているのか、困難や支援ニーズが親子間でどの程度共有され、あるいはずれているのかを明らかにする。

2.8 Significant Others と横・縦のつながりに関する研究

移民第二世代の適応や進路形成において、家庭や学校だけでなく、重要な他者 (significant others) の存在は大きな意味を持つ。Portes et al. (2009) は、移民第二世代の適応過程において、親、教師、友人、地域の大人、ロールモデルなどの存在が、情報、励まし、進路モデル、所属感を提供しうることを指摘している。

日本の文脈でも、外国につながる若者への支援において、学校外・家庭外の関係性や居場所の重要性が論じられている。徳永・角田・海老原 (2023) は、都立定時制高校における三者協働の実践を通じて、外国につながる若者の居場所づくりとキャリア支援を検討し、多様なアクターとの協働や長期的視点による支援の重要性を指摘している。

本研究では、こうした重要な他者の存在を、同世代や似た背景を持つ友人との「横のつながり」と、年上の先輩や大人、ロールモデルとの「縦のつながり」として整理する。ただし、これらを単なる支援資源としてではなく、子ども世代と保護者が困難や支援ニーズをどのように意味づけるかに関わる関係的資源として捉える。

2.9 親子双方を対象とする調査研究の意義

外国ルーツの子どもに関する先行研究の多くは、子ども本人、保護者、教師、支援者など、いずれか一つの立場から経験を捉えてきた。もちろん、それぞれの立場からの研究には重要な意義がある。しかし、子ども本人の経験と保護者の認識は必ずしも一致しない。保護者は、子どもが学校に通い、日本語を話し、友人関係を築いていることから、順調に適応していると捉える場合がある。一方で、子ども本人は、学校での違和感、親に話しにくい悩み、進路選択をめぐる葛藤、ルーツの意味づけについて、保護者とは異なる形で経験している可能性がある。

親子双方を対象とする調査には、同じ出来事や経験が、親子間でどのように共有され、どのようにずれているのかを明らかにする意義がある。特に、日本語支援を主たる課題としない子ども世代の場合、外からは困難が見えにくいため、保護者の認識と子ども本人の語りを照合することが重要となる。本研究では、親子ペア調査を通じて、困難と支援ニーズの意味づけにおける一致と不一致を検討する。

2.10 先行研究の限界と本研究の位置づけ

以上、外国ルーツの子どもに対する政策的支援、教育支援研究、日本語能力だけでは捉えられない困難、ネパールルーツ家庭の学校適応、ネパール社会における教育期待と移住背景、移民第二世代の文化適応、親子間の認識差、横・縦のつながりに関する先行知見を整理した。

先行研究は多大な知見を蓄積してきたが、以下の三点に課題が残されている。第一に、外国ルーツの子どもへの支援研究は、日本語指導や学習支援に厚い蓄積を持つ一方で、日本語能力に大きな困難を抱えていない層の経験は相対的に見えにくい。第二に、在日ネパール人家庭に関する研究では、保護者の視点から子どもの学校適応や支援ニーズを捉える研究が現れているが、子ども本人の経験と保護者の認識を比較する研究は十分に蓄積されていない。第三に、外国ルーツの子どもに必要な支援は、日本語指導だけでなく、親子間コミュニケーション、進路情報、心理的支援、文化継承、横・縦のつながりにも及ぶにもかかわらず、これらを親子双方の語りから包括的に検討した研究は限られている。

本研究は、日本で育つネパールルーツの子ども世代と保護者に焦点を当て、この空白を埋めることを目的とする。とくに、日本語の壁を主たる困難として経験していない層に着目し、親子双方の質問票回答と半構造化インタビューを通じて、困難と支援ニーズの意味づけを明らかにする点に、本研究の独自性がある。

3 理論枠組みと分析視角

3.1 分節化された同化理論

第2章で整理したように、移民第二世代の適応をめぐる研究では、古典的同化論から、文化適応理論、分節化された同化理論、新同化理論へと議論が展開してきた。本章では、その研究史全体を再度詳述するのではなく、本研究の分析において各理論をどのように用いるのかを整理する。

本研究は、日本で教育を受けて育ったネパールルーツの子ども世代とその保護者が、成長過程における困難と支援ニーズをどのように意味づけているのかを検討するものである。そのため、子ども世代の経験を、日本社会への単線的な同化として捉えるのではなく、家庭環境、学校経験、親子関係、文化的背景、相談資源などの複数の条件の中で理解する必要がある。

そこで本研究では、Portes and Zhou (1993) およびPortes, Fernández-Kelly and Haller (2009) の分節化された同化理論を中心的な分析視角として用いる。分節化された同化理論は、移民第二世代の適応が一般的な同化過程をたどるのではなく、家庭の社会経済的資源、親の教育水準、学校環境、地域社会、エスニック・コミュニティ、差別経験、重要な他者の存在などによって、複数の経路に分岐することを示す理論である。

ただし、本研究は、米国の移民第二世代研究を背景に形成された分節化された同化理論を、日本で育つネパールルーツの子ども世代にそのまま当てはめるものではない。とりわけ、同理論が想定する「人種構造にもとづくアンダークラスへの下方同化」という中心的なメカニズムは、人種的マイノリティの位置づけや社会階層構造がアメリカとは異なる日本の文脈に、そのまま移し替えられるものではない。本研究が同理論から引き継ぐのは、こうした特定の下方同化メカニズムそのものではなく、適応が単一の経路をたどらず、複数の社会的条件によって分岐するという、より一般的な視座である。本研究では同理論を、対象者を特定の適応類型に分類するためではなく、同じネパールルーツであっても、家庭環境、学校経験、友人関係、経済状況、相談資源の有無によって、困難や支援ニーズの意味づけが異なりうることを捉えるための分析視角として用いる。

したがって、本研究において重要なのは、ネパールルーツの子ども世代が「適応しているか否か」を判断することではない。むしろ、日本語能力や学校生活への適応が一定程度確認される場合であっても、その背後で、どのような親子関係、教育期待、文化的帰属感、友人関係、支援資源が経験を形づくっているのかを検討することが重要である。

3.2 選択的文化適応——文化的両立の意味づけ

分節化された同化理論の中で、本研究にとって重要な概念の一つが、選択的文化適応である。選択的文化適応とは、子ども世代が受け入れ社会に適応しながらも、親世代の言語、文化、家族の価値観を一定程度維持する適応のあり方を指す。これは、移民第二世代が出身文化を失って主流社会へ一方的に同化するのではなく、複数の文化的資源を組み合わせながら生活する可能性を示す概念である。

選択的文化適応の視点に立つと、受け入れ社会への適応と出身文化の維持は、必ずしも対立するものではない。子ども世代は、学校や職場などでは受け入れ社会の言語や制度に参加しながら、家庭や親族関係、エスニック・コミュニティの中では、親世代の文化や価値観と関わり続けることがある。このような場合、文化的背景は、適応を妨げる要因としてだけでなく、所属感、安心感、家族関係、将来展望を支える資源としても機能しうる。

ただし、選択的文化適応を検討する際には、受け入れ社会への適応と出身文化の維持が「意識的な使い分け」として経験されている場合と、「自然な併存」として経験されている場合を区別する必要がある。選択的文化適応という語は、子ども世代が複数の文化的資源を選択的に用いることを示すが、その「選択」は常に明確に自覚されたものとは限らない。

ある子ども世代にとっては、家庭、学校、友人関係、エスニック・コミュニティといった場面ごとに、言語やふるまい、文化的所属を意識的に調整することが重要な経験となる。この場合、選択的文化適応は、場面に応じた使い分けや切り替えとして現れる。一方で、別の子ども世代にとっては、受け入れ社会への参加と出身文化との関わりが、特別に意識された選択ではなく、日常生活の中で自然に併存している場合もある。この場合、本人は文化を「使い分けている」とは認識していなくても、結果として複数の文化的文脈の中で生活している。

本研究では、後述するABCD質問のA「日本社会に馴染みながら、ネパールの文化や家族の価値観も維持している」を、選択的文化適応に近い経験を捉える補助的項目として位置づける。ただし、Aを選んだことをもって、対象者が理論上の選択的文化適応に該当すると判断するわけではない。むしろ、その両立が意識的な調整として経験されているのか、日常生活の中で自然に併存しているのかを検討する。

3.3 不協和的文化適応——親子間文化適応差

選択的文化適応と並んで重要なのが、不協和的文化適応である。不協和的文化適応とは、子ども世代が受け入れ社会の言語や文化に親世代よりも早く適応し、その結果、親子間に価値観やコミュニケーションのずれが生じる過程を指す。

移民家庭では、子ども世代は学校教育や友人関係を通じて、受け入れ社会の言語、制度、文化に早く接触する。一方、親世代は、母国で形成された教育観、家族観、価値観を維持しながら、受け入れ社会で生活することがある。そのため、親子の間で、学校生活、進路選択、友人関係、家庭内の役割、将来観などをめぐって、判断基準や期待に違いが生じる場合がある。

不協和的文化適応は、単に親子の価値観が異なるということだけを意味しない。子ども世代が受け入れ社会の制度や言語をより早く理解することで、家庭内における役割が変化する場合がある。たとえば、学校制度や進路情報を子どもが親に説明する、書類や制度を子どもが媒介する、親の期待を子どもが受け止めながら自分の進路を考えるといった状況が生じうる。このような場合、子ども世代は、受け入れ社会と家庭の間をつなぐ存在となる一方で、その役割が心理的負担となる可能性もある。

本研究では、ABCD質問のB「自分の方が親よりも日本社会に早く馴染んだことで、親との価値観や考え方に距離が生まれた」を、不協和的文化適応の視点から検討できる補助的項目として位置づける。特に、親子間の価値観の違い、進路や教育期待をめぐるずれ、制度理解の差、親に悩みを話しにくい感覚などを分析する際に、この概念を参照する。

ただし、本研究では、不協和的文化適応を、親子間のずれが必ず生じるという前提として用いるのではない。親世代の在日年数、日本語能力、学校制度への理解、家庭内の対話、地域社会や支援資源の存在によって、親子間の文化適応差の現れ方は異なる。したがって、本研究では、不協和的文化適応がみられるかどうかだけでなく、それがどの領域で生じ、どの領域では生じないのか、またどのような条件のもとで強まるのか、あるいは弱まるのかにも注目する。

3.4 親子間の一致と不一致

本研究の中心的な分析視角の一つは、子ども世代と保護者の認識の一致と不一致である。親子は同じ家庭に属し、同じ出来事を共有しているように見えるが、その経験の意味づけは必ずしも一致しない。

保護者は、子どもの学校生活、友人関係、進路、言語能力、文化的所属について、親としての立場から理解しようとする。一方、子ども世代は、学校や友人関係の中で経験したことを、本人の立場から意味づける。そのため、同じ出来事であっても、保護者にとっての「問題」と、子ども本人にとっての「問題」は異なる場合がある。また、保護者が困難として認識していないことを、子ども本人が困難として経験している場合もあれば、保護者が心配していることを、子ども本人は大きな困難とは捉えていない場合もある。

教育期待をめぐっても、親子間の意味づけはずれやすい。保護者にとって、勉強や進路への期待は、子どもの将来を思う愛情や支援として語られることが多い。しかし、子ども本人にとっては、それが支えであると同時に、プレッシャーとして経験される場合がある。つまり、同じ親の言葉や行動であっても、保護者側の意図と子ども側の受け止めは異なる可能性がある。

本研究では、親子間の一致と不一致を、抽象的な親子関係の良し悪しとしてではなく、具体的な経験領域ごとに検討する。具体的には、日本語の壁、学校生活や孤立感、ルーツ・文化継承、親子間コミュニケーション、教育期待と進路、横・縦のつながり、支援ニーズについて、子ども世代と保護者の語りや質問票回答を照合する。

また、親子間の不一致を、単純な対立や問題として捉えるのではない。むしろ、親子の経験がどのようにずれているのか、そのずれがどのような背景から生じているのかを分析する。この視点は、支援ニーズを理解するうえでも重要である。支援ニーズは、本人が明確に言語化しているものだけに限られない。また、保護者が必要だと考える支援と、子ども本人が必要だと考える支援が一致するとは限らない。したがって、本研究では、困難や支援ニーズを個人の経験としてだけでなく、親子間でどのように共有され、または共有されていないのかという関係的な問題として捉える。

3.5 重要な他者

移民第二世代の適応や進路形成においては、家庭や学校だけでなく、重要な他者の存在が大きな意味を持つ。Portes et al. (2009) は、移民第二世代の適応過程において、親、教師、友人、地域の大人、ロールモデルなどの significant others が重要な役割を果たすことを指摘している。本稿では以下、significant others を「重要な他者」と訳して用いる。

本研究では、重要な他者を、子ども世代の適応や進路形成を一方向的に支援する存在としてではなく、子ども世代が自らの経験を意味づける際に参照する関係的資源として捉える。重要な他者は、情報源、相談相手、ロールモデル、文化的背景を肯定する存在として機能しうる。ただし、その意味は対象者によって異なり、同じ背景を持つ人であることが常に必要条件となるわけではない。

また、重要な他者は、子ども世代だけでなく保護者にとっても意味を持つ。移民家庭の保護者は、受け入れ社会の学校制度や進路制度を十分に理解しにくい場合がある。そのため、同じ背景を持つ保護者、すでに進学や就職を経験した第二世代、地域の支援者などが、保護者にとっての情報源や相談相手となる可能性がある。

したがって、本研究では、重要な他者を、子ども世代と保護者の双方にとっての関係的資源として位置づける。そのうえで、同世代や似た背景を持つ友人との関係を「横の

つながり」，年上の先輩や大人，ロールモデルとの関係を「縦のつながり」として整理する．

3.6 本研究における「横のつながり」と「縦のつながり」

本研究では，重要な他者の概念を踏まえ，同じ世代や似た背景を持つ友人との関係を「横のつながり」，年上の先輩や大人，ロールモデルとの関係を「縦のつながり」として整理する．

横のつながりとは，同じネパールルーツや外国ルーツを持つ友人，同じような家庭環境や学校経験を持つ同世代との関係を指す．このつながりは，悩みを共有する場になるだけでなく，自分の経験を相対化したり，自分だけが特別に異なるわけではないと感じたりする契機となりうる．また，横のつながりは，文化的背景を肯定的に捉えるための支えにもなりうる．

ただし，同じ背景を持つ友人がいることが，必ずしも深い相談関係を意味するわけではない．横のつながりは，相談，共感，安心，遊び，情報交換など，複数の意味を持ちうる．したがって，本研究では，横のつながりを単に「ある／ない」で捉えるのではなく，それがどのような関係性として経験されているのかを検討する．

縦のつながりとは，進路や将来について相談できる年上の先輩，大学生，社会人，地域の大人，教師，支援者などとの関係を指す．特に，受け入れ社会の学校制度や進路制度を経験した先輩や大人は，子ども世代にとって将来を具体的に考えるための参考先となりうる．また，保護者にとっても，進路情報や学校制度を理解するための相談相手となる可能性がある．

本研究では，横のつながりと縦のつながりを，子ども世代本人だけでなく保護者にとっての支援資源としても検討する．子ども世代にとっては，共感，安心感，ロールモデル，進路情報の獲得に関わる一方，保護者にとっては，日本の学校制度や進路情報を理解し，子どもの経験を捉え直すための資源となりうる．

したがって，本研究では，横のつながりと縦のつながりを，単なる支援資源としてではなく，子ども世代と保護者が困難や支援ニーズをどのように意味づけるかに関わる要素として分析する．とりわけ，子ども本人にとって必要なつながりと，保護者にとって必要なつながりが一致するのか，あるいはずれるのかに注目する．

3.7 Alba and Nee の新同化理論

本研究では、分節化された同化理論を中心的な理論枠組みとしつつ、Alba and Nee (2003) の新同化理論も補助的に参照する。新同化理論は、移民やその子ども世代が、時間の経過とともに受け入れ社会の主流制度や日常生活に参加し、エスニックな境界が弱まっていく過程に注目する。

ただし、分節化された同化理論と新同化理論は、先行研究において常に整合的な立場として扱われてきたわけではない。分節化された同化理論は、移民第二世代が必ずしも主流社会へ収斂せず、社会的条件によっては下方への同化を含む複数の経路をたどりうることを強調する立場として提起されてきた。これに対し新同化理論は、時間の経過とともにエスニックな境界が緩み、主流社会との差異が縮小していく傾向を重視する。本研究では、これら二つの理論を、どちらが妥当かを判定するためではなく、前者を適応経路の分岐を捉える視角として、後者を境界の変化という時間的側面を捉える視角として、異なる焦点を持つ補完的なレンズとして併用する。

新同化理論は、同化を一方的な文化喪失としてではなく、社会参加や制度参加、境界の再編として捉え直す点に特徴がある。すなわち、移民第二世代が受け入れ社会の学校、職場、地域社会、人間関係の中で生活するにつれて、出身文化との差異が常に強く意識されるわけではなく、日常生活におけるエスニックな境界が弱まる場合がある。

本研究では、ABCD質問のC「年齢が上がるにつれて、ネパール人であることが日常生活や進路に与える影響が小さくなった」を、新同化理論が論じるエスニックな境界の弱まりを考える手がかりとして位置づける。ただし、Cに近い回答は、必ずしもエスニックな境界が客観的に弱まったことを意味しない。それは、本人の生活段階の変化、周囲の環境の変化、ルーツの受け止め方の変化として現れる場合もある。

また、Cに近い経験がある場合でも、それはルーツの意味が完全に消えたことを意味するわけではない。日常生活では意識されにくくなっている、家族関係、文化行事、進路、外見によるまなざし、国籍や制度上の場面などで、ルーツが再び意味を持つ可能性がある。

したがって、本研究において新同化理論は、一方向的な同化の枠組みとしてではなく、分節化された同化理論が示す多様な適応経路や条件差を補完する視点として位置づける。具体的には、エスニックな境界が弱まる過程や、日常生活の中でルーツがどの程度意識されているかを検討するために用いる。

なお、本研究で中心的な分析視角とする分節化された同化理論と、補助的に参照する新同化理論は、先行研究においてしばしば対立的なパラダイムとして議論されてきた。前者が社会的条件による適応経路の「分岐や分断」を強調するのに対し、後者は主流社会への社会制度的な参加に伴う「境界の緩み」を重視する立場だからである。

本研究においては、これら双方の立場を二者択一として捉えるのではなく、異なる焦点を持つ補完的なレンズとして併用する。具体的には、分節化された同化理論を「家庭環境や支援資源の差によって生じる『適応経路の条件差』を捉える空間的・構造的なレンズ」として位置づけ、新同化理論を「ライフステージの変化に伴う『エスニックな境界の動態（弱まりと再浮上）』を捉える時間的・プロセス的なレンズ」として再定位する。これにより、日本語支援を主たる課題としない層の多面的な経験を、一方向的な同化／分離の図式に回収することなく記述することが可能となる。

3.8 本研究の分析方針

本研究では、以上の理論枠組みを、対象者を固定的に分類するためではなく、子ども世代と保護者の語りを読むための補助線として用いる。まず、子ども世代の文化適応を、日本社会への適応の程度だけで捉えるのではなく、ネパール文化や家族価値への帰属感との関係の中で把握する。そのため、Berryの文化適応理論および清水ほかによる移民第二世代のエスニック・アイデンティティ類型を参考にしながら、本研究では「日本社会・学校文化への適応感」と「ネパール文化・家族価値への帰属感」という二つの軸から、子ども世代の経験を整理する。

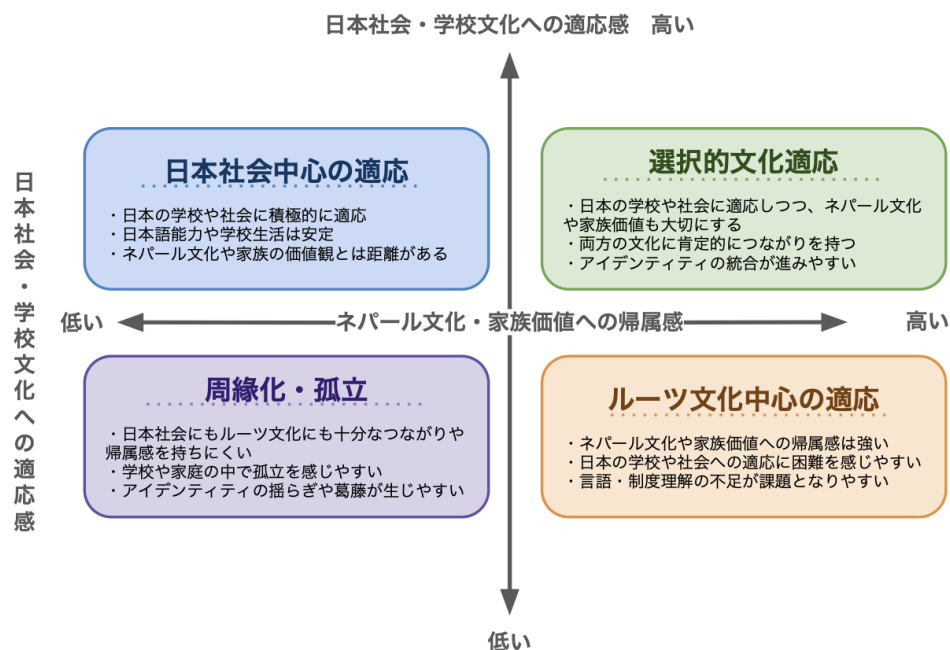


図3-1 本研究における適応感とルーツ・家族価値への帰属感の分析枠組み
出典：Berry（1997, 2005）および清水ほか（2021）を参考に筆者作成。

ただし、本研究では、子ども世代をこの四象限のいずれかに固定的に分類することを目的とはしない。同一の子どもであっても、学校、家庭、進路、友人関係、アイデンテ

ィティの場面によって、日本社会への適応感やルーツへの帰属感の現れ方は変化しうる。本研究では、このような場面ごとの揺らぎに注目し、日本語能力や学校適応の高さだけでは見えにくい困難、親子間の認識差、支援ニーズを検討する。

また、本研究では、質問票において、ネパールルーツの子どもの経験を説明する四つの選択肢を提示した。Aは、日本社会への適応とネパール文化・家族価値の維持が両立している経験を捉えるための項目であり、選択的文化適応に近い経験を検討する手がかりとなる。Bは、子ども世代と親世代の間に文化適応や価値観のずれが生じる経験を捉えるための項目であり、不協和的文化適応の視点から検討することができる。Cは、年齢や生活段階の変化に伴って、ネパールルーツが日常生活や進路に与える影響が小さくなる経験を捉えるための項目であり、新同化理論が論じる境界の弱まりを考える手がかりとなる。Dは、同じネパールルーツであっても、家庭、学校、友人、経済状況、相談相手などの条件によって適応や進路が異なることを捉えるための項目であり、分節化された同化理論全体と関わる。

ただし、ABCD質問は、対象者をA, B, C, Dのいずれかに分類するための尺度ではない。むしろ、対象者自身がどの説明に共感し、どの説明には違和感を持つのかを確認するための補助的な問いである。また、一人の対象者が複数の選択肢に共感することもありうる。したがって、本研究では、ABCD質問の回答を固定的な類型として扱うのではなく、インタビューの語りと照合しながら、既存の移民第二世代理論がネパールルーツの子ども世代と保護者の経験をどこまで説明できるのか、またどの部分が説明しきれないのかを検討する。

以上の方針にもとづき、本研究では、第5章で子ども世代質問票の回答傾向を整理し、第6章で保護者質問票の回答傾向を整理する。そのうえで、第7章では親子ペア事例を比較し、親子間の一致と不一致を検討する。第8章では、これらの結果を本章で示した理論枠組みと照合し、日本語支援を主たる課題としないネパールルーツの子ども世代と保護者に必要な支援のあり方を考察する。

4 調査方法

4.1 研究デザイン

本研究は、日本で育つネパールルーツの子ども世代とその保護者を対象に、質問票調査と半構造化インタビューを組み合わせた探索的な混合研究である。調査は、2026年4月から6月にかけて実施した。

本研究の中心は半構造化インタビューによる質的分析にあり、質問票調査は、親子間で認識差が現れやすい領域を把握し、インタビューで得られた語りを補助的に解釈するために用いる。

本研究は、質問票回答を母集団に一般化することを目的としない。むしろ、子ども世代と保護者が、日本語、学校生活、親子関係、教育期待、ルーツの意味づけ、横・縦のつながり、支援ニーズをどのように捉えているのかを探索的に把握することを目的とする。そのうえで、親子ペアの回答と語りを照合し、同じ経験が親子間でどのように共有され、あるいはずれているのかを検討する。

4.2 調査対象者の選定

調査対象は、ネパールルーツの子ども世代20名と、現在日本で教育を受けている子どもを持つ保護者20名である。子ども世代には、小学校高学年、中学生、高校生、大学生、社会人が含まれる。第1章で述べたように、本稿における「子ども世代」とは、年齢上の子どものみを指すものではなく、移住を経験した保護者世代との関係における世代的位置を示す言葉である。そのため、成人している対象者についても「子ども世代」と表記する。

対象者は、ネパール人コミュニティ内の人的つながりを通して募集した。そのため、対象者は日本で生活するネパールルーツの子ども世代と保護者全体を代表するものではない。本研究では、この点を前提とし、対象者の語りから一般的傾向を断定するのではなく、具体的な経験の意味づけを丁寧に分析する。

対象者の選定にあたっては、日本語による日常生活や学校生活において、日本語の壁を主たる困難として経験していない者を中心に含めた。ただし、日本語に関する経験を分析から除外するものではない。本研究では、日本語ができることによって周囲から「困っていない」と見なされた経験や、家庭内で制度や言語の仲介を担った経験にも着目する。

4.3 半構造化インタビューの対象と構成

半構造化インタビューは、子ども世代6名と保護者7名の計13名を対象として実施した。インタビュー時間は、一人あたり約45分から60分であった。

表4-1 インタビュー対象者の概要

事例	子ども世代ID	親世代ID	関係性	調査重点項目
事例A	Y01	P01, P02	娘・母親・父親	小学校期の孤立・制度仲介・親子認識差
事例B	Y10	P10	息子・母親	環境移動・進路選択・制度理解
事例C	Y03	P03	息子・母親	教育期待・進路不安・縦のつながり
事例D	Y07, Y16	P15, P16	娘・娘・父親・母親	きょうだい差・文化継承・境界経験
事例E	Y08	P17	娘・母親	小学校期の孤立・制度仲介・親子認識差

出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

インタビュー対象者の選定に際しては、子ども世代が置かれているライフステージの違いを重視した。具体的には、高校受験期、大学受験期、大学進学後、社会人としての経験を振り返る段階など、進路上の異なる段階にある子ども世代と保護者を含めた。これは、高校選択、大学・学部選択、受験へのプレッシャー、進学後の評価、就職、自立、将来の居住地など、子どもの成長段階によって親子の心配事や支援ニーズが異なる可能性があるためである。

本研究における親子ペア分析は、各段階の一般的傾向を示すことを目的とするものではない。むしろ、異なる進路移行期にある親子の語りを比較し、日本語能力だけでは捉えにくい困難や支援ニーズが、どのような場面で現れるのかを検討するための事例配置として位置づける。

4.4 質問票調査

質問票調査は、子ども世代20名、保護者20名を対象に実施した。質問票は、インタビュー分析を補助し、親子間の認識差が生じやすい領域を把握するために用いた。また、親子ペアで回答を照合できる場合には、個人名ではなく親子照合用コードを用いて対応関係を確認した。

子ども世代向け質問票では、主に以下の領域について尋ねた。

1. 日本語に関する経験

2. 学校生活および日本社会への適応
3. 孤立感と周囲からの理解
4. ネパールルーツの意味づけ
5. 親子間コミュニケーション
6. 教育期待とプレッシャー
7. 横のつながり
8. 縦のつながり
9. 将来展望
10. 必要とする支援

保護者向け質問票では、子ども世代向け質問票と対応する項目に加え、日本の学校制度や受験制度への理解、学校とのコミュニケーション、保護者自身の日本語能力、教育期待、文化継承、保護者自身に必要な支援について尋ねた。

質問票の多くの項目では、1から5までの選択肢を用いた。1は「そう思わない」、5は「とてもそう思う」に対応する。また、選択肢では捉えきれない経験や意見を把握するため、自由記述欄も設けた。なお、質問票上では対象者にわかりやすい表現として「若者向け質問票」としたが、本文中では「子ども世代質問票」と表記する。

4.5 きょうだいを含む家族事例

本研究には、同じ家庭から複数のきょうだいに参加する事例も含まれる。きょう代いは、それぞれを一人の対象者として分析すると同時に、一つの家族事例としても扱う。

同じ家庭で育ったきょうだいであっても、出生順、性別、学校経験、受験経験、家庭内での役割によって、親からの期待や日本社会での経験が異なる可能性がある。また、年長のきょうだいと年少のきょうだいでは、日本で教育を受けた時期や、ネパール人コミュニティを取り巻く環境も異なりうる。

そのため、きょうだいを含む事例では、同一家庭内における経験差と、教育環境や価値観の変化を検討する。ただし、きょうだい間の違いをすべて出生順や時代変化によって説明するのではなく、個人の性格、学校環境、友人関係なども踏まえて慎重に解釈する。

4.6 インタビューの実施方法

インタビューは、2026年4月から6月にかけて実施した。事前に作成したインタビューガイドに沿いながら、対象者の回答に応じて追加質問を行う半構造化インタビューを採用した。質問の順序は固定せず、対象者の年齢、学校段階、来日時期、教育経験、質問票回答の内容に応じて調整した。

インタビューでは、子ども世代と保護者に対して、それぞれの立場から成長過程における経験を尋ねた。子ども世代には、学校生活、友人関係、孤立感、ネパールルーツを意識した経験、進路選択、親からの教育期待、親への相談のしやすさ、同世代や年上の人とのつながり、当時必要だった支援について尋ねた。保護者には、子どもの学校生活や困難をどのように認識していたか、子どもから悩みを聞いていたか、親としてどのような支援を行ったか、日本で子どもを教育することへの期待や不安、ネパール語やネパール文化の継承について尋ねた。

子ども世代の個別回答を保護者に提示することはせず、保護者の個別回答も子ども世代には提示しなかった。親子の回答は、分析段階で研究者が対応させて比較した。

インタビューは対象者の同意を得たうえで録音し、後に文字起こしを行った。使用言語は対象者が話しやすい言語を優先し、日本語またはネパール語で実施した。必要に応じて、インタビューの途中で両言語を切り替えることも認めた。

4.7 インタビュー項目

インタビューでは、質問票調査の回答内容を踏まえつつ、付録に示したインタビューガイドを参考にして聞き取りを行った。主な質問項目は以下の通りである。

【子ども世代への主な質問項目】

- ・ 出生地、来日時期、日本・ネパールでの学校経験
- ・ 日本語習得、学校書類や制度情報を親に説明した経験
- ・ 学校生活、友人関係、孤立感
- ・ ネパールルーツを意識した経験、ネパール語・文化への関わり
- ・ 親への相談のしやすさ、親子間の価値観の違い
- ・ 親からの教育期待、進路選択、プレッシャーの有無
- ・ 同じ背景を持つ友人との横のつながり
- ・ 年上の先輩や相談相手との縦のつながり
- ・ 当時必要だった支援、日本語支援以外に必要だった支援

【保護者への主な質問項目】

- ・ 日本で子どもを育てる中で感じた不安や困難
- ・ 子どもの学校生活、友人関係、孤立感への認識
- ・ 子どもの日本語や学校制度への適応に関する認識
- ・ 学校書類、連絡、受験情報などで困った経験
- ・ ネパール語やネパール文化の継承に関する考え
- ・ 子どもとの相談関係、価値観の違い
- ・ 子どもの勉強や進路への期待
- ・ 同じ背景を持つ友人、保護者同士、先輩・メンターとのつながり
- ・ 子どもや保護者自身に必要だった支援

なお、実際のインタビューでは、これらの項目をすべて同じ順序で尋ねたわけではない。対象者が自分の経験を具体的に語れるよう、必要に応じて時期、場面、関係性、その時の感情を確認しながら聞き取りを行った。

4.8 分析方法

インタビュー・データの分析には、テーマ分析を用いた。録音データを文字起こしし、研究質問に関連する発言を繰り返し読みながらコード化した。

分析においては、日本語の壁、学校生活、孤立感、ルーツの意味づけ、親子間コミュニケーション、教育期待、横・縦のつながり、支援ニーズを主要なテーマとして設定した。これらのテーマは、データから全面的に帰納抽出されたものではなく、質問票およびインタビュー項目の設計段階で依拠した理論的枠組み（分節化された同化理論等）に立脚してあらかじめ設定されたものである。テーマ分析（Thematic Analysis）の方法論的展開において、Braun and Clarke（2023）は、データ主導で潜在的なテーマを帰納的に生成するアプローチ（Reflexive TA）と、理論的関心や既存の知見に基づく枠組みを適用する立場（Codebook型アプローチ）を区別している。本研究は、子ども世代と保護者の語りを同一の軸で対応づけて照合・比較するという研究設計上の要請から、後者のCodebook型に近い立場を自覚的に採用している。ただし、設定したテーマに語りのデータを機械的にあてはめる（Top-downな）分類に終始するのではなく、データへの柔軟な感応性（Reflexiveな姿勢）を保持し、インタビューの記述から新たに見出された独自の論点や文脈の揺らぎについても、排さずボトムアップに救い上げて分析対象に含めるプロセスを担保した。

また、分析は、第一に子ども世代の語り、第二に保護者の語り、第三に親子ペアの比較、第四にきょうだいや異なるライフステージ間の比較という順序で行った。親子の認識に差がみられた場合には、保護者が子どもを理解していなかったと単純に結論づけるのではなく、親子間コミュニケーション、教育期待、移住経験、学校環境、家族内での役割との関係から、その差が生じた背景を検討した。

質問票の回答については、インタビュー結果を補助する資料として用いた。親子の回答を照合できる事例、子どもと父母を比較できる事例、子どものみまたは保護者のみから回答を得た事例を区別して整理した。そのうえで、回答分布の傾向を確認しながら、個別の語りを解釈するための手がかりとして用いた。

4.9 研究者の言語的・文化的位置

研究者は、日本語とネパール語の双方を理解することができる。そのため、対象者が自らの経験をより表現しやすい言語で語ることを可能とし、通訳者を介さずに、言葉の意味や文化的な含意を把握できる。

一方で、研究者が対象者と文化的・言語的背景を共有し、一部の対象者と面識があることは、発言を理解したつもりになることや、研究者自身の経験を対象者の経験に重ねて解釈する危険も伴う。そのため、意味が不明確な発言についてはインタビュー中に確認し、調査後には研究者自身の印象や解釈を記録することで、研究者の立場がデータの生成と分析に及ぼす影響を省察した。

ネパール語による発言を論文で引用する際には、発言の文脈やニュアンスを確認したうえで日本語へ翻訳した。日本語に直接置き換えることが難しい表現については、必要に応じて原語や補足説明を付す。

4.10 倫理的配慮

調査前には、研究の目的、調査内容、データの利用方法、匿名化の方法について説明した。参加は対象者の自由意思に基づくものであり、答えたくない質問には答えなくてよいこと、調査の途中で中止できること、参加しない場合にも不利益が生じないことを伝えた。

未成年者が参加する場合には、本人の意思を確認するとともに、保護者の同意を得た。保護者が同意した場合であっても、本人が参加を希望しない場合には調査を行わないこととした。

録音データ、文字起こしデータ、質問票の回答は、研究目的以外には使用しない。対象者の語りを分析する際には、研究上重要な背景情報を保持しつつ、個人が特定される可能性のある固有名詞、学校名、勤務先名、居住地域、具体的な人名は削除または一般化した。また、少人数のコミュニティにおいては、複数の属性の組み合わせによって個人や家族が推測される可能性があるため、必要に応じて年齢、学校段階、教育経路の記述を範囲化・抽象化した。

親子、父母、きょうだいなど、同一家庭から複数の者が参加する場合も、それぞれの個別回答を他の家族には共有しないこととした。また、分析結果を記述する際には、個人や家族が特定されないよう、引用や属性情報の提示範囲に配慮した。

5 子ども世代質問票からみる困難と支援ニーズ

本章では、子ども世代20名を対象とした質問票回答をもとに、日本で育つネパールルーツの子ども世代が、日本語、学校生活、親子関係、教育期待、ルーツの意味づけ、横・縦のつながり、将来展望、支援ニーズをどのように捉えているのかを整理する。本研究の質問票調査は、統計的一般化を目的とするものではなく、インタビュー分析を補完し、子ども世代の経験にどのような傾向がみられるのかを探索的に把握するために実施したものである。

以下では、各カテゴリーの冒頭に質問票回答の分布を示し、その後に、グラフから読み取れる傾向を整理する。さらに、数値だけでは読み取りにくい回答の背景については、自由記述、半構造化インタビュー、補足的インタビューの語りを用いて確認する。ただし、本章では個別の親子ペア事例を詳述するのではなく、子ども世代全体にみられる傾向と論点をカテゴリー別に把握することを目的とする。親子間の認識差については第7章で親子ペアごとに検討し、質問票の全体的な比較は第8章で行う。

なお、上記の半構造化インタビューとは別に、社会人の子ども世代2名に対して、それぞれ約30分の補足的インタビューを実施した。この補足インタビューは、個別事例として分析するためではなく、社会人となった子ども世代が、子ども期や学生期の経験をどのように振り返っているのかを確認するために実施したものである。とくに、年齢層によって回答傾向に差がみられる項目や、社会人層で高く、または低く示された項目については、この補足インタビューの語りを参考にしながら解釈する。

5.1 子ども世代回答者の属性と分析の位置づけ

子ども世代質問票の回答者20名には、中学生、高校生、大学生、社会人が含まれている。年齢層は、10代前半が3名、10代後半が9名、20代前半が3名、20代後半が3名、30代前半が2名であった。性別は、女性14名、男性6名である。出生地は、日本生まれが9名、ネパール生まれが11名であり、日本で出生・成育した者と、ネパールで生まれた後に日本で教育を受けた者の双方が含まれている。

現在の所属は、中学生3名、高校生6名、大学生4名、社会人7名であった。教育経験については、日本の学校のみを経験した者が12名、日本とネパールの学校を経験した者が5名、日本・インターナショナルスクール・ネパールの学校を経験した者が2名、日本とインターナショナルスクールを経験した者が1名であった。このことから、本研究の子ども世代回答者は、日本で育った層だけでなく、日本とネパール、あるいはインターナショナルスクールを含む複数の教育経路を経験した層を含んでいる。

家庭内使用言語については、日本語とネパール国内の言語を併用する者が11名、ネパール国内の言語のみを使用する者が6名、日本語のみを使用する者が2名、日本語・ネパール国内の言語・英語を併用する者が1名であった。なお、ここでいう「ネ」は、ネパール語に限らず、ネワール語、マイティリ語などネパール国内で使用される複数の言語を含む。そのため、ネパールルーツの子ども世代であっても、家庭内で用いる言語と、ネパール人コミュニティ内で用いる言語が一致しない場合がある。

表5-1 子ども世代質問票回答者の概要

ID	年齢層	性別	出生地	現在の所属	教育経験	家庭内使用言語
Y01	10代前半	女	日本	中学生	日	ネ
Y02	10代前半	女	日本	中学生	日	日・ネ
Y03	10代前半	男	日本	中学生	日	日・ネ
Y04	10代後半	女	ネパール	高校生	日	日
Y05	10代後半	女	日本	高校生	日	日・ネ
Y06	10代後半	女	日本	高校生	日	日・ネ
Y07	10代後半	女	日本	高校生	日	日・ネ
Y08	10代後半	女	日本	大学生	日	ネ
Y09	10代後半	女	日本	大学生	日・ネ	日・ネ
Y10	10代後半	男	ネパール	高校生	日・イ・ネ	日・ネ
Y11	10代後半	男	日本	高校生	日・ネ	ネ
Y12	10代後半	女	ネパール	大学生	日	ネ
Y13	20代前半	男	ネパール	大学生	日	日・ネ
Y14	20代前半	男	日本	社会人	日	日
Y15	20代前半	女	ネパール	社会人	日	ネ
Y16	20代後半	女	ネパール	社会人	日・ネ	日・ネ
Y17	20代後半	女	ネパール	社会人	日・イ・ネ	ネ
Y18	20代後半	女	ネパール	社会人	日・イ	日・ネ・英
Y19	30代前半	女	ネパール	社会人	日・ネ	日・ネ
Y20	30代前半	男	ネパール	社会人	日	日・ネ

(教育経験における「日」は日本、「ネ」はネパール、「イ」はインターナショナルスクールを意味する。また、使用言語の「日」は日本語、「ネ」はネパール国内で使用されている、ネパール語、マイティリ語、ネワール語を指し、「英」は英語を意味する。)

出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

このような対象者の多様性を踏まえると、子ども世代の経験を「日本語ができるかできないか」、あるいは「日本社会に適応しているかしていないか」という単純な軸だけで整理することは難しい。本章では、回答者の多様性を前提としつつ、質問票の回答分布と語りを通じて、どの領域で困難や支援ニーズが表れやすいのかを確認する。

5.2 日本語の壁は主な困難だったのか

日本語の壁に関する回答分布（質問11-14）

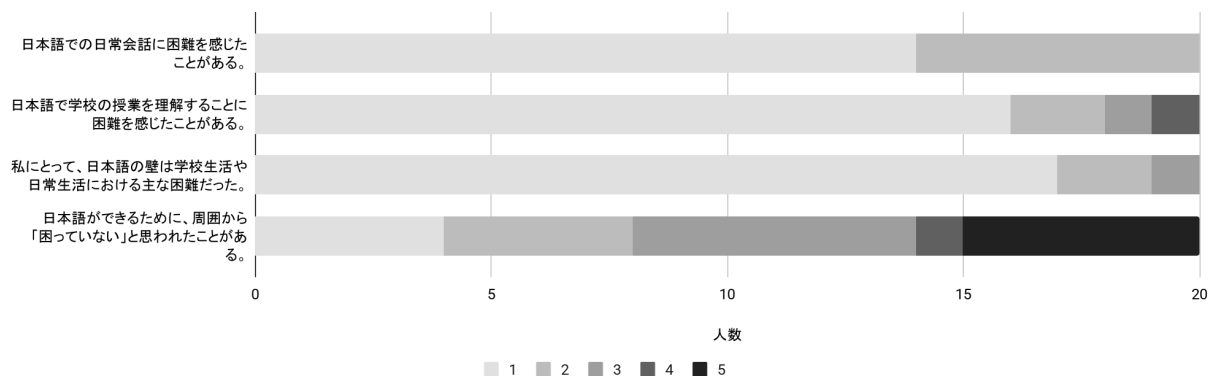


図5-1 日本語に関する回答分布
出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

この結果は、日本語の壁が相対的に低いことが、困難の不在を意味するわけではないことを示している。むしろ、日本語ができることによって、学校や家庭の中で説明役や仲介役を担う場合がある。半構造化インタビューでは、学校書類や制度情報を保護者に説明する負担について、次のような語りがあった。

Y10インタビュー：

「周りの子はみんな親に学校の書類を渡して終わりなのに、自分は理解して、説明しないといけなかった。」

Y08インタビュー：

「親が住所とか直筆で書けないから、親のふりをして自分で書くしかなかった。」

これらの語りからは、日本語の困難が「日本語ができないこと」だけでなく、「日本語ができるために担うこと」としても現れることがうかがえる。本章では、日本語能力の不足そのものではなく、日本語能力があるからこそ見えにくくなる負担に注目する。

5.3 学校生活・社会適応に関する回答傾向

学校生活・社会適応に関する回答では、日本社会や日本の学校文化に馴染んでいるとする回答が多くみられた。多くの回答者は、日本の学校に通い、友人関係を築き、日常生活を送ること自体には大きな困難を感じていない。一方で、孤立感や、周囲に自分の背景を理解されにくいと感じた経験を示す回答もみられた。

学校生活・社会適応に関する回答分布（質問15-19）

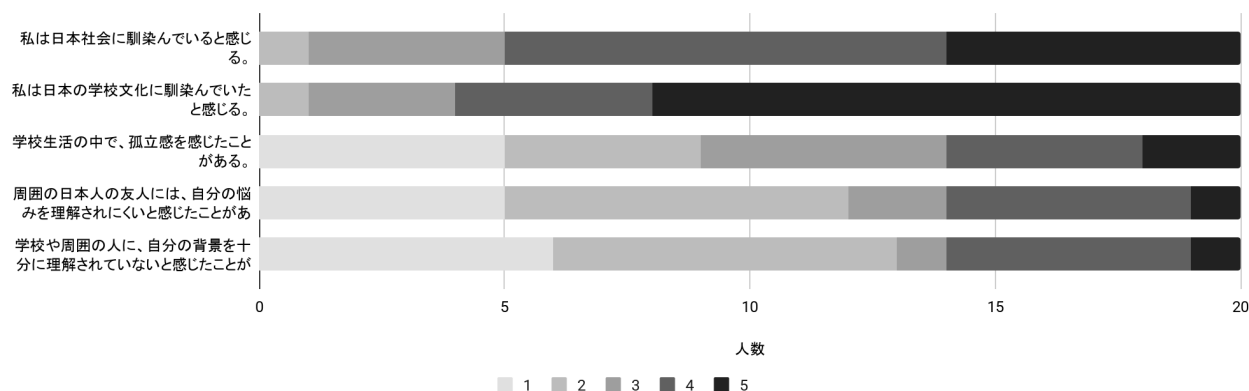


図5-2 学校生活・社会適応に関する回答分布

出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

この結果から、学校生活への適応感と、学校内での違和感や孤立感は同時に存在していることが確認できる。自由記述では、授業内の表現によって、自分が「日本人」という前提の外側に置かれたように感じた経験が示されていた。

Y19自由記述：

「授業での『私たち日本人は』という一括りの表現に、寂しい違和感を抱くことがある。」

この語りは、授業を理解できるかどうかとは異なる次元で、子ども世代が学校空間の中で違和感を抱く場合があることを示している。また、半構造化インタビューでは、日本語能力や日本での生活年数とは別に、外見によって外国人として見られ続ける感覚も語られた。

Y18補足インタビュー：

「日本は特殊だと思うんだ。見た目が違うと、ずっと外国人扱いしてくるよね。」

この語りからは、学校生活や社会生活への適応が進んでも、周囲のまなざしによって「外国人」として位置づけられる経験が続く場合があることがうかがえる。したがって、学校生活・社会適応を検討する際には、本人の日本語能力や学校参加だけでなく、周囲が本人をどのように見ているのかにも注意する必要がある。

5.4 ルーツの意味づけ

ルーツの意味づけに関する回答分布(質問20-24)

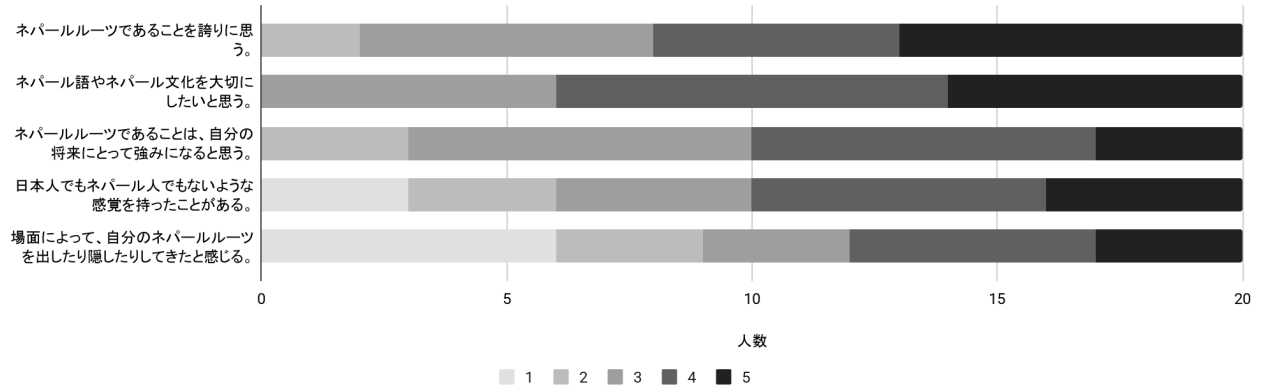


図5-3 ルーツの意味づけに関する回答分布
出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

ルーツの意味づけに関する回答では、ネパールルーツを誇りに思う、ネパール語やネパール文化を大切にしたいとする回答が多くみられた。また、ネパールルーツが自分の将来にとって強みになると捉える回答も確認された。一方で、「日本人でもネパール人でもないような感覚」や、場面によってルーツを出したり隠したりする感覚を持つ回答もみられた。

このことから、ネパールルーツは、回答者にとって単純に肯定的または否定的に意味づけられているわけではない。ネパールルーツは、誇りや強みとして捉えられる一方で、所属感の揺らぎや、場面に応じた調整を伴うものでもある。自由記述には、その中間的な感覚が表れていた。

Y15自由記述：

「どちらのコミュニティにも100%属しきれない。『日本で育ったネパールルーツの自分』というありのままの存在を、グラデーションのままで認めてほしい。」

この語りは、子ども世代のアイデンティティが、「日本人かネパール人か」という二分法では捉えきれないことを示している。また、補足インタビューでは、子ども期には深く意識していなかったルーツが、成人後に改めて意味を持つ場合があることも語られた。

Y18補足インタビュー：

「今家族がいなくて、ネパールのイベントが何もなくなってしまうと、寂しい。一人だと何も知らないし、家族を持つことになってから、これから築いていく過程でどのくら

いルーツを組み込むか考えないといけなくなっている。今まで考えたことがなかったんだよね。」

この語りからは、ルーツの意味づけが年齢や生活段階によって変化することがうかがえる。ルーツは、子ども期に一度形成されて終わるものではなく、家族との距離、将来の家族形成、生活環境の変化の中で、改めて問い直されるものでもある。

また、「日本人でもネパール人でもないような感覚を持ったことがある」という項目に対して強く肯定した回答者は、いずれも20代後半の回答者であった。回答者数が限られているため一般化はできないが、年齢層によってルーツの意味づけや孤立感の経験の違いが生じている可能性がある。

5.5 親子関係・相談しやすさ

親子関係・相談しやすさに関する回答分布(質問25-31)

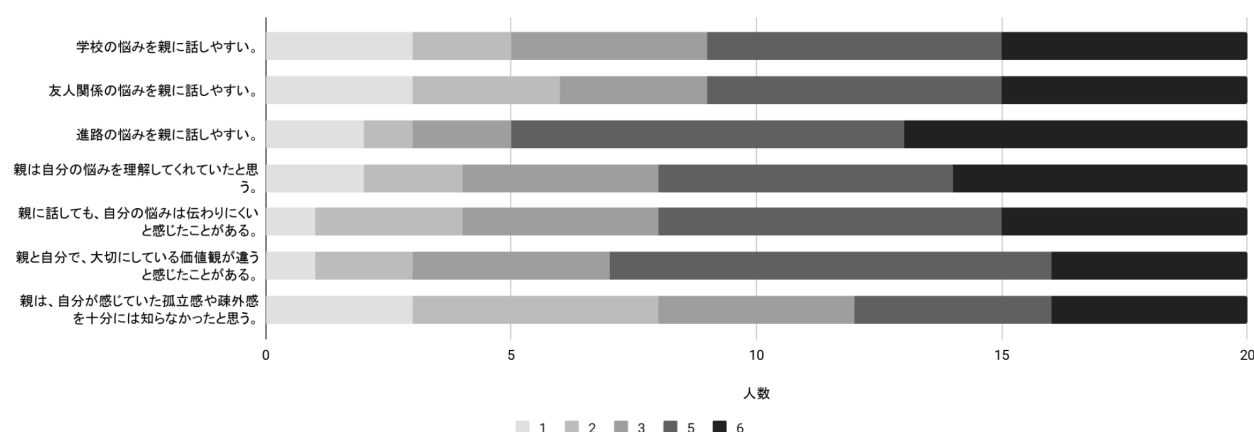


図5-4 親子関係・相談しやすさに関する回答分布

出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

親子関係・相談しやすさに関する回答では、進路の悩みは比較的親に話しやすい一方で、学校生活や友人関係の悩みについては、話しにくさを感じる回答もみられた。また、親に話しても自分の悩みが伝わりにくいと感じた経験や、親と自分で大切にしている価値観が異なると感じた経験も確認された。

この結果から、親子関係は「相談できる／できない」の二分法では捉えきれないことがわかる。相談できる内容と、相談しにくい内容が分かれている可能性がある。半構造化インタビューでは、親に心配をかけたくない、学校での自分を親に見られたくない、別の価値観で判断されたくないという理由から、悩みを話さなかった経験が語られた。

Y17補足インタビュー：

「知られたくない、心配かけたくない。そう考えるようになって、それから学校のことを喋れなくなった。」

この語りは、子どもが親に話さないことが、必ずしも親子関係の悪さを意味するわけではないことを示している。親を思う気持ちや、自分の学校生活を家庭とは別の空間として保ちたい感覚が、相談しにくさにつながる場合がある。

別の半構造化インタビューでも、親との会話の少なさが、親密さの感覚に影響したという語りがみられた。

Y17補足インタビュー：

「小学校のことの会話がなかった。父は忙しく、母は理解できる人ではない気がした。嬉しいことも嫌なことも報告しなかったから、結局親しさを感じられなかった。」

この語りからは、親子間で学校生活が共有されないことが、単なる情報共有の不足にとどまらず、心理的な距離感とも結びついていたことがうかがえる。親子間コミュニケーションは、学校情報の共有だけでなく、子どもが自分の経験を安心して語れる関係づくりとも関わっている。

5.6 教育期待・プレッシャー

教育期待・プレッシャーに関する回答分布(質問32-36)

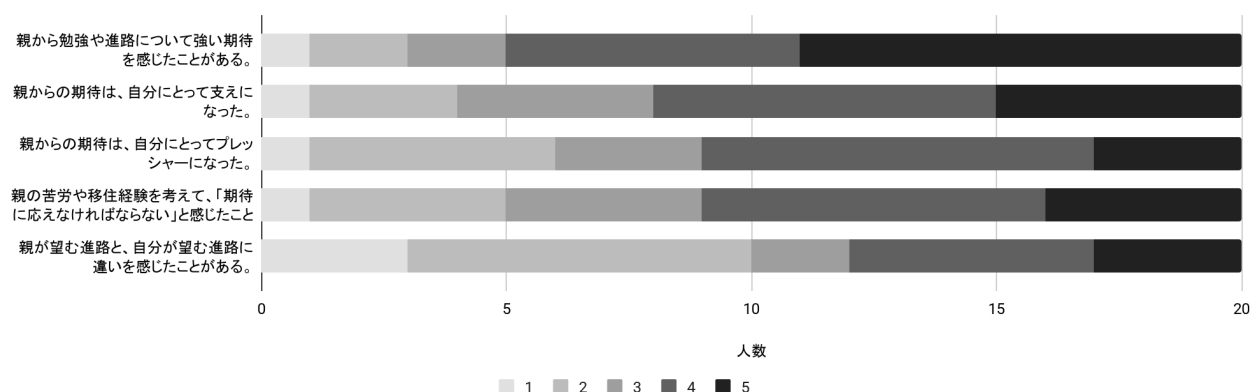


図5-5 教育期待・プレッシャーに関する回答分布

出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

教育期待・プレッシャーに関する回答では、親からの期待を支えとして受け止める回答と、プレッシャーとして受け止める回答が併存していた。また、親の苦労や移住経験

を考えて、期待に応えなければならないと感じた回答もみられた。半構造化インタビューでは、「基本は支えになる。でも程度によってはプレッシャーになる」という語りもあった。

この結果は、親の期待が子どもにとって単純な負担ではなく、支えや責任感とも結びついていることを示している。一方で、期待の内容や伝え方によっては、子ども本人の進路選択や生活経験の価値が十分に理解されていないと感じられる場合もある。

自由記述では、学業以外の経験の価値を親に理解してほしかったという回答がみられた。

Y20自由記述：

「大学時代、サークルとバイトに時間を使いすぎだと親に言われていた。でも今振り返ると、そこで得たコミュニケーション能力・リーダーシップ・人前で話す力が、今の自分を一番支えている気がする。」

この語りは、子ども世代にとって、サークルやアルバイトといった経験が、学業とは別の形で将来を支える力になっていることを示している。また、半構造化インタビューでは、親世代が知っている職業や進路の範囲が限られていることへの違和感も語られた。

Y18補足インタビュー：

「親世代が知らない職業が多いんじゃないか。理系文系の偏見もすごいよね。もはやミームのように期待される職業リストがあるの面白くない？人生にはゆとりがもっとあるよね。職業だって私たちすら知らないものもたくさんあるし。」

この語りからは、親の教育期待が、子どもの将来を思う願いであると同時に、職業観や進路観のずれとして経験される場合があることがうかがえる。教育期待をめぐる困難は、期待の高さだけでなく、何を価値ある経験とみなすのかという親子間の意味づけの違いとも関わっている。

5.7 横のつながり

横のつながりに関する回答では、同じネパールルーツや外国ルーツを持つ友人の存在を肯定的に捉える回答が多くみられた。同じ背景を持つ友人は、自分だけが特別に異なるわけではないと感じるための支えになりうる。また、ネパール人コミュニティの中で行われるイベントや行事が、定期的な交流の機会になっている場合もある。

横のつながりに関する回答分布(質問37-41)

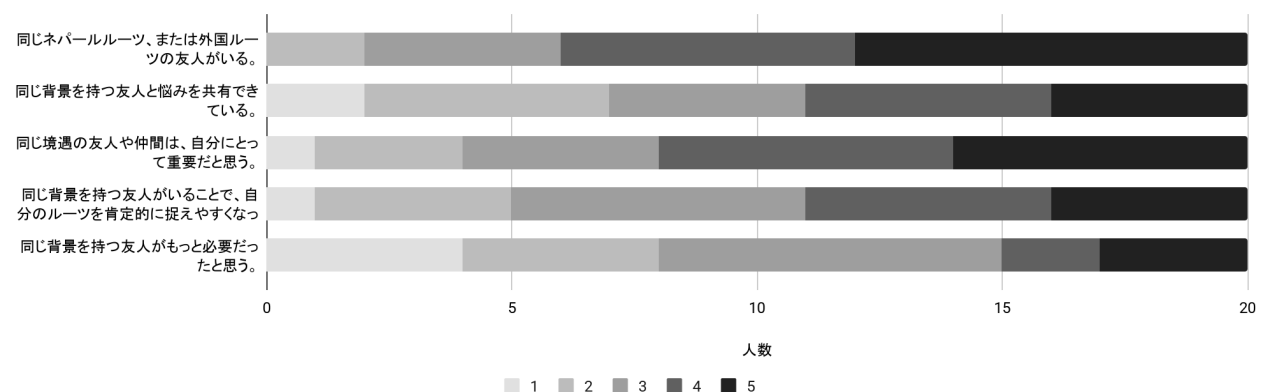


図5-6 横のつながりに関する回答分布

出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

一方で、同じ背景を持つ友人がいることが、必ずしも深い相談関係を意味するわけではない。ある回答者にとっては悩みを共有できる関係であり、別の回答者にとっては、遊びや楽しさを共有する関係である場合もある。自由記述には、同じルーツを持つ人とつながれる場を求める声がみられた。

Y09自由記述：

「同じルーツの人達の集まりの場をつくる。保護者抜きで。」

この語りでは、「保護者抜きで」という点が重要である。子ども世代にとって、同じルーツの人とつながる場は、家族や保護者の延長ではなく、自分たち自身が安心して話せる場である必要がある。

また、横のつながりの必要性は、回答者の年齢や経験によっても異なる。現在は強い必要性を感じていない者であっても、過去に同じ背景の友人がいたことで安心感を得ていた場合や、成人後にルーツを考え直す中で同じ背景の人とのつながりを必要と感じる場合がある。したがって、横のつながりは、子ども期の孤立感を和らげるだけでなく、成長後にルーツを捉え直す場としても意味を持ちうる。

5.8 縦のつながり

縦のつながりに関する回答分布(質問42-46)

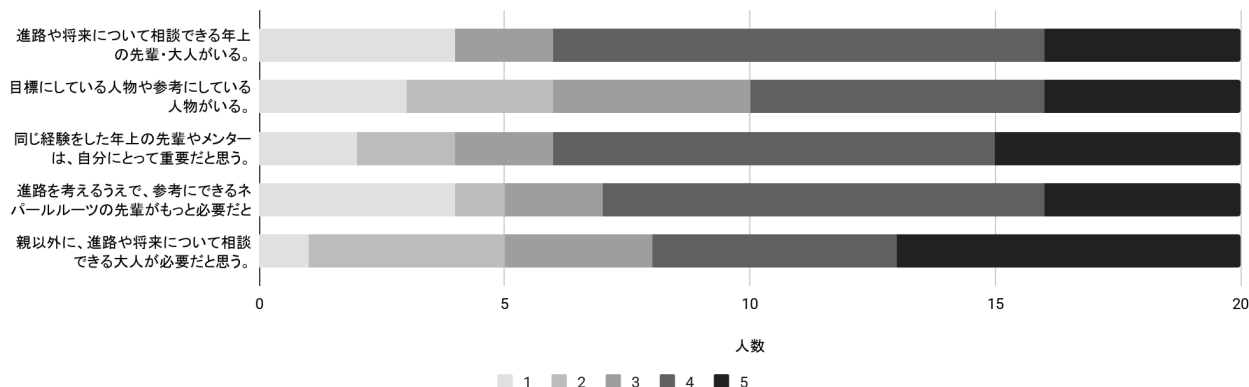


図5-7 縦のつながりに関する回答分布
出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

縦のつながりに関する回答では、進路や将来について相談できる年上の先輩や大人の存在を必要とする回答がみられた。縦のつながりは、横のつながりとは異なり、進路情報、経験談、ロールモデル、相談相手としての意味を持つ。とくに、日本の学校制度や受験制度、大学生活、就職活動を経験した年上の存在は、子ども世代にとって参考対象となりうる。

半構造化インタビューでは、家庭での価値観と学校や社会での価値観の違いについて、誰に相談すればよいのかという点が課題として語られていた。

Y16インタビュー：

「家庭での価値観と外の価値観を相談する人が欲しいんだと思う。そういう話は共感し合えるネパール人の先輩に言うべき。日本人に言っても絶対理解されないし、相談する場があったとしても役に立つ気がしない。」

この語りは、縦のつながりが単に進路情報を得るためのものではなく、家庭と学校・社会の間で生じる価値観のずれを共有し、理解し合うための関係として求められていることを示している。同じネパールルーツを持つ年上の存在は、家庭文化と日本社会の双方を経験しているため、子ども世代にとって共感可能な相談相手となりうる。

一方で、縦のつながりが常に同じネパールルーツである必要があるとは限らない。相談内容によっては、同じルーツであることよりも、同じ進路、同じ専攻、同じ学校経験を持っていることの方が重要になる場合もある。また、学校の先生や親に相談することで十分だと感じており、追加で相談相手を求めている者もいる。したがって、縦のつながりへのニーズは、相談内容や本人の置かれた状況によって異なる。

5.9 将来展望

将来展望に関する回答分布（質問47-51）

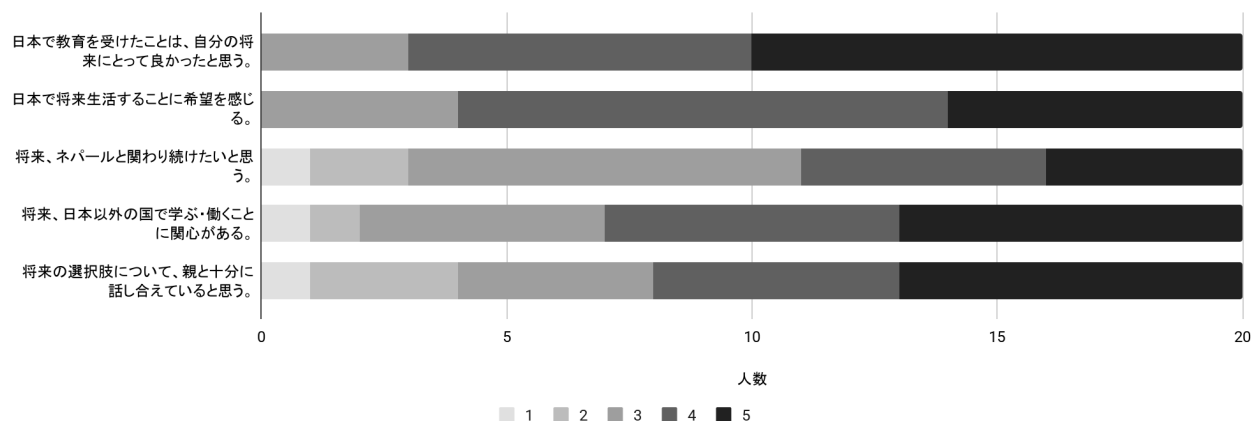


図5-8 将来展望に関する回答分布
出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

将来展望に関する回答では、日本で教育を受けたことを将来にとってよかったと捉える回答が多くみられた。また、日本での生活に希望を感じる回答や、将来もネパールと関わり続けたいとする回答も確認された。このことから、子ども世代は、日本社会に適応することと、ネパールとの関係を維持することを、必ずしも対立するものとして捉えていないと考えられる。

一方で、日本以外の国で学ぶ・働くことへの関心もみられた。自由記述には、日本での生活を基盤としながらも、海外やネパールとの関わりを将来においても維持したいとする回答があった。

Y09自由記述：

「将来もネパールと関わり続けたいし、日本だけじゃなくて他の国でも学んだり働いたりしてみたいと思う。」

この語りには、子ども世代が将来を日本国内に限定して捉えているわけではなく、複数の国や文化との関係の中で柔軟に考えていることを示している。日本で育ち、日本語で生活している一方で、ネパールとのつながりや海外への関心も維持されており、その両方を前提とした将来像が描かれている。

このような傾向から、子ども世代の将来展望は、日本への定着かネパールへの帰還かという二項対立では捉えきれないことがわかる。むしろ、日本での経験を基盤としながら、ネパールや他国との関係を含めた多方向的な進路を志向している点に特徴がある。

5.10 支援ニーズ

必要だった、または必要だと思う支援(複数選択)(質問53)

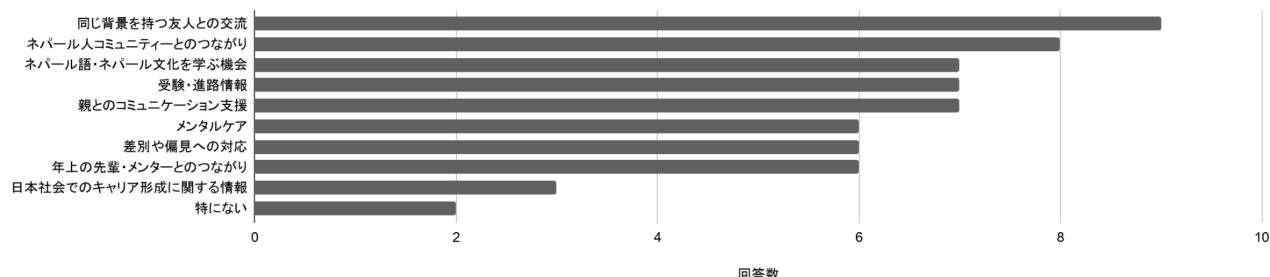


図5-9 必要とされた支援に関する回答分布

出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

支援ニーズに関する複数選択の回答では、日本語支援だけでなく、親とのコミュニケーション支援、ネパール語・ネパール文化を学ぶ機会、同じ背景を持つ人との交流、メンタルケア、進路情報、学習支援などが挙げられた。回答は一つの項目に集中してはいたわけではなく、「同じ背景を持つ友人との交流」9名、「ネパール人コミュニティとのつながり」8名、「ネパール語・ネパール文化を学ぶ機会」7名、「受験・進路情報」7名、「親とのコミュニケーション支援」7名など、複数の領域にまたがっていた。また、「メンタルケア」6名、「差別や偏見への対応」6名、「年上の先輩・メンターとのつながり」6名も一定数選ばれていた。

この結果から、子ども世代が求める支援は、一つの領域に限定されず、文化、関係性、進路、心理面にまたがっていることが確認できる。とくに、同じ背景を持つ友人との交流やネパール人コミュニティとのつながりが上位に挙げられていることは、子ども世代にとって、単に情報を得るだけでなく、自分の経験を共有したり、自分のルーツを肯定的に捉えたりできる関係が重要であることを示している。ただし、項目間の人数差は大きくないため、特定の支援だけが突出して必要とされていたと解釈するのではなく、複数の支援ニーズが並存していたと捉える必要がある。

自由記述でも、必要な支援は多様に示されていた。

Y01自由記述：

「日本での学習支援，歴史やネパール文化を知る支援」

Y02自由記述：

「日本社会でのキャリア形成に関する情報」

Y06自由記述：

「同じネパールルーツを持つ人が関わる機会」

Y08自由記述：

「自分の文化をもっと理解してもらう」

これらの回答からは、子ども世代が求める支援が、言語習得だけではなく、学習内容、キャリア形成、文化理解、同じ背景を持つ人とのつながりに広がっていることが

わかる．とくに「自分の文化をもっと理解してもらおう」という回答は，支援が子ども本人にだけ向けられるものではなく，学校や周囲の側が多様な文化背景を理解することも含むべきであることを示している．

最も必要だと思う支援(単一選択)(質問54)

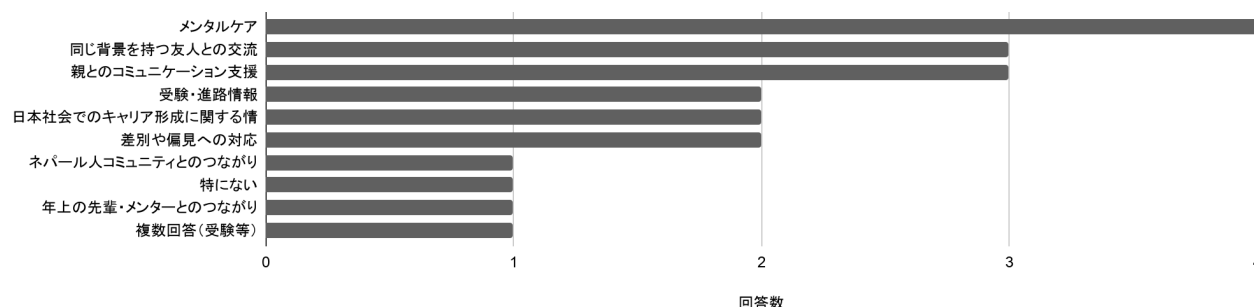


図5-10 最も必要だと思う支援に関する回答分布

出典：若者向け質問票回答より筆者作成．

最も必要だと思う支援を一つ選ぶ設問では，「メンタルケア」4名，「同じ背景を持つ友人との交流」3名，「親とのコミュニケーション支援」3名が上位に挙げられた．また，「受験・進路情報」2名，「日本社会でのキャリア形成に関する情報」2名，「差別や偏見への対応」2名も選ばれていた．「ネパール人コミュニティとのつながり」，「年上の先輩・メンターとのつながり」，「特になし」などはそれぞれ1名であった．

この設問では，メンタルケアが相対的に多く選ばれていたが，他の項目との差は大きくない．したがって，この結果は，メンタルケアのみが突出して必要とされていたというよりも，心理的安心，同じ背景を持つ人との関係，親子間コミュニケーション，進路情報などが，子ども世代にとって重要な支援領域として並存していたことを示している．

補足インタビューでは，質問項目としてストレスや心理的負担について直接尋ねていなかったにもかかわらず，メンタルケアに関する語りが自発的に示された．

Y17補足インタビュー：

「小学校で生徒一人一人，特に外国人の話を聞いてほしかった．躰の方法が厳しいと思っていたが，相談先がなかった．スクールカウンセラーはいなかった気がする．仮にいたとしても，ちゃんと対応できる人がいてほしい．」

この語りは，メンタルケアが単なる心理相談ではなく，家庭環境，文化差，しつけ，学校生活の違和感を理解できる支援として求められていることを示している．以上から，子ども世代の支援ニーズは，日本語支援に限定されず，心理的安心，文化的承認，進路情報，親子間コミュニケーション，同じ背景を持つ人との横のつながりへと広がっていることが確認できる．

5.11 アイデンティティ類型への自己位置づけ

日本で育つネパールルーツの子どもの経験について、次の説明のうち、あなた自身の経験に近いものはどれですか。
(複数選択可能)(質問52)

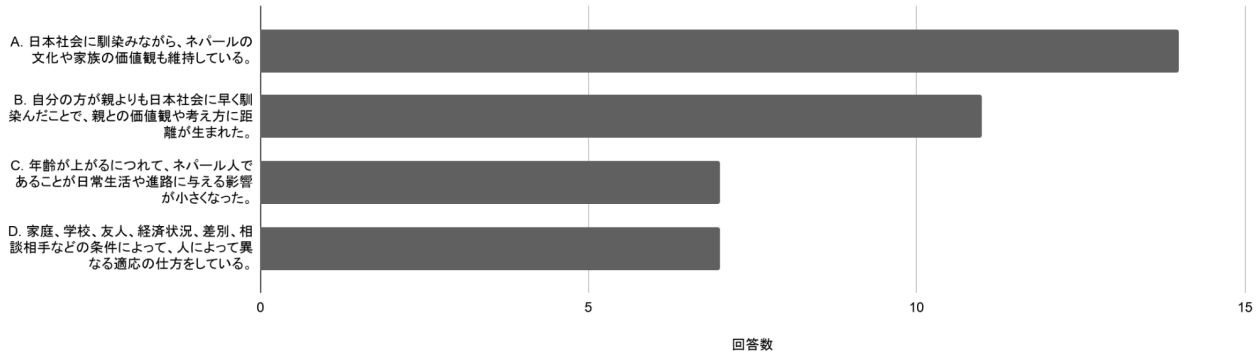


図5-11 アイデンティティ類型への自己位置づけ
出典：若者向け質問票回答より筆者作成。

本節では、第3章で整理した文化適応に関する理論枠組みを踏まえ、子ども世代が自らの経験をどのように位置づけているのかを確認する。質問票では、次の四つの説明のうち、自分の経験に近いものを複数選択で尋ねた。

- A. 日本社会に馴染みながら、ネパールの文化や家族の価値観も維持している。
- B. 自分の方が親よりも日本社会に早く馴染んだことで、親との価値観や考え方に距離が生まれた。
- C. 年齢が上がるにつれて、ネパール人であることが日常生活や進路に与える影響が小さくなった。
- D. 家庭、学校、友人、経済状況、差別、相談相手などの条件によって、人によって異なる適応の仕方をしている。

回答では、A「日本社会に馴染みながら、ネパールの文化や家族の価値観も維持している」が14名と比較的多く選ばれた。次いで、B「自分の方が親よりも日本社会に早く馴染んだことで、親との価値観や考え方に距離が生まれた」が11名であった。C「年齢が上がるにつれて、ネパール人であることが日常生活や進路に与える影響が小さくなった」とD「家庭、学校、友人、経済状況、差別、相談相手などの条件によって、人によって異なる適応の仕方をしている」は、それぞれ7名であった。

Aが比較的多く選ばれたことから、多くの子ども世代は、日本社会への適応とネパール文化・家族価値の維持を対立するものとしてではなく、両立しうるものとして捉えていることがうかがえる。一方で、Bも11名に選ばれており、親子間の価値観差や考え方の距離も一定程度経験されていた。このことは、日本社会への適応とネパールルーツの

維持が両立しうる一方で、その過程が親子間のずれを伴わないわけではないことを示している。

Cの回答は、年齢が上がるにつれてネパールルーツが日常生活に与える影響が弱まると感じる層が存在することを示している。ただし、これはネパールルーツが完全に意味を失うことを意味しない。むしろ、第5章で示したように、外見、名前、国籍、進路選択、家族形成、文化行事などの場面で、ルーツは再び意識されることがある。この点は、第8章で「境界の弱まりと再浮上」として考察する。

Dの回答は、同じネパールルーツであっても、家庭環境、学校経験、友人関係、経済状況、相談相手の有無によって、適応の仕方や困難の表れ方が異なることを示している。この回答は、子ども世代の経験を一つの類型にまとめることの難しさを示しており、分節化された同化理論を補助的な視角として用いる意義を支えている。

なお、本研究の質問票回答を探索的にみると、いくつかの項目間に関連する傾向もうかがえた。親と自分で大切にしている価値観が違くと答えた回答者ほど、親に話しても自分の悩みは伝わりにくいと答える傾向がみられた。このことは、親子間の認識差が、単に会話量の不足としてではなく、価値観の違いによって悩みを共有しにくくなる過程として生じている可能性を示している。

また、学校生活の中で孤立感を感じた回答者ほど、学校や周囲の人に自分の背景を十分に理解されていないと感じる傾向がみられた。この点から、子ども世代の孤立感は、単に友人の有無だけでなく、文化的・家庭的背景が理解されにくいこととも関係していると考えられる。

さらに、同じネパールルーツまたは外国ルーツの友人がいると答えた回答者ほど、同じ背景を持つ友人がいることで自分のルーツを肯定的に捉えやすくなったと答える傾向がみられた。また、同じ背景を持つ友人がもっと必要だったと答える回答者は、同世代や先輩とつながれる場への参加意向も高い傾向があった。このことから、同じ背景を持つ人との横のつながりは、単なる交友関係にとどまらず、心理的安心やルーツの肯定を支える関係的資源として機能しうると考えられる。

一方で、親の期待に関する回答では、期待を支えとして捉える回答と、プレッシャーとして捉える回答が必ずしも単純に対立しているわけではなかった。親の期待は、子ども世代にとって支えであると同時に、負担にもなりうる両義的なものとして経験されていたと考えられる。ただし、本研究の質問票回答者数は限られているため、これらは統計的な関係としてではなく、インタビュー分析を補助する探索的な手がかりとして位置づける。

5.12 小括

本章では、子ども世代質問票の回答分布、自由記述、半構造化インタビュー、補足的インタビューの語りをもとに、ネパールルーツの子ども世代が経験する困難と支援ニーズをカテゴリー別に整理した。

日本語に関する回答では、日本語そのものを主な困難として強く捉えない回答が多かった。しかし、学校書類や進路情報の理解、保護者への説明など、日本語ができることによって家庭内で制度仲介を担う負担もみられた。この点から、日本語の壁が低いことは、困難が存在しないことを意味しないことが確認された。

学校生活・社会適応に関する回答では、日本社会や学校文化への適応感が高い一方で、孤立感、授業内表現による違和感、外見によって外国人として見られる感覚も語られていた。つまり、学校生活に参加できていることと、学校空間の中で違和感を抱かないことは同じではない。

ルーツの意味づけについては、ネパールルーツを誇りや強みとして捉える回答が多くみられた一方で、「どちらのコミュニティにも100%属しきれない」といった中間的な所属感も語られた。また、ルーツの意味は、子ども期だけでなく、成人後や将来の家族形成を考える段階で改めて問い直される場合があることも示された。

親子関係や教育期待については、親に相談できる関係や親の期待を支えとして受け止める経験がある一方で、学校生活や友人関係の悩みは話しにくい場合があり、親の期待がプレッシャーや進路観のずれとして経験される場合もあった。特に、価値観の違いを感じる回答と、親に悩みが伝わりにくいという回答が結びついていてことから、親子間の認識差は、単なる会話不足ではなく、異なる価値観や経験の中で生じる意味づけのずれとして捉える必要がある。

横のつながりと縦のつながりは、それぞれ異なる意味を持っていた。横のつながりは、共感や安心感、文化的承認をもたらす可能性があり、子ども世代の支援ニーズとして比較的具体的に確認された。同じ背景を持つ友人の存在は、ルーツを肯定的に捉えることとも結びついていて。一方、縦のつながりは、進路情報、経験談、ロールモデル、家庭と学校・社会の間の価値観を相談できる相手として期待されていた。ただし、本章の子ども世代の語りにおいては、縦のつながりは横のつながりほど中心的な支援資源としては強く確認されなかった。

支援ニーズは、日本語支援に限定されていなかった。複数選択では、同じ背景を持つ友人との交流、ネパール人コミュニティとのつながり、ネパール語・ネパール文化を学ぶ機会、受験・進路情報、親とのコミュニケーション支援などが比較的多く選ばれた。また、最も必要な支援を一つ選ぶ設問では、メンタルケア、同じ背景を持つ友人との交流、親とのコミュニケーション支援が上位に挙げられた。ただし、項目間の人数差は大きくなく、子ども世代の支援ニーズは複数の領域に分散していたと捉える必要がある。

以上から、子ども世代の質問票回答と語りからは、「日本語ができること」は「困っていないこと」を意味しないという本研究の中心的な問題意識が確認できる。子ども世代にとって必要な支援は、日本語指導だけでなく、制度仲介の負担への理解、親子間コミュニケーション、文化的承認、進路情報、心理的支援、同じ背景を持つ人との横のつながりを含むものとして捉える必要がある。なお、縦のつながりについても、進路情報や経験談を得る補助的資源として一定の期待は示されたが、本章の結果からは、横のつながりほど中心的な支援ニーズとしては確認されなかった。

6 保護者の認識と支援ニーズ

本章では、保護者20名を対象とした質問票回答をもとに、日本で子どもを育てるネパールルーツの保護者が、子どもの日本語、学校生活、ルーツ、親子関係、教育期待、横・縦のつながり、将来展望、支援ニーズをどのように認識しているのかを整理する。本研究の保護者向け質問票も、統計的一般化を目的とするものではなく、子ども世代の回答および親子ペアインタビューを補完し、保護者側の認識傾向を探索的に把握するために実施したものである。

第5章では、子ども世代の回答から、日本語や学校生活に一定程度適応しているように見える場合であっても、親子関係、アイデンティティ、横・縦のつながり、メンタルケアなどに関する支援ニーズが存在することを確認した。これに対して本章では、保護者の側から見た子どもの困難と支援ニーズを検討する。

本章の目的は、保護者の認識をただちに子ども世代の認識と比較することではなく、まず保護者自身がどのような視点から子どもの成長を捉えているのかを明らかにすることである。親子間の一致と不一致については第7章で親子ペアごとに検討し、質問票の全体的な比較は第8章で行う。そのため本章では、保護者回答に共通してみられる傾向をカテゴリー別に整理する。

6.1 保護者回答者の属性と分析の位置づけ

保護者向け質問票の回答者20名には、母親と父親の双方が含まれている。年齢層は40代から50代であり、40代が11名、50代が9名であった。性別は、女性9名、男性11名である。日本滞在年数については、10年以上が7名、20年以上が13名であり、長期的に日本で生活基盤を築いてきた保護者が中心であった。

長男または長女の学校段階は、中学生6名、高校生8名、大学生2名、社会人4名であった。このように、保護者が回答時点で直面している教育上の関心は一様ではない。中学生や高校生の子どもの持つ保護者は、受験や進路選択を比較的近い課題として捉えている可能性がある一方で、大学生や社会人の子どもの持つ保護者は、これまでの教育経験や進路選択を振り返る形で回答している。

表6-1 保護者質問票回答者の概要

ID	年齢層	性別	日本滞在年数	長男/長女の 学校段階
P01	40代	女	20年以上	中学生
P02	40代	男	10年以上	中学生
P03	40代	女	10年以上	中学生
P04	40代	男	20年以上	中学生
P05	40代	男	20年以上	中学生
P06	40代	女	10年以上	高校生
P07	40代	男	20年以上	高校生
P08	40代	男	10年以上	中学生
P09	40代	男	20年以上	高校生
P10	40代	女	10年以上	高校生
P11	40代	男	10年以上	高校生
P12	50代	女	20年以上	社会人
P13	50代	男	10年以上	高校生
P14	50代	男	20年以上	大学生
P15	50代	女	20年以上	社会人
P16	50代	男	20年以上	社会人
P17	50代	女	20年以上	大学生
P18	50代	女	20年以上	高校生
P19	50代	男	20年以上	高校生
P20	50代	女	20年以上	社会人

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

回答者の子どもの中には、日本生まれの者もいれば、ネパール生まれで日本の学校に編入した者も含まれている。また、子どもが経験した学校も、日本の公立学校、私立学校、インターナショナルスクール、ネパールの学校など多様である。したがって、本章で扱う保護者回答は、単一の家庭像を示すものではない。

一方で、保護者回答には、教育、将来安定、文化継承、学校制度への不安に関して一定の共通性もみられた。とくに、子どもの将来に対する願い、ネパール語や文化を維持してほしいという期待、日本の教育制度や進路情報への関心は、多くの保護者に共通して表れていた。

なお、本研究の保護者回答者は、ネパール人コミュニティ内の人的つながりを通じて募集された者であり、日本で長期的に生活基盤を築いてきた保護者が多い。そのため、本章で示す回答傾向は、在日ネパール人保護者全体を代表するものではない。むしろ、長期滞在の中で相互に情報を共有し、子育てや教育に関する価値観を形成してきたコミュニティ内部の保護者層にみられる認識傾向として、慎重に位置づける必要がある。

6.2 保護者回答に共通する認識枠組み

保護者回答に共通する認識枠組み（質問58～74）

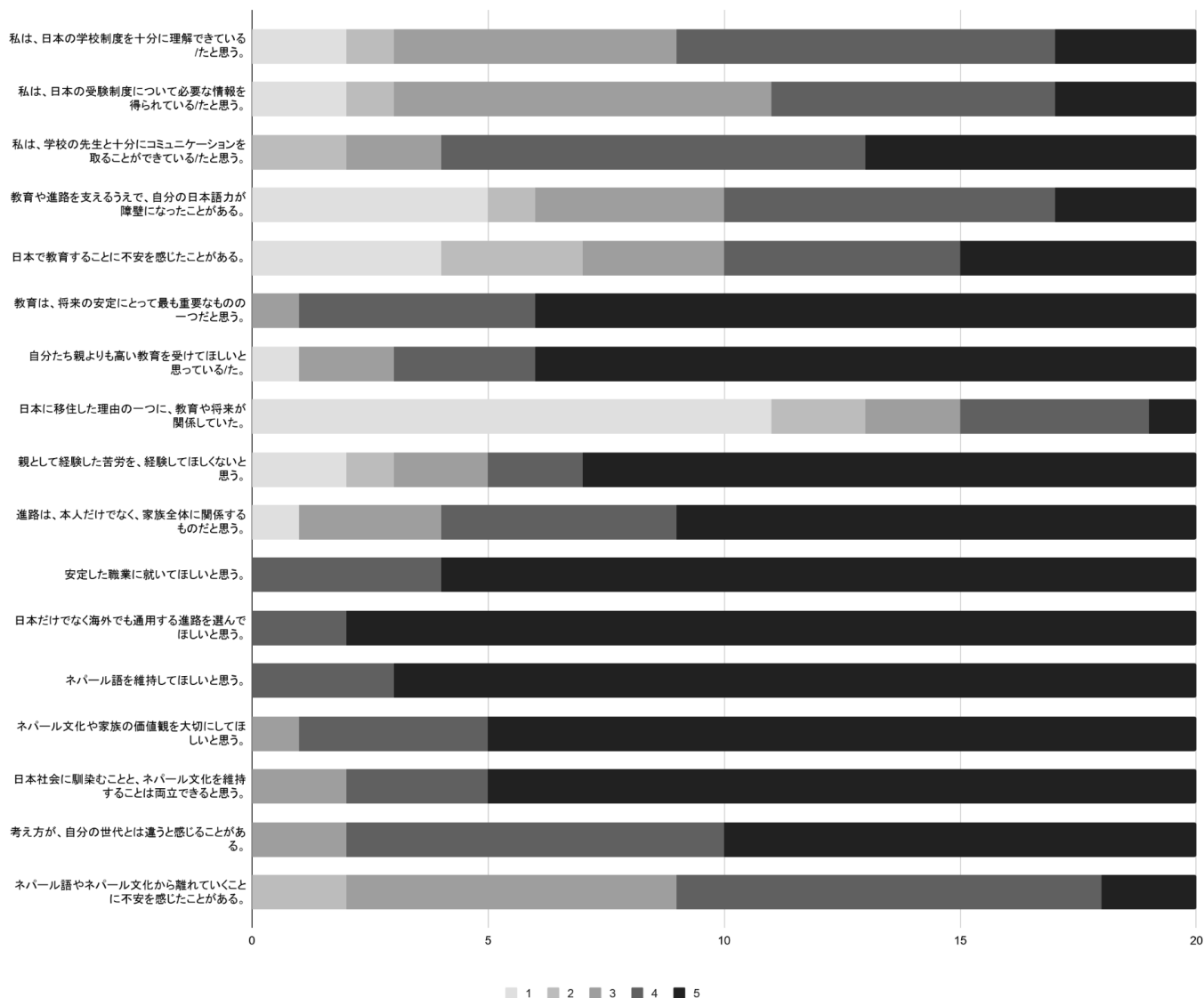


図6-1 保護者回答に共通する認識枠組み
出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

本節では、保護者のみに尋ねた後半の質問群をもとに、保護者回答に共通する認識枠組みを整理する。これらの質問群では、日本の学校制度への理解、受験制度に関する情報、学校とのコミュニケーション、保護者自身の日本語能力、日本で子どもを教育することへの不安、教育と将来安定への考え、ネパール語・文化維持への期待、子どもとの世代差に関する認識を尋ねた。

保護者回答には、大きく三つの共通する認識枠組みがみられた。第一に、子どもの日本語能力や学校生活については、比較的肯定的に捉える傾向である。第二に、教育を子どもの将来安定と強く結びつけて捉える傾向である。第三に、日本社会への適応とネパール語・ネパール文化の維持を、対立するものではなく、両立すべきものとして捉える傾向である。

まず、日本の学校制度や受験制度に関する理解については、保護者の回答に一定のばらつきがみられた。日本の学校制度を理解できているとする回答はみられるものの、強い肯定に集中しているわけではなかった。また、日本の受験制度について必要な情報を得られているかについても、中間的な回答が一定数みられた。これに対し、学校の先生とのコミュニケーションについては、比較的肯定的な回答が多かった。つまり、保護者は学校と一定程度関わっている一方で、学校制度や受験制度を十分に理解しているとは限らない。

また、保護者自身の日本語能力が、子どもの教育や進路を支えるうえで障壁になったかについては、回答が分かれた。日本語能力を大きな障壁として認識していない保護者もいる一方で、一定数の保護者は、日本語能力が情報収集や制度理解に影響したと感じていた。ここから、保護者支援を考える際には、日本語支援そのものだけでなく、学校制度や進路情報をわかりやすく伝える仕組みが必要であることがわかる。

一方で、教育と将来安定に関する項目では、保護者の価値観の共通性が明確に表れていた。教育は子どもの将来の安定にとって重要であるという項目では、肯定的な回答が多くみられた。また、子どもには安定した職業に就いてほしい、日本だけでなく海外でも通用する進路を選んでほしいという項目では、中間的・否定的な回答はみられず、ほとんどの保護者が4または5を選んでいて、この回答の偏りから、本調査対象者の範囲では、教育が子どもの将来安定や国際的に通用する選択肢を得るための手段として強く意味づけられていることがうかがえる。

また、子どもには親世代よりも高い教育を受けてほしい、親として経験した苦労を子どもには経験してほしい、子どもの進路は本人だけでなく家族全体に関係するものだと思うという項目でも、肯定的な回答が多数を占めた。これらの結果は、保護者の教育期待が、子ども本人の将来だけでなく、親世代の移住経験や家族全体の生活とも結びついていることを示している。

さらに、ネパール語・文化維持に関する項目でも、回答の傾きは強かった。子どもにネパール語を維持してほしいという項目では、すべての保護者が4または5を選び、肯定的に回答していた。ネパール文化や家族の価値観を大切にしてほしい、日本社会に馴染むこととネパール文化を維持することは両立できるという項目でも、肯定的な回答が多数を占めた。

このことから、保護者は、子どもが日本社会に馴染むことを望みながらも、ネパール語やネパール文化を失ってほしくないという期待を強く持っていることがわかる。保護

者にとって、日本社会への適応とネパール文化の維持は、対立するものではなく、同時に達成されるべきものとして捉えられていた。

ただし、子どもの考え方が自分の世代とは違うと感ずることがあるという項目でも、肯定的な回答が多くみられた。保護者は、子どもに日本社会で安定して生きてほしいと願ひ、ネパール語や文化を維持してほしいとも考へているが、同時に、子ども世代の考へ方が自分たちの世代とは異なることも認識している。したがって、保護者回答からは、教育達成、将来安定、文化継承への強い期待と、子ども世代との価値観の違いへの気づきが併存していることが確認できる。

6.3 日本語の壁は子どもの困難として認識されていたのか

図 日本語の壁は子どもの主な困難として認識されていたのか(質問12-15)

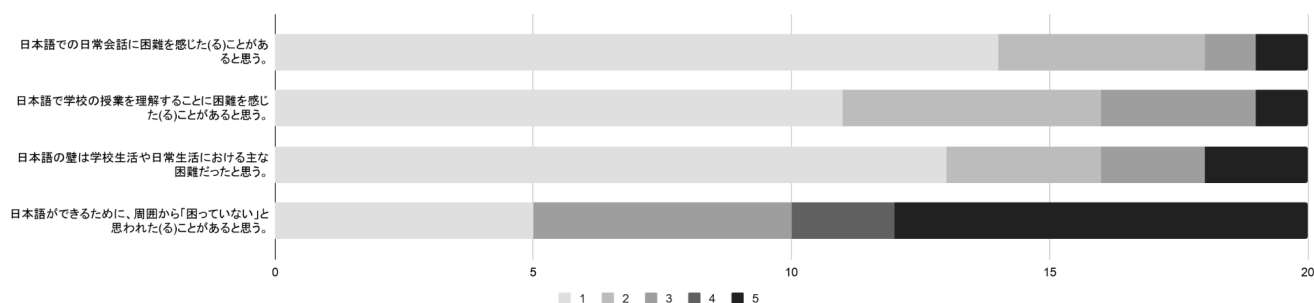


図6-2 日本語に関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

日本語に関する回答では、保護者の多くが、子どもは日常会話や授業理解において大きな日本語の困難を抱えていないと認識していた。日本語での日常会話に困難を感じていた、学校の授業理解に困難を感じていた、日本語の壁が学校生活や日常生活における主な困難だったとする回答は、いずれも少数にとどまった。

この結果は、本研究の対象が、日本語支援を主たる課題としない層を含んでいることと対応している。第5章でみた子ども世代回答でも、日本語そのものを主な困難として強く捉える回答は少数であった。保護者回答においても、子どもの日本語能力はおおむね肯定的に捉えられており、少なくとも日常会話や授業理解に関しては、親子双方の回答傾向に大きな隔たりはみられない。

保護者インタビューでも、日本で生まれ育った子どもには日本語上の大きな問題はないと捉える語りがみられた。

P08自由記述：

「途中から日本の学校に入る子は、日本語での学習に困るかもしれない。でも日本で生まれた子には、そういう問題はないと思う。」

この語りからは、保護者が子どもの日本語経験を、来日時期や学校編入の時期と結びつけて理解していることがわかる。途中から日本の学校に入る子どもには日本語の困難が生じうる一方で、日本生まれや幼少期から日本で育った子どもについては、日本語の壁を大きな問題として認識していない。

ただし、日本語ができるために周囲から「困っていない」と思われたことがあると思うかについては、肯定的な回答も一定数みられた。このことから、保護者も、子どもの日本語能力が高いことによって、周囲から困難が見えにくくなる可能性を一定程度認識していたと考えられる。

したがって、保護者の認識においても、日本語の困難は「話せない」「授業が理解できない」という形では表れにくい。一方で、日本語ができる子どもほど、支援対象として見えにくくなる可能性があるという点は、保護者回答からも確認できる。

6.4 学校生活・社会適応に関する保護者の認識

学校生活・社会適応に関する回答では、子どもが日本の学校文化に馴染んでいると捉える保護者が多くみられた。保護者は、子どもが日本の学校生活をおおむね安定して送っていると認識している。一方で、学校生活の中で子どもが孤立感を感じていたとする回答は少なく、保護者の多くは、子どもの孤立感を強くは認識していなかった。

図 学校生活・社会適応に関する保護者の認識(質問16-20)

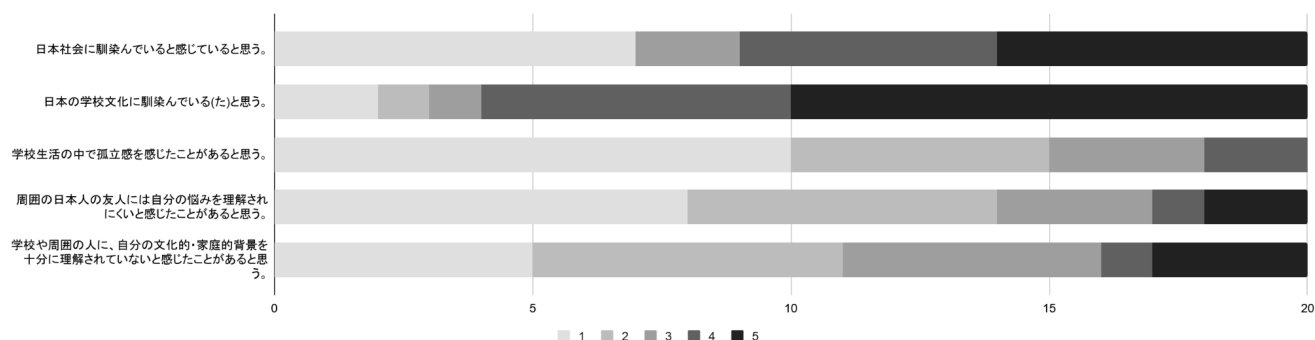


図6-3 学校生活・社会適応に関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

この傾向は、第5章の子ども世代回答と一部重なる。子ども世代回答でも、日本の学校生活や社会生活に一定程度適応しているとする回答が多かった。ただし、第5章では、学校生活に参加できていることと、孤立感や違和感を抱かないことは同じではないことも示された。保護者回答では、子どもの学校適応は比較的肯定的に捉えられている一方で、子ども本人が経験した細かな違和感や孤立感は、相対的に見えにくい可能性がある。

また、日本社会への適応については、学校文化への適応ほど一方向に偏ってはいなかった。子どもが日本社会に馴染んでいると感じていると思うかについては、保護者によって見方が分かれていた。これは、保護者が「学校への適応」と「日本社会・文化への適応」を必ずしも同じものとして捉えていないことを示している。

保護者インタビューでは、子どもが日本社会に馴染んでいないと感じる理由として、日本語能力ではなく、ネパール文化との距離や文化的なふるまいの違いが語られた。

P15インタビュー：

「日本社会に馴染んでいないのは、文化に馴染んでいないということだと思う。見た目は別のことだと思う。」

この語りからは、保護者にとって「馴染む」という言葉が、単に学校生活を問題なく送ることではなく、文化的な態度や価値観とも結びついていることがわかる。保護者は、子どもが日本の学校文化には適応していると見ている一方で、ネパール文化を十分に受け継いでいるのか、日本社会の価値観に寄りすぎていないかという点にも関心を持っている。

また、学校や周囲の人に、子どもの文化的・家庭的背景が十分に理解されていないと感じたことがあると思うかについては、回答が分かれた。子どもの学校生活をおおむね安定したものと捉えながらも、文化的背景への理解不足については一定の懸念を持つ保護者がいることがわかる。

6.5 ルーツ・文化継承の意味づけ

6.5 ルーツ・文化継承の意味づけ

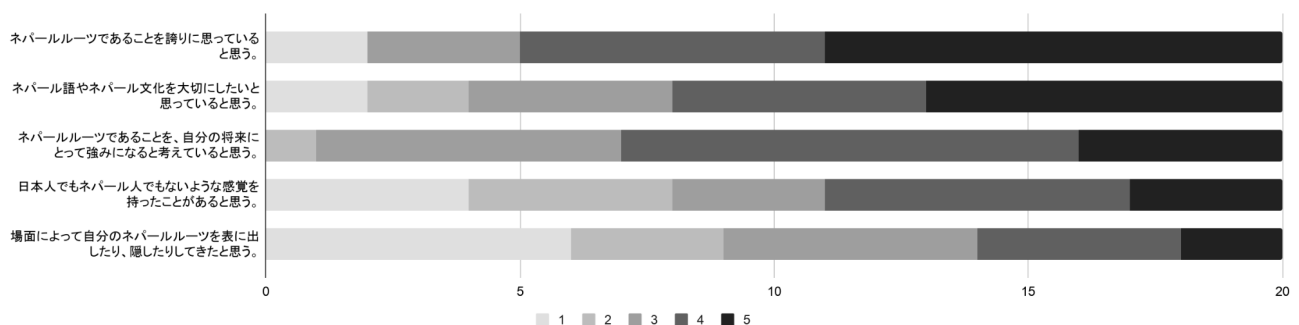


図6-4 ルーツ・文化継承に関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

ルーツ・文化継承に関する回答では、保護者の多くが、子どもはネパールルーツであることを誇りに思っている、ネパール語やネパール文化を大切にしたいと思っていると認識していた。また、ネパールルーツが子どもの将来にとって強みになると考えている保護者も多く、この項目では強い否定はみられなかった。

一方で、「日本人でもネパール人でもないような感覚」や、場面によってネパールルーツを表に出したり隠したりしてきたという項目については、回答が分かれた。これは、保護者が子どものルーツ意識を肯定的に捉える一方で、子どもが実際にどのような場面で所属感の揺らぎを経験しているのかについては、保護者によって認識に差があることを示している。

第5章の子ども世代回答でも、ネパールルーツを誇りや強みとして捉える回答が多くみられた一方で、「どちらのコミュニティにも100%属しきれない」といった中間的な所属感も語られていた。保護者回答と子ども世代回答は、ルーツを肯定的に捉える点では重なるが、所属感の揺らぎや場面ごとの調整については、保護者側から見えにくい部分が残る。

保護者インタビューでは、ネパール文化が家庭の中だけでは継承されにくいことへの不安が語られていた。

P01インタビュー：

「ネパールの文化は前の世代の真似をする傾向があると思う。でも、直接見る・接する機会がないから廃れていくんだと思う。」

この語りは、文化継承が、家庭内で言葉や行事を伝えるだけでは十分ではないことを示している。ネパールで育った保護者にとって、文化は日常生活の中で自然に見て学ぶものであった。しかし、日本で育つ子どもにとっては、ネパール文化に直接触れる機会が限られるため、保護者世代と同じように文化を身につけることは難しい。

自由記述でも、ネパール語やネパール文化を学ぶ場へのニーズが示されていた。

P19自由記述：

「東京以外の各地でも、ネパール語を勉強できる場が必要です。週一回だけでも、ネパールの文化、社会などを学べる場所が欲しいです。」

このように、保護者は子どもが日本社会に馴染むことを望みながらも、ネパール語や文化を失ってほしくないという強い期待を持っている。ただし、その継承を家庭だけで担うことには限界があり、地域やコミュニティにおける学びの場が求められている。

6.6 親子関係・相談しやすさに関する保護者の認識

図 親子関係・相談しやすさに関する保護者の認識(質問26-32)

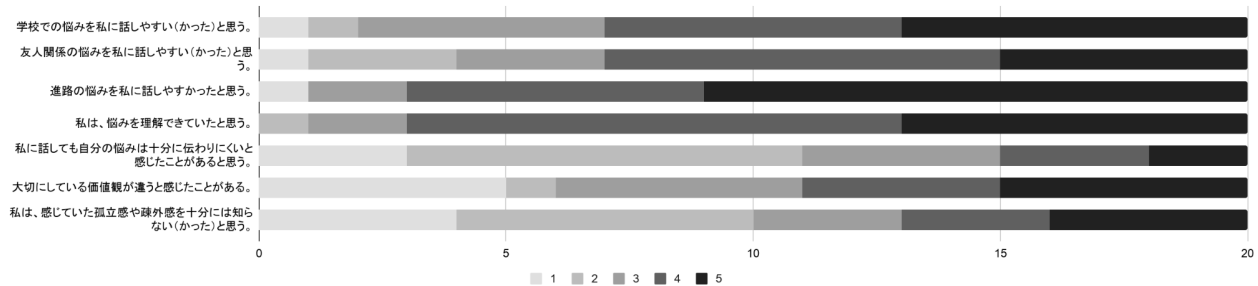


図6-5 親子関係・相談しやすさに関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

親子関係・相談しやすさに関する回答では、保護者の多くが、子どもは学校、友人関係、進路に関する悩みを自分に話しやすいと認識していた。特に進路の悩みについては、肯定的な回答が多く、進路は親子間で比較的共有されやすいテーマであることがうかがえる。

また、自分は子どもの悩みを理解できていたと思うかについては、1を選ぶ保護者はいなかった。保護者の多くは、子どもの悩みを一定程度理解できていたと認識していた。一方で、子どもと自分が大切にしている価値観が違うと感じたことがあるか、子どもが感じていた孤立感や疎外感を十分には知らなかったと思うかについては、回答が分かれた。

このことから、保護者は子どもと十分に話せている、理解できていると考えている一方で、子どもの内面的な孤立感や価値観の違いについては、必ずしも完全に把握できているわけではないと感じていることがわかる。第5章では、子ども世代の側から、親に心配をかけたくない、親に学校生活を知られたくない、親とは違う価値観で判断されたくないという語りがみられた。この点から、親子双方が「話せている」と認識している場合でも、どの内容が共有され、どの内容が共有されていないのかを分けて見る必要がある。

保護者インタビューでは、子どものメンタルケアについて、保護者自身が十分に考えたことがなかったと振り返る語りもみられた。

P01インタビュー：

「メンタルケアについて、考えたことがなかった。時間が空いた時、親子のコミュニケーションが足りてないんじゃないかと思う。」

この語りは、保護者が子どもの心理的負担に無関心であったことを意味しない。むしろ、子どもが日本語を使い、学校生活を送れている場合、心理的な負担が問題として見

えにくくなることを示している。保護者は、子どもが話してくれること、学校に通っていることを通じて安心する一方で、子どもが話していない悩みまでは把握しにくい。

また、自由記述では、親子関係について、親である前に友人のように接することが大切だという意見もみられた。

P07自由記述：

「父親や母親ではなく、友人のようであることを意識した方がよい。」

このような語りからは、保護者自身も、子どもとの関係をどのように築けばよいのかを模索していることがわかる。親子間コミュニケーション支援は、子どもが親に合わせてための支援ではなく、保護者が子どもの経験や価値観の違いを理解するための支援としても重要である。

6.7 教育期待・進路不安・将来安定への願い

図 教育期待・進路不安・将来安定への願い(質問33-37)

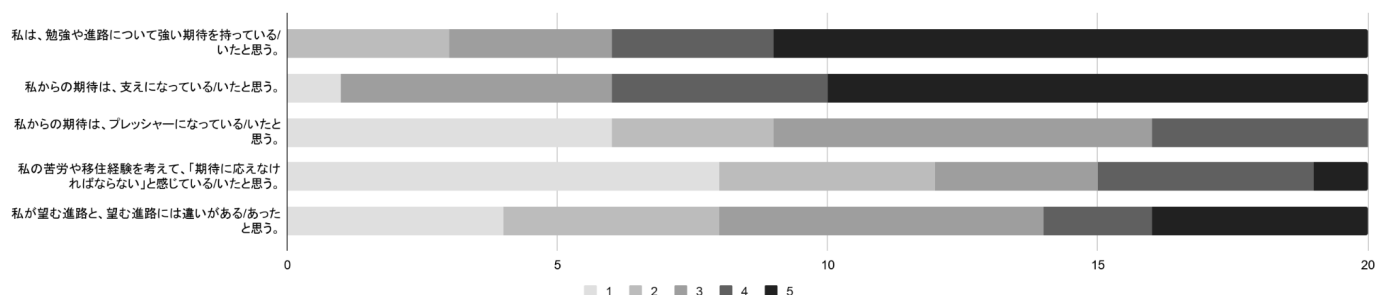


図6-6 教育期待・進路不安・将来安定への願いに関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

教育期待・進路に関する回答では、保護者の多くが、子どもの勉強や進路について強い期待を持っていると認識していた。子どもの勉強や進路に期待しているという項目では、1を選ぶ保護者はいなかった。また、その期待は子どもにとって支えになっていると捉える回答も多かった。保護者の多くは、自分たちの教育期待を、子どもの将来を支えるものとして認識している。

一方で、期待が子どもにとってプレッシャーになっていると思うかについては、強い肯定は少なかった。また、親の苦労や移住経験を考えて、子どもが期待に応えなければならないと感じていると思うかについても、否定的または中間的な回答がみられた。つまり、保護者は、自分たちの期待を、子どもへの圧力というよりも、将来の安定を願う支えとして捉えている傾向がある。

この結果は、第5章でみた子ども世代回答と比較すると重要である。子ども世代回答では、親の期待を支えとして受け止める語りがあ一方で、プレッシャーとして受け止める語りもみられた。これに対し、保護者回答では、期待をプレッシャーとしてよりも支えとして捉える傾向が強い。この差は、親子間の認識差として第7章で具体的に検討する。

保護者インタビューでは、保護者の教育期待が、移住後の労働経験や生活上の苦勞と結びついて語られていた。

P03インタビュー：

「私たちはいくら頑張ってもここまでしか来られなかった。子どもには、今後の難しい社会を生きていけるようになってほしい。」

この語りは、保護者の期待が、子どもを縛るためではなく、子どもに自分たちと同じ苦勞を経験してほしいという願いから生じていることを示している。一方で、その期待が子どもにどのように受け止められているかについては、保護者側からは見えにくい部分もある。

また、保護者が望む進路と子どもが望む進路に違いがあると思うかについては、回答が分かれた。これは、保護者が必ずしも子どもの進路選択と自分の希望とのずれを一樣に認識しているわけではないことを示している。進路に関する親子間のずれは、家庭ごとの経験や子どもの年齢、進路段階によって異なると考えられる。

自由記述では、高校受験のためにもっと早く塾に入ればよかったという振り返りや、進路指導がもっと必要だったという語りがみられた。

P19自由記述：

「高校受験のため、早めに塾に入学すればよかった。」

このように、保護者は子どもの将来を強く願いながらも、日本の教育制度や受験制度について十分な情報を得ることに難しさを感じていた。したがって、教育期待をめぐる支援では、子ども本人だけでなく、保護者に対する進路情報の提供も重要である。

6.8 横のつながりに関する保護者の認識

横のつながりに関する回答では、保護者の多くが、同じネパールルーツや外国ルーツの友人・仲間は子どもにとって重要であると認識していた。特に、同じ境遇の友人や仲間の重要性については肯定的な回答が多く、強い否定はみられなかった。

図 横のつながりに関する保護者の認識(質問38-42)

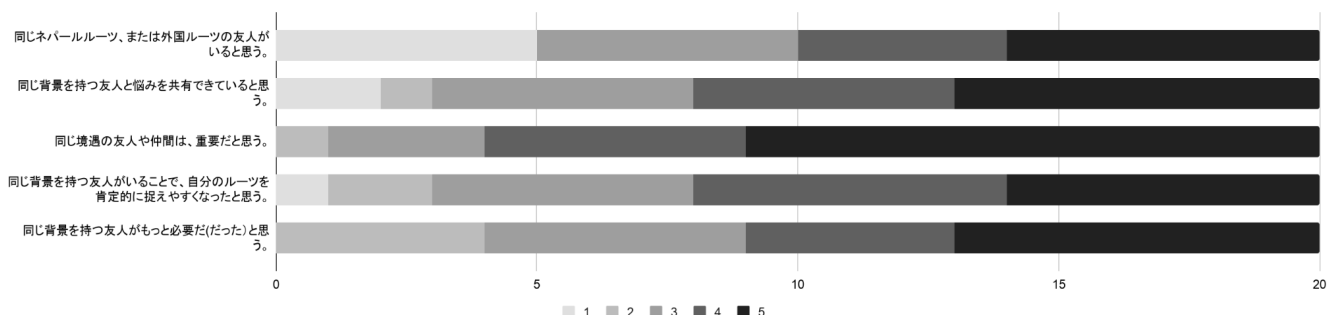


図6-7 横のつながりに関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

また、同じ背景を持つ友人がいることで、子どもは自分のルーツを肯定的に捉えやすくなると思うかについても、肯定的な回答が多かった。これは、保護者が、同じ背景を持つ友人との関係を、単なる交友関係ではなく、文化的承認や安心感につながるものとして捉えていることを示している。

ただし、同じ背景を持つ友人と子どもが実際に悩みを共有できていると思うか、同じ背景を持つ友人がもっと必要だったと思うかについては、肯定的な回答が多い一方で、中間的な回答もみられた。保護者は、同じ背景を持つ友人が重要であることは認識しているが、その関係の内実、つまり子どもがどの程度悩みを共有しているのかまでは必ずしも把握していない可能性がある。

第5章の子ども世代回答でも、同じ背景を持つ友人との交流は支援ニーズとして多く挙げられていた。ただし、子ども世代の語りでは、「保護者抜きで」同じルーツの人と集まれる場がほしいという声もあった。この点から、保護者が望むコミュニティ参加と、子ども世代本人が望む横のつながりのあり方は、必ずしも同じではない可能性がある。

自由記述では、同じ背景を持つ人との交流やコミュニティへのニーズが繰り返し示された。

P16自由記述：

「ネパール人保護者同士のつながりや、ネパールルーツの先輩や子どもから進路経験を聞く機会が必要だと思う。」

この語りからは、横のつながりが子ども同士の関係にとどまらず、保護者同士のつながりや、世代を超えたコミュニティ形成とも結びついていることがわかる。

6.9 縦のつながりに関する保護者の認識

図 縦のつながりに関する保護者の認識 (質問43-47)

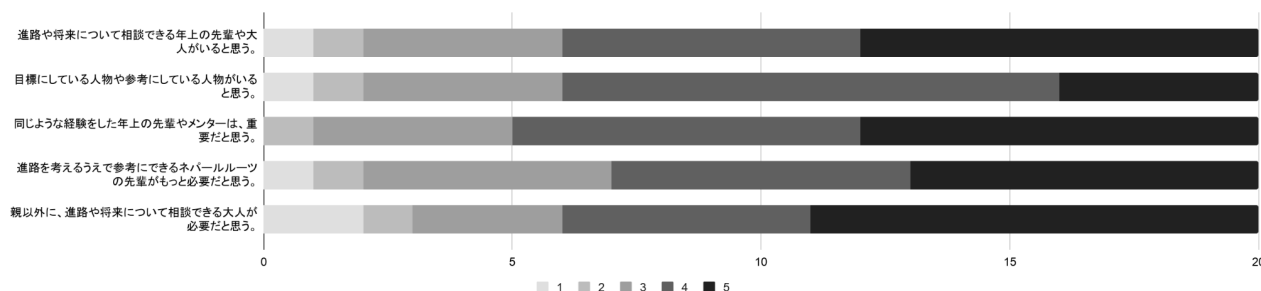


図6-8 縦のつながりに関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

縦のつながりに関する回答では、進路や将来について相談できる年上の先輩や大人、同じような経験をした先輩やメンターの重要性を認める回答が多くみられた。進路を考えるうえで参考にできるネパールルーツの先輩がもっと必要だと思うか、親以外に進路や将来について相談できる大人が必要だと思うかについても、肯定的な回答が多かった。

この結果は、保護者が、自分たちだけでは子どもの進路や将来に関する支援を十分に担えないと感じていることを示している。特に、日本の学校制度、受験制度、大学生活、就職活動を経験した年上の存在は、子どもにとって実践的な情報源となるだけでなく、保護者にとっても安心材料となる。また、第5章で参照した子ども世代の回答と比較すると、保護者の方が縦のつながりをより明確に支援資源として捉えている傾向がうかがえる。

自由記述では、学校や大学の選択、職場選びについて相談できる場所や、心話がができる先輩・仲間が必要だという意見がみられた。

P17自由記述：

「学校、大学の選択、職場を選ぶときに相談できる場所、心話がができる先輩や仲間が欲しいです。」

この語りは、縦のつながりが、進路情報の提供だけではなく、心理的な支えや将来像の形成にも関わることを示している。保護者は、子どもに同じ背景を持つ先輩やメンターがいることで、子どもが自分の経験をより安心して言語化し、将来を考えやすくなると期待している。

一方で、縦のつながりは、必ずしもネパールルーツの先輩に限定される必要はない。相談内容によっては、日本の教育制度に詳しい大人、専門分野を経験した先輩、学校の先生なども重要な相談相手となる。したがって、縦のつながりへの支援は、同じルーツを持つ先輩との接続と、進路や専門分野に応じた相談先への接続の両方を含む必要がある。

6.10 将来展望に関する保護者の認識

図 将来展望に関する保護者の認識(質問48-52)

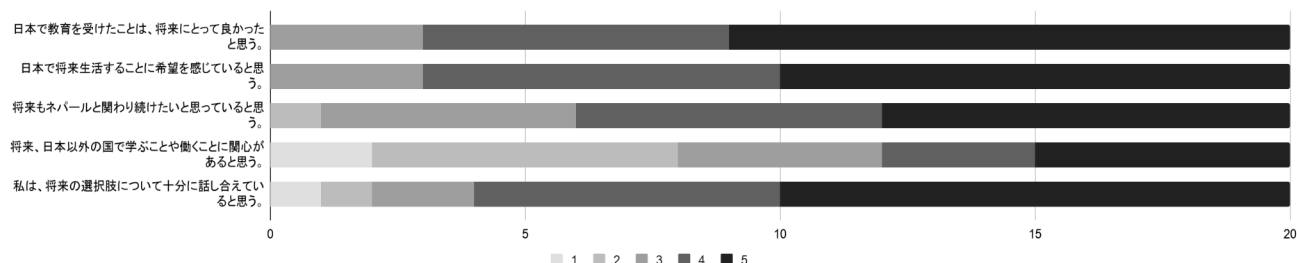


図6-9 将来展望に関する保護者回答分布

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

将来展望に関する回答では、子どもが日本で教育を受けたことは将来にとってよかったと思うか、子どもは日本で将来生活することに希望を感じていると思うかについて、肯定的な回答が多く、否定的な回答はみられなかった。保護者は、日本で教育を受けることを子どもの将来にとって肯定的に捉えている。

同時に、子どもは将来もネパールと関わり続けたいと思っているかについても、肯定的な回答が多くみられた。これは、保護者が、子どもの将来を日本社会への定着だけで捉えているわけではなく、ネパールとのつながりを維持することも重要だと考えていることを示している。この点は、第5章でみた子ども世代回答とも重なる。子ども世代の回答でも、日本で教育を受けたことを肯定的に捉えつつ、ネパールや他国との関わりを維持したいとする語りがみられた。

一方で、子どもが将来、日本以外の国で学ぶことや働くことに興味があると思うかについては、回答が分かれた。第6.2節で示したように、保護者自身は、日本だけでなく海外でも通用する進路を子どもに選んでほしいという期待を強く持っている。しかし、子ども本人が日本以外の国で学ぶ・働くことに興味を持っているかについては、保護者の認識は一樣ではなかった。

また、子どもと将来の選択肢について十分に話し合えていると思うかについては、肯定的な回答が多かった。保護者は、将来や進路について子どもと一定程度話し合えていると認識している。ただし、どのような将来像を共有しているのか、子ども本人の希望と保護者の願いがどの程度一致しているのかについては、第7章で親子ペアごとに検討する必要がある。

このような傾向から、保護者の将来展望には二つの特徴がある。第一に、日本での教育と生活を肯定的に捉えていること。第二に、日本だけに閉じない進路可能性や、ネパールとの継続的なつながりも重視していることである。保護者にとって望ましい将来と

は、日本社会に馴染むことと、ネパールルーツを保持すること、さらに国際的に通用する進路を持つことが併存するものであった。

6.11 保護者が必要としていた支援ニーズ

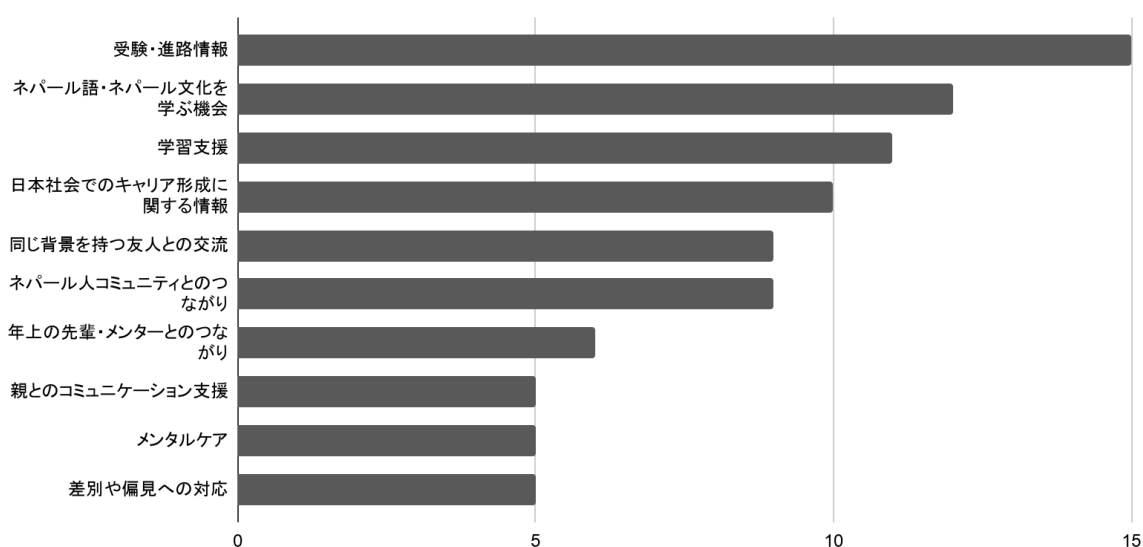


図6-10 保護者が子どもに必要なだと考える支援

出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

子どもに必要なだと考える支援に関する複数選択回答から、保護者が子どもに必要なだと考える支援は、日本語支援だけに限定されていないことがわかった。「受験・進路情報」15名、「ネパール語・ネパール文化を学ぶ機会」13名、「学習支援」11名、「日本社会でのキャリア形成に関する情報」11名、「同じ背景を持つ友人との交流」10名、「ネパール人コミュニティとのつながり」10名が比較的多く選ばれていた。また、「年上の先輩・メンターとのつながり」7名、「親とのコミュニケーション支援」5名、「差別や偏見への対応」5名、「メンタルケア」4名も選ばれていた。

この結果から、保護者が子どもに必要なだと考える支援は、教育・進路、文化継承、同じ背景を持つ人とのつながりにまたがっていることがわかる。とくに受験・進路情報が比較的多く選ばれていることは、日本の教育制度や進路制度に関する情報が、保護者にとって重要な支援課題として認識されていることを示している。また、ネパール語・ネパール文化を学ぶ機会も上位に挙げられており、保護者は子どもの日本での進路形成だけでなく、文化継承も重要な支援領域として捉えている。

ただし、回答は一つの項目に集中していたわけではない。保護者は、子どもの支援を、日本語、学習、進路、文化、コミュニティ、メンタルケアのいずれか一つに限定して捉えているのではなく、複数の支援が組み合わさるものとして認識していたと考えられる。

この点は、子ども世代回答とも重なる一方で、保護者回答では、受験・進路情報や文化継承に関する項目が相対的に強く示された点に特徴がある。

また、保護者回答を探索的にみると、いくつかの回答の組み合わせが確認された。日本の学校制度や受験制度に関する支援を必要としている保護者は、子どもに必要な支援としても、受験・進路情報や日本社会でのキャリア形成に関する情報を挙げる傾向がみられた。このことから、保護者にとっての制度理解は、保護者自身の不安を軽減するだけでなく、子どもの進路選択を支えるための条件として意味づけられていたと考えられる。

さらに、子どもにネパール語やネパール文化を維持してほしいと考える保護者は、ネパール語・ネパール文化を学ぶ機会や、ネパール人コミュニティとのつながりを支援として挙げる傾向がみられた。これは、保護者が文化継承を家庭内だけで完結するものとしてではなく、コミュニティや学びの場によって支えられるものとして捉えていたことを示している。

加えて、子どもとの世代差や価値観差を感じている保護者の中には、子どもの心理やアイデンティティに関する理解、親子間コミュニケーション支援、学校とのコミュニケーション支援を必要とする回答もみられた。この点から、保護者支援は、日本語翻訳や制度情報の提供にとどまらず、子ども世代の内面的経験を理解するための支援にも広がっていると考えられる。なお、これらは少数の質問票回答にもとづく探索的な読み取りであり、統計的な相関関係として一般化するものではない。しかし、保護者が求める支援が、制度理解、教育期待、文化継承、親子間コミュニケーションの複数領域にまたがっていることを理解するうえで、重要な手がかりとなる。

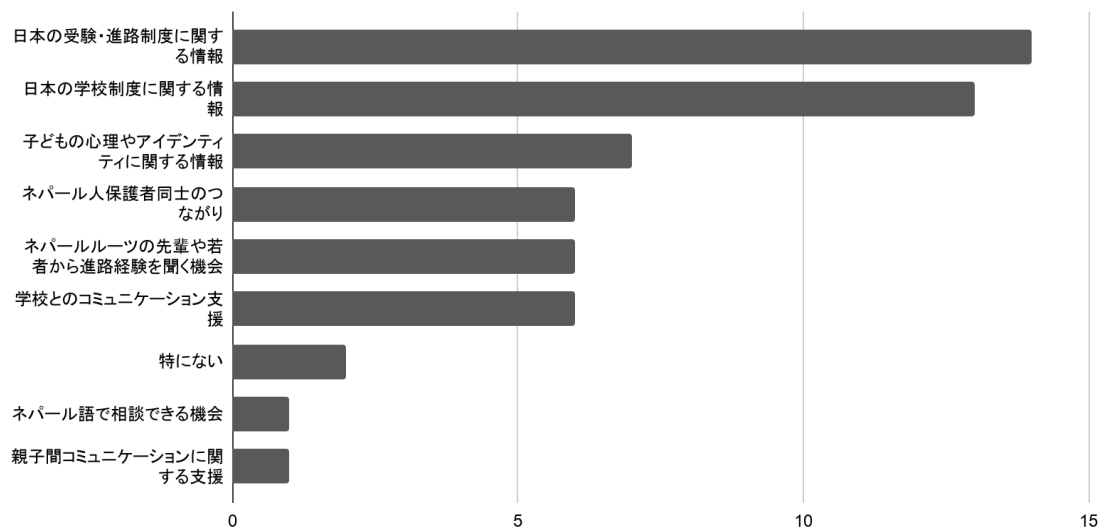


図6-11 保護者自身が必要としていた支援
出典：保護者向け質問票回答より筆者作成。

保護者自身に必要な支援については、「日本の受験・進路制度に関する情報」14名、「日本の学校制度に関する情報」13名が比較的多く選ばれていた。次いで、「子どもの心理やアイデンティティに関する理解」7名、「ネパール人保護者同士のつながり」6名、「先輩保護者や若者から進路経験を聞く機会」6名、「学校とのコミュニケーション支援」6名が挙げられた。一方で、「特になし」2名、「ネパール語で相談できる窓口」1名、「親子間コミュニケーション支援」1名もみられた。

この結果は、保護者自身にとっても、学校制度や受験制度に関する情報が重要な支援であったことを示している。また、子どもの心理やアイデンティティに関する理解を必要とする回答も一定数みられたことから、保護者は、子どもの教育や進路だけでなく、子どもの内面的経験をどのように理解すればよいのかについても支援を求めていると考えられる。

保護者自由記述では、子どもとの間で感じた文化差や、家の中と外の世界の違いについて、次のような語りがみられた。

P17自由記述：

「言葉と文化の壁で、家の中と外の世界は全く違うと感じたこと。」

この語りは、保護者が子どもの経験を理解しようとしながらも、日本の学校や友人関係の中で子どもがどのような世界を生活しているのかを十分に把握しにくいと感じていたことを示している。保護者支援は、単に日本語翻訳や学校制度の説明にとどまらず、子どもの心理、文化的所属、親子間の価値観差を理解するための支援としても必要である。

また、保護者自由記述では、今後の支援環境への期待も示された。

P08自由記述：

「これからネパールルーツの子育てしやすい場が増えていくことを期待しています。」

この語りからは、保護者が個別家庭だけで子育てや教育上の困難を抱えるのではなく、学校、地域、コミュニティの中で支えられる場を求めていることがうかがえる。

以上から、保護者にとって必要な支援は、受験・進路情報、日本の学校制度への理解、ネパール語・文化を学ぶ場、同じ背景を持つ人とのつながりを含むものであった。また、保護者回答では、子ども世代回答に比べて、年上の先輩やメンターとの縦のつながりへの期待が比較的明確に示された。ただし、その期待は主に進路情報、経験談、ロールモデルを得るためのものであり、心理的安心や文化的承認という点では、同じ背景を持つ人との横のつながりの方がより直接的な意味を持っていたと考えられる。

6.12 小括

本章では、保護者20名を対象とした質問票回答とインタビューの語りをもとに、保護者が子どもの困難と支援ニーズをどのように認識しているのかを整理した。

保護者は、子どもの日本語能力や学校生活について、比較的肯定的に捉えていた。日本語での日常会話や授業理解に大きな困難があるとする回答は少なく、保護者は、子どもが日本の学校生活に一定程度適応していると認識していた。一方で、日本語ができるために周囲から「困っていない」と思われる可能性については、一定の認識もみられた。

学校生活・社会適応に関しては、保護者は子どもが日本の学校文化に馴染んでいると捉える傾向があった。しかし、子どもの孤立感や学校内での違和感については、必ずしも強く認識されていなかった。この点は、第5章でみた子ども世代の語りと比較すると重要である。子ども本人が学校生活で感じていた細かな違和感や孤立感は、保護者からは見えにくい場合がある。

ルーツ・文化継承については、保護者は、子どもがネパールルーツを誇りや強みとして捉えることを望み、ネパール語やネパール文化を維持してほしいという期待を強く持っていた。一方で、子どもが実際にどのような場面で所属感の揺らぎや文化的な距離を経験しているのかについては、保護者によって認識に差がみられた。

親子関係や相談しやすさについては、保護者の多くが、子どもと一定程度話せている、子どもの悩みを理解できていると認識していた。しかし、子どもの孤立感や疎外感を十分に知ることができていなかったと感じる回答もあり、保護者自身も、子どもの内面的経験をどこまで理解できているのかについて揺らぎを抱えていた。

教育期待については、保護者は自らの期待を、子どもの将来を支えるものとして意味づける傾向が強かった。教育は子どもの将来安定にとって重要であり、安定した職業や海外でも通用する進路を望む回答が多くみられた。一方で、その期待が子どもにとってプレッシャーになっているのかについては、保護者側では相対的に認識されにくい傾向があった。

支援ニーズについては、保護者は、受験・進路情報、日本の学校制度への理解、ネパール語・文化を学ぶ機会、学習支援、キャリア情報、同じ背景を持つ人とのつながりを重要な支援として捉えていた。回答は一つの項目に集中していたわけではなく、教育・進路、文化継承、学校制度理解、コミュニティ形成にまたがっていた。また、保護者自身にとっても、日本の学校制度や受験制度に関する情報、子どもの心理やアイデンティティを理解するための支援、保護者同士のつながりが必要とされていた。

以上から、保護者は、子どもが日本語や学校生活に一定程度適応していると認識しつつも、進路情報、教育期待、文化継承、同じ背景を持つ人とのつながりについて強い関心を持っていたことが確認された。保護者にとって支援ニーズは、現在子どもが困っているかどうかだけではなく、将来困らないための備えとしても意味づけられていた。

また、保護者回答では、年上の先輩やメンターとの縦のつながりへの期待も一定程度示された。ただし、その期待は主に進路情報、経験談、ロールモデルを得るためのものであり、子ども世代の語りにおいて確認された横のつながりとは機能が異なる。本研究の結果からは、横のつながりは心理的安心、共感、ルーツの肯定を支える関係として、縦のつながりは進路や将来選択に関する情報資源として位置づけられる。

7 親子ペア事例の比較

7.1 親子ペア分析の方法

本章では、子ども世代と保護者の双方にインタビューを実施できた親子ペア事例を対象に、親子間の認識の一致と不一致を検討する。第5章では子ども世代の質問票回答から全体的な傾向を整理し、第6章では保護者の質問票回答から保護者側の認識を整理した。これに対し本章では、個別の親子ペアに焦点を当て、同じ家庭の中で、子ども世代と保護者が同じ経験をどのように意味づけているのかを分析する。

本章で扱うのは、親子ペアとして比較可能な語りが得られた事例Aから事例Eである。各事例は、子どもの年齢、出生地、教育経験、学校段階、家庭内使用言語、保護者の在日年数などにおいて異なる。そのため、本章では事例間の優劣や典型性を示すのではなく、それぞれの事例を通じて、親子間の認識差がどのような場面で現れるのかを検討する。

分析では、日本語、学校生活、ルーツ・文化継承、親子関係、教育期待、横・縦のつながり、支援ニーズに着目する。ただし、各事例で同じ項目を同じ分量で記述するのではなく、その事例において特に特徴的な論点を中心に上げる。各事例の詳細な比較は表に示し、本文では親子間の一致点とずれの意味を中心に整理する。

なお、本章では、親子間の認識差を、単純に「保護者が子どもを理解していなかった」と捉えることはしない。保護者は子どもの学校生活や将来を心配し、支えようとしている。一方で、子どもが経験する孤立感、違和感、価値観のずれ、制度仲介の負担は、必ずしも家庭内で明確に語られるとは限らない。したがって、親子間の認識差は、理解不足というよりも、子ども世代と保護者世代が異なる経験や立場から、同じ出来事を異なる角度で意味づけていることによって生じるものとして捉える。

7.2 事例A：安定した学校適応と文化継承をめぐる親子の認識差

事例Aは、A本人と保護者がともに、日本語や学校生活に大きな困難はないと捉えている一方で、ネパールルーツの意味づけや支援ニーズについては違いがみられる事例である。A本人は日本生まれで、公立中学校に通っている。質問票では、日本語に関する困難や学校生活上の不安は低く、本人も学校生活において大きな悩みはないと回答していた。保護者回答においても、A母・A父はいずれも、A本人に「特に大きな困難はない」と捉えていた。したがって、事例Aは、スコア上は親子ともに安定的な適応を示す事例として位置づけられる。

A本人は、ネパール人であることについて、日常的に強く意識しているわけではなかった。

A：「ネパール人であることは別にあまり深く考えない。」

また、家と学校での自分についても、意識的に隠したり、強く切り替えたりしているわけではないと語っていた。

A：「分けるのは家と学校で分けてる。何か気をつけてるかとかは思いつかない。」

A：「隠してる意識は特にない。聞かれたら答えればいいよねって感じ。」

一方で、A本人は、日本の友人関係の中にいる時とネパールルーツを持つ人との関係の中にいる時とで、考え方やふるまいに違いがあるとも語っていた。

A：「日本っぽい自分とネパールっぽい自分は、考え方という面で違う気がする。マナー的なやつはちょっとと思うかも。日本人の周りにいると日本人ぽくするかも。」

A：「もともとそんな気になってるということもなかったけど、慣れたというか、みんな仲良くしてくれるし、日本人みたいな接し方だからそんな気にならない。」

A：「学校にネパール人がいたら、ネパール人として接するかも。環境は日本でも、ネパール人として接しそう。」

これらの語りからは、A本人にとってネパールルーツが否定的なものではない一方で、日常生活の中で常に強く意識されるものでもないことがわかる。ただし、完全に意識されないわけでもなく、関わる相手や場面によって、日本社会に馴染む自分とネパールルーツを持つ自分の感覚が切り替わることもある。

A母は、A本人が幼少期に自分を日本人として捉えていたことや、ネパール文化に対する恥ずかしさが残っている可能性を語っていた。

A母：「小さい頃は日本の生活が便利だし、ネパールの文化に馴染んでないからか、『（私は）日本人だから！』って言うことがあった。今もネパールの文化に対して恥ずかしさが少しは残っていると思う。」

また、A母は、文化継承が家庭だけで自然に続くものではなく、実際に見たり接したりする機会によって形成されるものだとして捉えていた。

A母：「ネパールの文化は前の世代の真似をする傾向があると思う。でも逆に、文化を直接見る・接する機会がないから廃れていくんだと思う。私たちのあたりまえは両親や親族を見て作り上げられたものじゃないかな。」

A本人も、ネパール文化について、家庭内で母親から教わるだけでなく、学ぶ機会がより必要であると語っていた。

A：「なんかその文化的なこととかは忘れちゃうじゃん、ずっとこっち（日本）いたら。だから学ぶ機会が欲しい。お母さんに教えてもらうことが多いけど、もっとあってもいいと思う。」

一方、A父は、A本人が日本人の前とネパール人の前で態度を変えているとは認識していなかった。

A父：「変えてないと思う。誰の前でも同じ態度だと思う。これに関しては完全に日本人という姿、あるいは日本人としっかり関わっている姿を見たことがないかもしれない。報告を聞く限りは変わらない。」

この点から、事例Aでは、A本人が自分の中で感じている場面ごとの違いと、保護者が外側から見ているA本人の姿との間に、微細なずれがあることがわかる。ただし、こ

れは大きな対立ではなく、学校や友人関係の中でのA本人の姿が、家庭内では完全には見えにくいことによるずれである。

進路や教育期待について、A本人は、保護者が受験制度をある程度理解しており、親の情報量によって困ったことはないと言っていた。

A：「親は受験制度について塾のやつでたくさん言われてるから、まあまあ知ってる方だと思う。1から10だったら7とか。親の情報量で困ったことはない。」

一方、A母は、子どもの将来を思う気持ちから、教育に対する理想が高くなり、圧をかけてしまうことを自覚していた。

A母：「理想は高いと思う。無理してでも頑張れと思う。今しか頑張れない時期じゃないと思う。私たちはいくら頑張ってもここまでしか来れなかった。朝出勤し、夜退勤する、そんな生活では今後の難しい人生を乗り切れないと思ってしまう。幸せになってもうることが一番だけど、競争が難しくなる今後の社会で生きていくために結構圧をかけてしまっている。でもしょうがない。まあ無理でもその時はそれで仕方ないと思えるよ。」

親の苦労をA本人がどのように受け止めているかについては、A母とA父の間でも見方に違いがあった。

A母：「親の苦労は特に考えてなさそう。自分の意思でやってそう。」

A父：「母から苦労話を聞いて、頑張らないと思ってそう、と感じたことがある。」

ここでは、親子間のずれだけでなく、同じ保護者の中でも子どもの努力の背景をどう見るかに違いがあることが示されている。A母はA本人の主体性を重視している一方で、A父は親世代の苦労がA本人の意識に影響している可能性を見ている。

支援ニーズについて、A母は、A本人個人だけでなく、ネパールルーツの子ども世代全体を視野に入れながら、メンタルケアや親子間コミュニケーションの必要性を語っていた。

A母：「ネパール人の子どものメンタルケアについては、今まで考えたことがなかった。Aの場合は一人っ子だから話し相手がいないのは少し懸念してるかな。でもメンタルヘルスの懸念は日本の閉鎖的な雰囲気のあるんじゃないかな。親子がお互いの、コミュニケーションが足りてないと思う。子どもの活動（保護者会・運動会）などにしっかり参加しているかも気になるね。ある程度干渉する必要もあると思う。あとは、子ども同士比較しないことも大事だと思う。昔は私もしていた。親が自分をコントロールせず、叩くなどの、躰が厳しいとメンタル的に耐えられなくなってしまうのも心配。」

A本人は、外見によるまなざしを強い困難としては語っていないが、見られることへの違和感には言及していた。

A：「そんな感じたことがない。でもめっちゃこっち見られてるなーって時は嫌なこともある。」

A保護者は、ネパール人として特別な支援というよりも、進路指導そのものがもっと必要だったと言っていた。

A保護者：「進路指導とかもっと欲しかった。日本人でもいいけど、支援が欲しかった。ネパール人としてではなく、普通にだとも思う。」

また、A本人は、同じ背景を持つ人とのつながりについて、必要性を認めつつも、自分自身に差し迫った相談ニーズがあるわけではないと語っていた。

A：「うん、いたほうがいいと思う。でも具体的に何かを相談したいとかはない。」

以上のように、事例Aでは、日本語や学校生活に大きな困難がないという点では親子の認識はおおむね一致していた。一方で、ネパールルーツの意識、文化継承の必要性、教育期待の意味づけ、メンタルケアやつながりの必要性については、A本人よりも保護者の方が強く意識していた。事例Aにおける認識差は、困難の有無をめぐる大きな対立ではなく、安定した学校適応の内側で、ルーツや支援をどの程度意識するかをめぐる温度差として理解できる。

表7-1 事例Aにおける親子間の認識比較

分析項目	子ども世代の認識	保護者の認識	一致／不一致	解釈
日本語	日本語での日常生活や学校生活に大きな困難はない。	日本で生まれ育った子どもには、日本語上の大きな問題はないと捉えている。	一致	日本語はこの事例における主な困難としては現れていない。
学校生活	学校生活に大きな悩みはなく、周囲にも自然に受け入れられていると感じている。	子どもは学校生活に馴染んでおり、大きな困難はないと認識している。	一致	親子ともに、学校生活への適応は安定していると捉えている。
ルーツ／文化	ネパールルーツは深く考えるものではなく、日常の中に自然にあるものとして捉えている。	ネパール語や文化との距離が広がることを懸念している。	不一致	子どもにとっては自然な適応であるものが、保護者にとっては文化継承の課題として見えている。
親子関係	特別な相談ニーズは強く語られない。	子どものメンタルケアや親子間コミュニケーションの必要性を一定程度感じている。	部分的不一致	子ども本人は困難を強く意識していないが、保護者は将来的・予防的な支援の必要性を感じている。
教育期待／進路	進路情報や受験制度について、親の情報量で大きく困ったとは感じていない。	親世代の苦勞を踏まえ、子どもには将来安定してほしいという期待を持っている。	部分的不一致	子どもは現時点の困難を強く意識していない一方で、保護者は将来への不安から教育期待を強めている。
支援ニーズ	同じ背景を持つ人とのつながりはあってもよいが、差し迫った必要性としては語らない。	進路情報、相談先、文化継承、親子間コミュニケーションに関する支援を必要としている。	不一致	支援ニーズは、子ども本人よりも保護者側で強く認識されている。

7.3 事例B：学校移動と進路選択をめぐる親子間の認識差

事例Bは、日本とネパールの双方で成育経験を持ち、ネパール系インターナショナルスクールから日本の公立学校へ移行した子ども世代と、その母親の親子ペアである。B本人は、日本の保育園を経験した後、東日本大震災をきっかけにネパールへ移動し、約5年間をネパールで過ごした。その後、日本に戻り、最初はネパール系のインターナショナルスクールに通い、小学校3年生から日本の公立学校へ移行した。本事例は、日本語そのものの困難よりも、学校制度の移動、保護者による進路判断、教育期待、親子間の価値観差が中心的に現れている点に特徴がある。

B本人にとって、ネパールでの生活は、単なる一時滞在ではなく、親族との密接な関係の中で形成された生活経験であった。

B：「母親の家族に預けられて、ネパールに1人、親は日本。どちらかというとなっちの方が楽しかった。いそこではあるけど、ほぼ兄弟だった。今は1人だから。」

B母もまた、東日本大震災後にB本人をネパールへ送ったことを、親子の分離として苦しく感じつつも、当時の状況下ではやむを得ない判断であったと語っていた。

B母：「震災の時も離れたくなかったけどしょうがなかった。でもいつか一緒に良かったから、両国比較とかなく、一緒にいたい気持ちを最優先し、日本につれてくることにした。」

日本に戻った後、B母は、B本人がネパール人コミュニティの感覚を持ったまま日本で生活できるよう、最初はネパール系インターナショナルスクールを選択した。

B母：「来日してから、ネパール人のコミュニティの感覚を楽しんだ後だったのもあって、エベレスト（インターナショナルスクール）にした。（中略）来日してすぐのメンタルヘルスも気にして、どちらの生き方も同時に並行できるために入れた。インターというより、ネパールの学校に入れたと言いたい。」

その後、日本の公立学校へ移行した背景には、B本人が日本で生活していく可能性を見据え、親世代が経験した日本語の困難を繰り返させたくないというB母の思いがあった。

B母：「どこかで絶対日本に住み続ける自信がでてきた。（中略）自分たちは言語ができなくてこんなに困っている。日本で生まれて状況は状況だったけど、同じシチュエーションになってしまうのは勿体無い。言語だけが違うだけで教育の質も高いから日本の学校に移そうってなった。」

このように、B母の学校選択は、単に日本の学校の方がよいという判断ではなく、B本人のメンタルヘルス、ネパールとのつながり、日本での将来、日本語習得を同時に考えた結果であった。一方で、B本人の語りからは、学校制度の移動に伴う学習上のずれも見える。

B：「日本語自体は保育園やインターの日本語でやってて、困ってなかった。生まれが日本だし。一番難しいと思うのは、特別な用語。理科で言うと地球温暖化。英語で習ってきて、理屈もわかっているけど、頭の中ですり替えるのが一番難しかった。分数とかも、何言ってるんだと思った。基準が違う物はわからない。」

B母も、公立学校への移行後に、教科語彙や低学年で学ぶ内容の抜けがあったことを認識していた。

B母：「専門的な言葉は3年生で転校したのもあり、1、2年生の分と保育園幼稚園で学んだ部分が抜けていた。家の環境もネパール語だったから、家で教えられることが少なかった。よく頑張ってた。」

さらにB母は、子どもを学校に入れるだけではなく、親自身も日本語を学び、家庭で支える必要があると語っていた。

B母：「学校に入れてから、自分もひらがなしかできないのが嫌だった。だからBと同時に日本語を勉強した。親として努力した。学校に入れて終わりだと、部屋に閉じ込めて終わりみたい。だから自分で努力してサポートしないといけない。（中略）子どもが努力するのは当たり前で、宿題や復習できるレベルの日本語を親も努力しないといけない。」

ここでの困難は、日本語が話せるかどうかではなく、異なる教育制度を移動した際に、教科語彙や学習基準をどのように接続するかという問題である。また、それを支えるために、保護者自身も学校制度や日本語を学び続ける必要があった。

一方、現在の学校制度や進路情報については、B本人が自分で判断し、必要に応じて母親に説明する場面が多くなっていた。

B：「ほぼほぼ自分で判断して、決断も自分で。説明もするけど、理解されなかったら、もういいよ忘れてと対応する。（理解度は）何も言ってなきゃ0、ある程度言ってるから50じゃないかな。」

B母も、高校進学時には情報を十分には把握できず、B本人が自分で情報収集を進めていたと語っていた。

B母：「高校進学時は（情報を自分は）はっきりわからなかった。大体は聞いていても、結局何もわからないから、学校の情報集めからはB本人がやった。今はそこまで外部の人（中学校進学時まで助けてくれた日本人の知り合いなど）たちに助けを求めない、息子が自分で進めるようになったから。」

この点で、B本人とB母の語りは一致している。ただし、B本人にとってそれは自立であると同時に、説明しても理解されにくいなら自分で処理するという制度仲介の負担でもあった。

文化適応やアイデンティティについて、B本人は、自分の方が親よりも日本社会に早く馴染んだと感じていた。

B：「Bは年数が短くても自分の方が馴染むのが早かったと感じる。親は中身はネパール人、こんだけ日本にいてもマナーとかの部分はまだできてないんじゃないかな。」

同時に、B本人は、ネパールルーツと日本社会への適応を、場面によって自然に切り替えているとも語っていた。

B：「Aはあっちの人とは馴染んでいる自分を見て思う。行事とかも一緒だし。両立できている気がする。割合は場所による。（中略）学校でめっちゃ外人すると浮くから。場にふさわしい態度をとる。無意識でDぽくなってる気がする、自然と。」

B母も、B本人をA、B、Dに近いものとして捉えており、親子間の認識差に一定程度気づいていた。

B母：「A, B, D. 会話の中で、『あなたは知らないでしょう』という言葉聞くことがある。これはこういうことだよ。学校にネパール人がいてもきっと日本人として接しそう。」

これらの語りからは、B本人が日本社会とネパールルーツを場面に応じて調整していること、そしてB母もその調整や親子間の差を一定程度認識していることがわかる。

教育期待をめぐっては、親子間のずれがさらに明確である。B本人は、親からの期待について、支えよりもプレッシャーとして強く受け止めていた。

B：「支え1, プレッシャー4. 期待しすぎないでほしい。この職業になったらすごい、みたいなのが伝わる。そこまでは考えてないし、好きなことさせて欲しいとずっと思う。（期待を）嬉しいと思うことはなかった。周り比べられた時一番感じる。」

B本人は、努力しても十分に認められていない感覚も語っていた。

B：「勉強に対する期待が大きすぎて、たまに嫌になる。（中略）周りからは言ってもらえるけど、親に褒めてもらえない気がする。やってないと言われるけど、やってたら当たり前だと言われる。」

一方、B母は、自分の教育期待が高いことを自覚していた。その背景には、親世代自身の移住経験や日本語の壁があった。

B母：「自分の期待はとっても高いと思う。（中略）私たちが来日して、言語の壁があって、今も苦しんでいる。せっかく日本で住んで、ここで教育を受けたし。（中略）自分たちの苦労を繰り返してほしくない。」

B母は、その期待がB本人にプレッシャーとして届いている可能性も認識していた。

B母：「プレッシャーに思っそう。先のことまで考えてなさそうだし、自分たちの苦労を実際に見たことがないからこそ、ここまで勉強する必要ある？と思っそう。」

さらにB母は、親族や周囲との比較が、B本人にとってプレッシャーとして受け止められている可能性にも触れていた。

B母：「普通に言っることだけど、プレッシャーに感じている時点で、期待が大きすぎると思っそう。周りの兄弟が〇〇した、すごいよね、という文化がある。でもそれを比べられたって思われている可能性もある、否定はできない。」

将来像について、B本人は、親と最終的な目標は似ているが、そこに至るまでの考え方が違っと語っていた。

B：「最終着地地点は同じことを考えていると思っ。でもそこに至るまでの経過は違っと思っ。（中略）なんとななるっしよと思っ。（中略）でも親は全部しっかりやっった方がいいと言っ。」

B母も、子どもと親が望む安定した将来の間には違っがある可能性を語っていた。

B母：「少し違っ。子どもはどんな人生をいいと思っているかまだわからないと思っ。（中略）でも私たち（の希望）は安定した収入があって、いいところで金銭的・家族的な問題がなく成功してほしい。」

支援ニーズについて、B本人は、自分自身に必要な支援というより、親が制度や進路を理解できる支援があれば、自分の説明負担が軽くなると語っていた。

B：「親にも、進路選択について相談できる場所や情報提供が必要だっと思っ。あっった方がいいと思っ。自分の説明が楽だし、理解してもらっった方が楽だから。」

以上のように、事例Bでは、日本語能力そのものではなく、教育制度の移動、教科語彙の接続、親の進路判断、教育期待の受け止め方をめぐって親子間の認識差が現れていた。B母は子どもの将来を思って選択し、支えようとしていたが、B本人はその一部をプレッシャーや説明負担として受け止めていた。この事例は、保護者への制度情報や進路情報の支援が、子ども本人の制度仲介負担を軽減する支援にもなりうることを示している。

表7-2 事例Bにおける親子間の認識比較

分析項目	子ども世代の認識	保護者の認識	一致／不一致	解釈
学校移動	3種類の学校を経験したが、大きな悩みではないと語る。	震災後の安全確保、家族で一緒に暮らすこと、子どもの孤立を避けること、日本での将来を考えて学校選択を行った。	部分的 一致	親子ともに学校移動に対し否定的ではなく、保護者は安心と将来、本人は生活経験として自然に受け止めている。
日本語・学習	日常会話には困らないが、用語や内容の置き換えに困難があった。	低学年で学ぶ内容や教科語彙に空白があり、親も日本語を学びながら支える必要があったと認識している。	一致	日本語の日常会話ではなく、教育制度の移動に伴う教科学習上のずれが課題となっていた。
学校制度・進路理解	基本的に自分で解決し、親に説明しても伝わらない場合は流すことがある。	高校進学以降は、周りに頼るよりも本人に任せることが増えたと認識している。	部分的 一致	保護者が子どもの制度理解の高さに頼っており、子どもの制度仲介負担については十分に共有されていない。
ルーツ・適応	Bを強く選びつつ、AやDも当てはまると捉える。場面に応じて、ふさわしい態度を自然に調整している。	A, B, Dに近いと捉え、「あなた知らないでしょう」という言葉から、子どもが親より日本社会を理解していると認識している。	一致	同じ選択肢を選び、Bについては、お互い子どもの方が日本社会に馴染んでいると認識している。
親子関係	親とは話せるが、制度や進路について説明しても理解されにくいなら自分で処理してしまう。	子どもが話さないことについて、親には日本のことが分からないと思っているのではないかと認識している。	部分的 一致	親子ともに話さない領域の存在を認識しているが、関係の悪さではなく、制度理解や立場の違いから生じている。
教育期待・進路	親の期待を支えでありプレッシャーと語り、好きなことをしたい、十分に褒められていないと感じている。	自分の期待が高いことを自覚しつつ、自分たちの苦労を繰り返してほしくないという思いから勉強を重視している。	不一致	保護者にとって教育期待は将来安定への願いであるが、本人には比較、職業期待、褒められにくさとして経験されている。
支援ニーズ	自分自身の支援ニーズは明確ではないが、親が制度や進路を理解できる支援があると、自分の説明負担が軽くなると語る。	学校移動時には親も日本語を学び、家庭で支える必要があると考える一方、明確な制度要求としては「特にない」とも語る。	部分的 一致	ニーズは、子どもへの直接支援だけでなく、保護者の制度理解を支えることで子どもの負担を減らす形で現れている。

7.4 事例C：安定的な学校適応と支援認識

事例Cは、本人（C）と母親（C母）の双方が、学校生活や日本語に関して大きな困難はないと捉えている一方で、教育期待、文化継承、支援ニーズの意味づけにおいて微細なずれがみられる事例である。C本人は日本生まれで、日本の公立学校に通う中学生であり、日本語や学校生活を主たる困難としては捉えていなかった。母親もまた、C本人が学校に行きたがらないことがなく、大きなトラブルを家庭で語っていないことから、学校生活に馴染んでいると認識していた。したがって、事例Cは、親子ともに安定的な適応を示す事例として位置づけられる。

C母は、C本人が学校生活に馴染んでいると認識する理由として、家庭で大きなトラブルを共有していないことや、学校や部活動に行きたがらないことがないことを挙げていた。

C母：「これまで学校行きたくないって言ったことがないんだよね。普通嫌なこととかあったら朝、行きたがらないと思うんだけど。あの子、熱があっても学校に行くって言うんだよ。だから学校では問題なく過ごしていると思うんだ。」

ただし、C母は、C本人が家庭であまり多くを語らないことや、過去の友人関係上のトラブルがいじめに近いものだった可能性にも言及していた。

C母：「でもあの子、学校のことを私が聞くまで全然話さないんだよね。来る途中の道で全部忘れちゃった、とか言って。だからたくさん詮索しているようになるけど、家に帰ってきたら聞くようにしているよ。一回学校から電話がかかってきたことがあった。それでトラブルに巻き込まれていたことを知ったんだよね。そこから聞くようにしてるけど、特に問題は起きてなさそう。」

この二つの語りを合わせると、事例Cでは、親子ともに「大きな困難はない」と捉えていても、子ども本人がすべてを家庭で語っているわけではないことがわかる。学校に行きたがらないことがないことは、保護者にとって重要な適応の指標であるが、それだけで学校生活のすべてが共有されているとは限らない。

ネパール語やネパール文化について、C本人は、家庭では主に日本語を用いており、ネパール語は限定的に使用していると語っていた。ただし、ネパール語への関心がないわけではなく、親族の集まりやパーティーなどで大人たちが話している内容をより理解したいという気持ちも示していた。

C：「まあ、もうちょっと難しい言葉とか意味とか知りたい。いろんな人が面白そうに話してるのとか自分も聞きたいなって。寂しいとかではなく、普通に興味がある。」

一方、C母は、C本人が幼少期にネパール語をよく話していた経験を踏まえ、現在は最低限のコミュニケーションができればよいと考えるようになったと語っていた。

C母：「あの子を小さい頃45日間ネパールに連れて帰ったことがあるんだよ。その時、帰ってきたら保育園で日本語が分からなくなっているかも、と保育士さんに言われたんだ。その時あの子、完璧にネパール語ができるようになっていた。日本語も数日で元通りに戻ったから。もうそこからは最低限のコミュニケーションができればいいかなと思うようになったよ。」

C母は、C本人の進路や人生についても、本人の選択を尊重したいと語っていた。

C母：「彼の人生だからね、彼が好きなように選べばいいと思う。幸せになってほしい、それだけが私の願いだよ。自分が押し付けていつか、何してくれたんだ、と思われたくもない。」

C本人は、日本語で友人と普通に話せる時に、自分も周囲と同じだと感じることもあると語っていた。

C：「みんなと普通に喋ってる時とか、あまり言葉の壁を感じなかった時、ここ一緒だと思ふことがある。」

C母も、C本人について、日本人でもありネパール人でもある存在として捉えていた。

C母：「どっちの人か、って難しいね。日本人だなんて思うこともあるよ。日本に住んでたら、日本人っぽくなってしまう。それを悪いことだとは思ってないよ。国籍は何って聞かれたらもちろんネパールだけど。」

これらの語りからは、事例Cでは、日本社会への適応とネパールルーツの維持が、強い対立として経験されているわけではないことがわかる。C母は、C本人が日本社会に馴染んでいることを否定的には捉えておらず、C本人も、ネパール語や文化への関心を持ちながら、日本での日常生活を自然に送っている。

親子関係について、C本人は、学校の話や友人関係、進路について親に話しやすい一方で、テストや成績、学校生活のトラブルなど、マイナスな内容は話しにくいと語っていた。

C：「まあ、難しい話とか、打ち明けづらい話した時。学校の話とか、まあテストとか。マイナスな部分を主張する時。」

C母も、C本人が本音をすべて話しているわけではない可能性を一定程度認識していた。

C母：「まああの子、基本は報告しているんじゃないかな…してると思うけどね…いやでも意外と言っていないことも多いのかな。言いやすい環境を整えることを大事にしてるけど。」

この点から、事例Cでは、親子関係が比較的安定している場合でも、子どもが話しにくい内容が残ることがわかる。ただし、それは親子関係の悪さとしてではなく、子ども本人がマイナスな出来事をどこまで家庭に持ち込むかという調整として現れている。

教育期待について、C本人は、親の期待に応えたいという気持ちを親孝行や自立への思いと結びつけて語っていた。

C：「期待に応えないといけないと覚ることもある。親が毎回こんな苦勞するなよ、みたいに言ってるから、それには応えて親孝行したいなって。（中略）（親の生活を楽にさせたいというよりは、自立して）大丈夫だよと言いたい。」

C母は、自分が期待を高く持ちやすいことを認めつつ、C本人はそれを深刻には受け止めていないのではないかと捉えていた。

C母：「私誰に対しても高く期待してしまうタイプかもしれない。でもそれなりに支えてもらっていると覚るんじゃないかな。プレッシャーになりすぎたかなと思ふこともあるけど、あの子ケロッとしてるから、そこまで深刻に捉えてなさそう。」

C母は、教育期待の背景について、将来の選択肢を狭めないためであると語っていた。

C母：「将来どんな進路に進みたいか分からないじゃない？でもその時あの時勉強していればと思って欲しくないんだよね。（中略）自分の経験からきた後悔とかではない。普通に教養があればあるほど、人生が豊かで楽しくなると思うんだよね。」

事例Cにおける教育期待は、Bのような強い対立としては現れていない。しかし、C本人にとっては親孝行や自立への責任感として経験され、C母にとっては将来の可能性を広げるための支えとして語られている。ここには、明確な衝突ではないが、期待の意味づけにおける微細な差がある。

支援ニーズについて、C本人は、同じ背景を持つ相談相手の意義を認めつつも、自分自身には親や学校の先生がいるため、それ以上は強く求めていないと語っていた。

C：「みんなが思ってることと僕も同じで、悩みとか、それが支えになると思う。でも相談相手は親とか学校の先生がいるから、それ以上にいても、いらないかな。」

一方で、C本人は、同じような経験をした人であれば話しやすいとも語っていた。

C：「うん、ある。言語がちゃんと伝わったり、同じような感じで経験した人とか。気軽に話せて、いろんなこと打ち明けられると思う。」

C母は、ネパールルーツの子どもや保護者にとって、同じコミュニティの中で進路情報を共有できる場が必要であると語っていた。

C母：「今ネパール人増えているじゃん、だから私たちだけじゃなくどの親にも必要だと思うんだ。特に高校行った時。（中略）同じコミュニティの人の人に、中学校行く時これどうするの、どこに行くべきなの、塾とかどこに行くのが正解なの、とたくさん聞かれる。」

C母：「夏には学校見学に行くのがいいよ、学校選びはこうするのがいいよ、ていうのをすでに経験した人から聞けるのはすごく助かる。」

また、C母は、日本社会における情報共有の少なさにも触れ、よりオープンに相談できる場が心理的負担を減らす可能性を語っていた。

C母：「私だけかもしれないけど、日本人ってほとんど自分のことシェアしないよね。（中略）家族のことが外に出ないようにするよね。まあいいことでもあるし、悪いことでもあると思う。（中略）私たちみたいにオープンに話せたら心理的ストレスも減りそう。」

多文化理解教育について、C本人は意義を認めつつも、自分自身が紹介することには恥ずかしさや不安もあると語っていた。

C本人：「面倒くさいとかではないけど、なんか少し恥ずかしいから。なんか、不安になっちゃう、なんかみんなが知らなかったり、というか興味無かったりしたらどうしようって。役に立つと思う。いろんな人がいるんだなっていうのを知ってもらえるから。」

以上のように、事例Cでは、親子ともに日本語や学校生活に大きな困難を感じていない点では一致していた。しかし、学校でのマイナスな経験の共有、文化を表に出すことへの距離感、進路情報や同じ背景を持つ人とのつながりの必要性については、親子間で捉え方に違いがみられた。事例Cは、親子間の文化適応差が小さく、安定的に適応

しているように見える親子においても、支援ニーズが消えるわけではないことを示している。

表7-3 事例Cにおける親子間の認識比較

分析項目	子ども世代の認識	保護者の認識	一致／不一致	解釈
日本語	日本語や学校生活を主な困難としては捉えていない。	子どもは日本語や学校生活に大きな問題なく適応していると捉えている。	一致	親子ともに、日本語は主な困難ではないと認識している。
学校生活	学校生活にはおおむね馴染んでいるが、成績やトラブルなどマイナスな内容は話しにくいことがある。	子どもは学校に行きたがらないことがなく、学校生活に問題なく馴染んでいると認識している。	部分的 不一致	表面的には安定しているが、子どもが家庭で語らない悩みが存在する可能性がある。
ルーツ・文化	ネパール語や文化に関心はあるが、それは義務というより、人との関係や興味として意味づけられている。	ネパール語や文化を大切にしてほしいが、押しつけにはしたくないと考えている。	部分的 一致	文化継承の重要性は共有されているが、子どもは興味として、保護者は継承への願いとして捉えている。
親子関係	親には比較的話しやすいが、マイナスな内容や打ち明けづらいことは話しにくい。	子どもは基本的に報告していると考える一方で、言っていないこともあるかもしれないと感じている。	部分的 一致	保護者も一定程度、子どもがすべてを話しているわけではない可能性を認識している。
教育期待・進路	親の期待は支えである一方、強く感じるとプレッシャーにもなる。親孝行や自立への思いとも結びついている。	期待は子どもにとって支えになっていると捉えるが、プレッシャーになりすぎた可能性も意識している。	部分的 不一致	保護者の期待は将来への備えとして語られるが、子どもには責任感やプレッシャーとしても経験されている。
支援ニーズ	自分自身には強い支援ニーズを語らないが、他のネパールルーツの子どもには相談相手や先輩が必要だと考えている。	ネパールルーツの先輩、保護者同士の情報共有、進路経験を聞ける場を必要としている。	部分的 一致	本人は自分の必要性を強く語らないが、保護者はより広くコミュニティ全体の支援資源を必要としている。

7.5 事例D：姉妹間の教育経路の違いとルーツの意味づけ

事例Dは、父、姉、妹の三者の語りから、同じ家庭内でも教育経路や成育経験によってルーツの意味づけが異なりうること、また、保護者が子どもの適応を肯定的に捉えながらも、文化継承や進路情報に関する支援ニーズを持っていることを示す事例である。D姉は小学校期に一時ネパールへ戻り、祖母のもとで教育を受けた後、中学生期に日本の教育へ再接続している。一方、D妹は日本で継続的に生活し、日本の学校教育を

受けてきた。質問票では、D姉・D妹ともに日本語や学校生活を主たる困難としては強く捉えておらず、D父も子どもたちに「特に大きな困難はない」と認識していた。したがって、事例Dは、スコア上は親子ともに安定的な適応を示す事例として位置づけられる。

しかし、D父は、子どもが日本社会に適応するだけでなく、ネパール文化を日本社会の中で継承できる環境が必要であると語っていた。

D父：「ネパールの文化を日本でもできるといいなって思うよ。たとえば、プジャとか結婚式とかをネパール式でできる会場があるといいよね。（中略）次の世代まで文化や伝統を守り続けてほしいし、そういう場もどんどん増えてほしい。」

ここで語られている「プジャ」とは、ネパール語で宗教的儀式を意味する。D父にとって文化継承とは、家庭内で伝統を教えることにとどまらず、日本社会の中でネパール文化を実践できる場をつくることとして意味づけられている。

一方、子ども世代にとってネパール文化は、義務としてではなく、日常的なしぐさや人とのつながりを通じて自然に経験されるものとして語られていた。

D姉：「人と会う時ナマステするじゃん？あれみんな自然にでてくるじゃん？あの瞬間、ネパール人だなって思うよ。」

D妹：「プジャの時とか、日本に住んでいるから参加しなくていいやという感覚にはならない。むしろみんなに会えて、それがすごい楽しいのね。その時、ネパール人で良かったなって思うよ。将来は休みを取ってでも行事は続けたい。」

D父にとって文化継承は、次世代へ引き継ぐべきものとして意識的に語られている。一方で、D姉・D妹にとっては、挨拶や行事への参加、人とのつながりの中で自然に経験されるものでもある。この点で、文化継承の必要性については親子で共有されているが、その意味づけには世代差がみられる。

また、D妹は、外見によって日本語ができないと見なされる経験について語っていた。

D妹：「見た目からして、日本語ができないと思われるね。お店とか行くと、私の前だけどうしようどうしようってされるし、英語で話しかけられて、あ、日本語でお願いしますっていうことある。」

一方で、D妹は、ネパール文化を実践することに対して、周囲の目を意識しすぎない姿勢も示していた。

D妹：「周りの目を意識しすぎだなと思う。小さい頃からやってたからか、公園で踊ったりするの、邪魔になってなければいいかなって、周りの人が嫌がってなければ楽しんでもらえればいいなと思う。マナー守ってて迷惑かけてなければいいかなって。」

D父も、日本社会の中でネパール人として生活することには一定の緊張が伴うと語っていた。

D父：「日本人が何か間違いを犯した時と違い、私達はネパール人が過ちを犯したとされてしまう。」

この三つの語りからは、子ども世代と保護者の双方が、日本社会におけるまなざしを意識していることがわかる。ただし、D妹は日常の場面で外見によって日本語ができないと見なされる経験を語っており、D父は個人の行動がネパール人全体の評価に結び

つく緊張を語っている。同じ「見られる」経験であっても、子ども世代と保護者ではその焦点が異なる。

支援ニーズについて、D父は、日本語そのものよりも、学校制度や進路、保護者同士の情報交換に関する不足を語っていた。

D父：「PTAはとてもフォーマルな気がする。もっと先生に教えて欲しいことがたくさんあった。（中略）日本人は自分のお家の話とか外であまりしないよね。もっとアドバイスや交流があったら楽だったと思う。ネパール人だったらプライベートな話も聞くし教えるじゃん。」

また、国籍や将来選択に関する制度情報についても、どこで知ることができるのかわからないと語っていた。

D父：「日本人じゃないとできないこととかあるなら知りたいし、帰化するべきなら知りたいし。どこで教えてもらえるのか20年以上経ってもわからないよ。」

さらにD父は、先輩やメンターについて、日本で育ち、かつネパール文化を理解している第二世代が望ましいと語っていた。

D父：「先輩やメンターのインスピレーションが欲しいのはずっとだね。相談相手としては、第二世代の人がいいと思う。日本で育ってて、かつネパールの文化を理解している人であるべきだと思う。」

D父は、子ども世代と親世代の違いも認識しており、親世代の価値観をそのまま押しつけるべきではないと語っていた。

D父：「自分たちの育った環境や、文化、そもそも年代も違うし。早く変わっていく世界で、自分たちのやり方を押し付けるのは良くないと思う。」

D妹は、親からの期待をプレッシャーというより支えとして受け止めていた。

D妹：「大きな夢だから頑張れと言ってくれる。むしろ体調崩したりしないでね、そこまで求めてないから、無駄にならないようにしてね、と言われる。親からの支えになる。」

一方で、D姉は、家庭内の価値観と外の価値観の違いについて相談できる相手の必要性を語っていた。

D姉：「家庭での価値観と、外の価値観を相談する人が欲しいんだと思う。そういう話は共感し合えるネパール人の先輩に言うべき。日本人に言っても絶対理解されないし、相談する場があったとしても役に立つ気がしない。」

D妹も、同じ背景を持つ人とのつながりについて、共感できる部分が多いと語っていた。

D妹：「共感できる部分が多いから、みんな同じようなものなんだなって。」

ただし、D妹にとって、同じネパールルーツの人が常に有効な相談相手になるわけではなかった。専攻や相談内容によっては、同じルーツであることよりも、共通する進路経験の方が重要になる場合がある。

D妹：「私の場合、知り合いに同じ専攻がないから、あまり役に立ってる気はしない。ネパール人に相談しているのも想像できない。」

また、小学生期の友人関係については、相談できる相手がいればよかったと語る一方で、その相手は必ずしもネパール人である必要はなかったと述べていた。

D妹：「小学校で友人関係で悩んだ時に相談できる人がいたらいいなと思うよ。でも私は日本人でも誰でもよかった。でもあの時は相談できるということも考えてなかったかな。」

以上のように、事例Dでは、親子ともに日本語や学校生活に大きな困難はないと認識していた。しかし、文化継承、周囲からのまなざし、進路や制度情報、横・縦のつながりをめぐっては、親子および姉妹間で意味づけに違いがみられた。D父は文化継承や制度情報、第二世代メンターの必要性を強く語っていたが、D姉・D妹にとって支援ニーズは、家庭と外の価値観の調整、共感できる相手、専攻や進路に応じた相談先など、より具体的な場面に依拠して現れていた。この事例は、家庭を一つの単位としてのみ捉えるのではなく、きょうだい間の教育経路や経験差にも注目する必要性を示している。

表7-4 事例Dにおける親子間の認識比較

分析項目	子ども世代の認識	保護者の認識	一致／不一致	解釈
日本語	日本語や学校生活を主な困難としては強く捉えていない。	子どもたちは大きな困難なく日本社会に適応していると捉えている。	一致	親子ともに、日本語そのものは中心的な困難ではないと認識している。
学校生活	姉妹ともに日本社会に適応しているが、教育経路や成育経験によって感じ方は異なる。	子どもたちは学校生活に大きな問題なく適応していると見ている。	部分的 一致	保護者は全体として安定適応と見るが、子ども世代の中ではきょうだい間の経験差が存在する。
ルーツ・文化	あいさつ、行事、人との集まりなど、日常的・身体的な経験として意味づけられる。	ネパール文化を日本社会の中でも実践し、次世代まで継承してほしいと考えている。	一致	親子ともにルーツを肯定的に捉えている。ただし、子どもは日常経験として、保護者は継承すべき価値として捉えている。
境界経験	日本語ができて、外見によって外国人として見られる経験がある。	ネパール人の行動が集団全体の評価につながるという緊張を意識している。	部分的 一致	子どもは日常的なまなざしとして、保護者は社会全体からの評価として、境界経験を認識している。
教育期待・進路	経験や関心に応じて、自ら進路や将来を考えている。	進路情報や学校制度について、保護者同士の情報共有や経験者の助言を必要としている。	部分的 不一致	子ども世代の進路経験は個別的である一方、保護者は制度理解や情報不足を支援課題として捉えている。
支援ニーズ	相談相手や先輩の必要性は、本人の経験や進路によって異なる。	日本で育ち、ネパール文化も理解している同世代や参考になる人を必要としている。	部分的 一致	子どもは日常的なまなざしとして、保護者は社会全体からの評価として、境界経験を認識している。

7.6 事例E：日本語の壁では捉えられない小学生期の孤立と親子間の認識差

事例Eは、日本生まれで日本の公立学校を経験し、日本語そのものには大きな困難を抱えていなかったにもかかわらず、小学生期を中心に、外見、学校書類、制度、友人関係、親子間の価値観の違いを通じて、複数の困難を経験していた事例である。E本人は、質問票において、日本語での日常会話や授業理解を主たる困難とはしていなかった。一方で、ネパールルーツであることによる悩みや親子関係の難しさを最も強く感じた時期として小学校を挙げており、必要だった支援として、親とのコミュニケーション支援、メンタルケア、ネパール語・ネパール文化を学ぶ機会、差別や偏見への対応を選択していた。

まず、小学生期の学校生活について聞いた。E本人の語りにおいて、小学生期は、周囲との違いや友人関係の中で孤立感を強く経験した時期として位置づけられていた。E本人：「小6の時に嫌なことがあった。ちょっといじめみたい。それは今も親に言っていない。知られたくない、心配かけたくない。言葉の暴力だったから。それから学校のことを喋れなくなった。一度喋らないようになって、ただただ喋れなくなった。なんでかはわからないけど、友達と楽しんで自分を知られたくなかった。多分自分が慣れている環境を別の価値観で邪魔してほしくなかったんだと思う。一時期は外国人である親を見られたくないと、小学校の頃だけだけど、少し思っていた。」

この語りに対し、E母も、小学生期に何らかの困難があった可能性に気づいていた。E母：「小学生の頃はあった気がする。」

E母：「学校の友人のこととかシェアしないタイプだった。私は知りたいと思ってたけどね。なんかたまに友人同士で何かあったのかなと思うことがあったけど、自分で解決しようとしてたんだと思う。」

一方で、学校側から明確なトラブルとして共有されていたわけではなかった。

E母：「いろんな友達とは遊ばず、数人のお友達と一緒にいると教えてもらった。特に先生からトラブルの報告などの連絡は来なかった。」

この一連の語りからは、E母が全く気づいていなかったのではなく、「何かあったかもしれない」と感じながらも、E本人が経験していた傷つきや孤立感の核心までは共有されていなかったことがわかる。また、学校から大きな報告がないことは、子どもの困難が存在しないことを意味しない。

次に、学校からの手紙や書類、制度理解について聞いた。E本人は、日本語そのものには困っていなかったが、学校書類や制度に関わる場面で、家庭と学校の間をつなぐ役割を担っていた。

E本人：「小学校の頃は、手紙を配布されて母に渡しても読めないから、自分でやっていた。周りの子はみんな親に渡して終わりなのに、最初は兄にやってもらっていたけど、兄がいなくなってからは自分でやらないといけなくて、それが嫌だった。仕組みを知らない母たちが嫌だった。高学年になると、自分で理解して、自分で説明しないといけなかった。」

一方、E母は、英語の手紙や先生の説明、兄の存在によって、ある程度支援があったと認識していた。

E母：「手紙は英語でくるし、家に来て説明してくれた。とても助かったよ。」

E母：「兄が全部やってくれた。最初に住んでいたところでは先生にたくさんガイドしてもらった。でも引っ越した先ではそういうのなかった。基本的にはE本人がやることはなかったかな。」

さらに、E母自身も、保護者として学校空間に関わることに孤立感を持っていた。

E母：「E本人の父が親のグループに参加していた。私は正直いうとあまりわからないから避けていたよ。出張とかがあってどうしてもだったら参加してたけど。保護者会は1人だっという感覚が強かった。サポートといえば、保護者会で周りの人から話しかけてもらったり、話についていけるよう手伝ってほしい時があった。情報を自分から知ろうとする人はここまで苦労しないんだろうね。日本人のみんなは優しい人が多いから、聞いたら答えてくれるのはわかっているけど、私の内向的な性格では少し大変だった。」

ここでは、E本人が制度仲介の負担を感じていたことと、E母自身も学校空間に入りにくさを感じていたことが重なっている。保護者に支援が届きにくい場合、その不足は子ども本人の説明負担として現れることがある。

E本人は、国籍や制度上の場面で、自分だけが特別な対応をしなければならないと感じた経験も語っていた。

E本人：「孤立を感じたのは、修学旅行でビザを取った時、パスポートを出して写真を撮った時。文化に馴染んでいても、いざ国の何かになると感じる。あとは在留カードを取りに行く提出物で、親に書いてもらわないといけない時に、普通に書いてもらえるものだと思われていた。でもそれは自分で親のふりをするしかなく、なんとか対応した。（中略）今の進路を選ぶ時にも、『国籍ネパールでその職業ってできる？』と言われた。職業自体大変だけど、（あなたは外国人なのもあるし）しっかり考えているの？と言われた。そういう時に、自分だけこういうことを悩まないといけないんだと思った。」

外見や名前についても、E本人は小学生期に強く意識していた。

E本人：「周りと見た目が違うと言われた。それも小学校後半。周りとの肌の色が違うから、視線を浴びるのが気になった。一人だけカタカナだったのも嫌だった。」

また、ピアスをめぐる経験では、家庭文化と学校文化の間に挟まれる感覚を語っていた。

E本人：「小1でピアスを開けたらダメだよって言われてしんどかった。つけないようになって穴が閉じた。私は、文化が違うから板挟みで大変なんだよっていうのを学校にも理解してほしかった。」

E母も、E本人が幼少期から外見の違いを意識していたことを覚えていた。

E母：「年中の時、『なんで私だけ外見が違うの？』『なんでみんな肌が白いの？』って言われたことがある。ストレスにはなっていないって言ってたけど、悲しさを感じてるって言ってたよ。その時、幼稚園の先生も協力してくれた。」

E母は、E本人が自分の特徴や文化を理解できるよう、幼少期から教えていたと語っていた。

E母：「自分の特徴とか、外見や文化などを理解してもらうために、幼稚園の頃からたくさん教えるようにしていた。」

これらの語りからは、E本人が経験した違和感や孤立感の一部を、E母も理解しようとしていたことがわかる。しかし、E本人にとっては、外見や名前、ピアス、国籍、在留カード、進路選択の場面で、その都度「自分だけが違う」と感じる経験が積み重なっていた。

一方、E本人は、成長とともに、かつてコンプレックスだった違いが肯定的に受け止められるようになったとも語っていた。

E本人：「高校に入ってから（周りの人が）逆に褒めてくれる。むしろ関心が変わって。小学校の頃は、なんでも違うのに敏感だった。」

E本人は、このような経験を踏まえ、同じような背景を持つ子どもに、違いが将来的に魅力にもなりうることを伝える必要があると語っていた。

E本人：「日本にずっと住んでいる子は、周りとは違うと感じる時期が絶対あるし、その時、学年に一人だけだったら苦しそう。子どもの頃は辛いつて感じる。高校生になると、その違うことが褒めてもらえる要素になる。コンプレックスが魅力になるってことを当事者から伝えることが大事だと思う。」

この部分からは、E本人の困難が固定的なものではなく、成長や環境の変化によって意味づけが変わっていくことがわかる。ただし、小学生期に強く感じた違和感や孤立感とは、後になって肯定的に再解釈される場合があるとしても、当時の支援ニーズとしては見落とされるべきではない。

中学生期の部活動について、E本人は、部活動への熱中や目標達成の価値が親に伝わりにくかったと語っていた。

E本人：「中学校の頃、部活を頑張ってた。吹奏楽で忙しかったんだけど、毎日同じことをしてロボットみたいって言われた。道具を買うのにも、スケジュールに対しても理解してもらるのが難しかった。」

E本人：「コンクールとかに向かっていく経験を積む、練習量が大事なのが伝わらなかった。多少はお金をかけて楽しんだ方がいい、（目標達成のために）休みなんていないという価値観は、いくら親に理解してもらおうと思っても合わなかった。」

E母も、部活動は親子双方にとってストレスだったと振り返っていた。

E母：「部活はお互いにとってストレスだったと思う。E本人は部活に対して真剣だし、敏感だった。100%ルールを守るタイプだったからね。でも母としては100%のエネルギーを取られていた気がしたよ。週末もないし、家族との時間もないからね。だから可哀想だと思ったよ。勉強とのバランスも大事だし。ちょっと多すぎると思った。お金についてはそこまで気にしてなかった。趣味だと考えたら、別にそこは許容できた。」

また、E本人は、娯楽や趣味に対するお金の価値観の違いも語っていた。

E本人：「全体的にお金の使い方に厳しい方だと思う。娯楽に対するお金の価値観が違う。親に同じような娯楽を楽しむ経験がなかったからではないかなと思う。楽器にお金がかかるのも、趣味でやりたいだけなのに、そんなに（かかるの）？と理解してもらえなかった。」

E母は、E本人との衝突について、性格の違いとして受け止めるようになったことで衝突が減ったと語っていた。

E母：「宿題を最終日とかにやるが多かったのは気になってたし、友人と出かけることが多すぎるかなと思うこともあった。でも、この子の性格として受け止めるようにしたら衝突が減った気がする。兄弟の間で比べたらいけないよね。それぞれ違って、どちらもいいと思う。」

E母は、E本人の進路について、最終的には本人が幸せであることを重視していた。

E母：「I just want her to be happy.」

また、理系に進むことの安定性を家族が助言する一方で、E本人がストレスなく、興味を持てる分野に進むことを尊重したと語っていた。

E母：「理系にいる父親や兄からすれば、経験上安定するよ、というアドバイスもあった。しかし、自分のストレスなく、興味があって楽しめる分野に行きなさいと伝えた。」

これらの語りからは、部活動や進路をめぐる親子の価値観のずれが、単純な対立ではなく、子どもの経験の価値を親がどう理解するか、親が子どもの性格や希望をどう受け止めるかという過程の中で調整されていたことがわかる。

進路情報について、E母は、日本の受験制度や塾に関する情報が不足していたと語っていた。

E母：「情報は基本的に常に不足していた。学校の内容をしっかりとやっていれば塾はいらないと学校の保護者会で言われたけど、一応塾行く？と聞いたら行く意思があったので入れた。でも、塾が思いのほかとても大変だった。いろいろなところで怖がらせる気がする。受験はビジネスだと思った。」

E母は、進路に関する調査や準備の多くをE本人が担っていたことも認識していた。

E母：「調べたり、準備したりすることは9割ぐらいE本人がやった。でも中学生だったから、それはとてもストレスだったと思う。」

E本人は、友人や周囲の大人が支えになった経験も語っていた。

E本人：「近くに住む友達（本調査におけるY05）はいい支えだった。他に考え方で目標にしている人もいる。その人はネパール人ではない。明るい感じなのに、その人も悩み事があると知って、勇気づけられた。」

また、中学3年生の受験期にはスクールカウンセラーに相談した経験があり、それが安心感につながったと語っていた。

E本人：「スクールカウンセラーに相談した経験がある。中3の受験期にストレスがすごくて、三者面談カウンセリングをしてくれた。安心感は芽生えた。受験とかで切羽詰まっていた。日本人は優しいけど、きっちりしないといけないというのが苦手だった。時には息抜きが大事ってことを教えてくれた。」

E母は、必要だった支援として、入試や塾に関する情報、保護者同士のつながりを挙げていた。

E母：「高校生の時の入試関連、塾のことかな。（中略）保護者同士でつながっておけばよかったなって。」

以上のように、事例Eでは、日本語能力や学校適応の高さだけでは捉えきれない困難が存在していた。E本人は、外見、学校書類、友人関係、親子間の価値観の違いを通じて孤立感を抱えていたが、小学生期の友人関係の困難は現在まで親に伝えられておら

ず、E母が気づきながらも本人の経験の核心までは共有されていなかった。これは親の無関心によるものではなく、気づきの範囲と共有の深さにずれがあったことを示している。事例Eは、日本語支援だけでなく、メンタルケア、親子間コミュニケーション支援、保護者向けの制度・進路情報支援、同じ背景を持つ先輩とのつながりの必要性を示している。

表7-5 事例Eにおける親子間の認識比較

分析項目	子ども世代の認識	保護者の認識	一致／不一致	解釈
日本語	日本語そのものより、学校での孤立感や家庭内での制度仲介が負担となっていた可能性がある。	子どもの日本語には大きな問題はないと捉えていたが、学校書類や制度理解では家庭内の支援が必要だった。	部分的 一致	日本語能力自体は大きな困難ではないが、日本語ができることで制度仲介を担う負担が生じていた。
学校生活	小学校期に孤立感や友人関係の難しさを経験していた可能性がある。	当時は大きな問題として把握しておらず、後から友人関係や学校生活に不安があった可能性を感じている。	不一致	子どもの孤立感や学校での経験は、当時保護者に十分共有されていなかった可能性がある。
ルーツ・文化	ネパールルーツや家庭文化をめぐって、学校生活との間に違和感があった可能性がある。	子どもにネパール語や文化を大切にしたいと考えつつ、日本の学校生活への適応も重視していた。	部分的 不一致	子どもにとっての違和感は、保護者には文化継承や学校適応の問題として捉えられていた。
親子関係	学校生活や友人関係の悩みを十分に親に話していなかった可能性がある。	子どもがあまり学校や友人のことを共有しないタイプだと認識していた。	部分的 一致	保護者も子どもがすべてを話していないことを認識していたが、その内実までは十分に把握できなかった。
教育期待・進路	自分の関心や経験をもとに進路を考えていた。	子どもには幸せになってほしいと考え、特定の道を強く押しつけるより本人の希望を尊重していた。	一致	進路をめぐっては、保護者の期待が強い圧力として現れるよりも、本人の幸せを重視する姿勢がみられる。
支援ニーズ	小学校期の孤立、学校との関係、制度仲介に対する支援が必要だった可能性がある。	受験・進路情報、塾、保護者同士のつながり、学校とのコミュニケーション支援を必要としていた。	部分的 一致	子ども本人には心理的・学校生活上の支援が、保護者には制度理解と情報共有の支援が必要だった。

7.7 親子比較から見える共通パターン

本章では、事例Aから事例Eまでの親子ペアを比較し、親子間の認識の一致と不一致を検討した。各事例は、年齢、教育経路、家庭環境、学校経験に違いがあるが、親子比較からはいくつかの共通パターンが確認できる。

まず、日本語や学校生活については、親子の認識が一致しやすい。多くの事例で、子ども世代本人も保護者も、日本語での日常会話や学校生活を主たる困難としては捉えていなかった。これは、第5章・第6章で確認した全体的傾向とも対応している。

ただし、学校生活に適応しているように見えることと、孤立感や違和感がないことは同じではない。事例Cや事例Eでは、子どもが学校に通い、表面的には大きな問題が

ないように見えていても、学校でのマイナスな経験や友人関係の困難は家庭で十分に語られていなかった。特に事例Eでは、E母が「何かあったかもしれない」と感じていても、E本人の経験の核心までは共有されていなかった。

こうした語られにくさは、教育期待の受け止め方にも表れる。保護者にとって教育期待は、子どもの将来を支える願いとして語られる一方で、子ども世代にとっては支えであると同時にプレッシャーにもなりうる。事例Bでは、B母が自分たちの苦労を繰り返してほしくないという思いから教育期待を語る一方で、B本人はそれを強いプレッシャーとして受け止めていた。事例Cでは、教育期待は大きな対立としては現れていないが、C本人にとっては親孝行や自立への責任感としても経験されていた。同じ期待であっても、親の意図と子どもの受け止めは必ずしも一致しない。

文化継承についても、親子で語りやすさに差がある。事例Aでは、A本人にとってネパールルーツは日常化された属性であり、深く意識するものではなかった。一方で、A母・A父は、文化継承やメンタルケア、同じ背景を持つ人とのつながりをより強く意識していた。事例Dでも、D父は日本社会の中でネパール文化を实践できる場の必要性を語っていたが、D姉・D妹は、文化を日常的なしぐさや行事への参加として自然に経験していた。すなわち、文化継承は、保護者の方が意識的に語りやすいテーマである。

横のつながりと縦のつながりについても、子ども世代と保護者で意味づけが異なりうる。子ども世代にとっては、同じ背景を持つ友人や先輩は、共感、安心感、ロールモデルとして意味を持つ場合がある。一方、保護者にとっては、それらのつながりは、進路情報、学校制度理解、保護者同士の情報交換の資源として捉えられやすい。同じ「つながり」であっても、子ども本人にとっての心理的支えと、保護者にとっての情報資源は必ずしも同じではない。

さらに、支援ニーズは、子ども本人への直接支援だけでなく、保護者支援を通じて子どもの負担を軽減する形で現れる。事例Bや事例Eでは、子どもが学校制度や書類、進路情報を家庭内で媒介する場面がみられた。この場合、保護者に対して学校制度や進路情報をわかりやすく伝えることは、保護者自身を支えるだけでなく、子どもの制度仲介負担を軽減する支援にもなる。

また、きょうだいや異なるライフステージ間の比較からも示唆が得られる。事例DのD姉とD妹は、同じ家庭環境で育ちながらも、年齢や学年の違いによって、学校経験や文化継承への向き合い方に差がみられた。姉の対処法を妹が引き継ぐ場合もあれば、姉が経験した困難が妹の代では和らいでいる場合もあり、きょうだい間でも経験は一樣ではない。さらに、社会人となった子ども世代への補足的インタビューからは、学生期に強く感じられていた孤立感や違和感が、時間の経過とともに肯定的に再解釈される場合があることも確認された。

以上から、親子ペア比較は、日本語能力や学校適応だけでは見えにくい困難を明らかにするうえで重要である。親子の認識差は、保護者の無理解としてではなく、子ども世代と保護者世代が異なる立場から同じ経験を意味づけていることによって生じる。第8章では、本章で確認した親子間の一致と不一致を、第3章で示した理論枠組みと照合し、日本語支援を主たる課題としない層に必要な支援のあり方を考察する。

8 考察

本章では、第5章から第7章までの分析結果を踏まえ、日本で育つネパールルーツの子ども世代と保護者における困難と支援ニーズの意味づけについて考察する。第5章では、子ども世代質問票、自由記述、インタビューの語りから、子ども世代本人がどのような経験を困難や支援ニーズとして捉えているのかを整理した。第6章では、保護者質問票とインタビューの語りから、保護者が子どもの困難や支援ニーズをどのように認識しているのかを検討した。第7章では、親子ペア事例を比較し、同じ家庭の中でも、子ども世代と保護者が同じ経験を異なる角度から意味づけていることを示した。

本研究の中心的な問題意識は、日本語支援を主たる課題としない層において、どのような困難や支援ニーズが存在するのかを明らかにすることであった。分析からは、対象者の多くが日本語や学校生活に一定程度適応している一方で、制度仲介の負担、教育制度の移動に伴う学習上のずれ、親子間の価値観差、教育期待の両義性、ルーツの意味づけ、学校生活における違和感、同じ背景を持つ人との横のつながり、心理的支援など、日本語能力だけでは捉えられない困難が存在することが示された。なお、年上の先輩やメンターとの縦のつながりについても一定の期待は示されたが、本研究では、横のつながりほど具体的・実感的な支援資源としては強く確認されなかった。

以下では、まず日本語ができることと「困っていない」ことの違いを整理し、日本語支援中心の支援枠組みの限界を検討する。そのうえで、分節化された同化理論、選択的文化適応、新同化理論、不協和的文化適応、重要な他者の観点から、本研究の知見を考察する。最後に、保護者世代の教育期待の両義性と支援ニーズの再定義を整理し、本研究の理論的含意を示す。

8.1 日本語ができることと「困っていない」ことの違い

本研究の結果からまず明らかになったのは、日本語ができることと「困っていない」ことは同じではないという点である。子ども世代の多くは、日本語での日常会話や学校生活において大きな困難を抱えているとは認識していなかった。保護者もまた、子どもの日本語能力や学校生活への適応を比較的肯定的に捉えていた。この点では、子ども世代と保護者の認識はおおむね一致していた。

しかし、そのことは、困難や支援ニーズが存在しないことを意味しない。日本語ができる子ども世代は、学校や周囲から「普通にできている」と見なされやすい。また、保護者からも、日本語や学校生活に問題がないため、順調に適応していると捉えられやすい。その結果、学校生活における違和感、外見によって外国人として見られる経験、親に話にくい悩み、学校書類や制度情報を家庭内で説明する負担は、表面化しにくくなる。

本研究で確認された見えにくい困難は、次のように整理できる。

表8-1 日本語ができることによって見えにくくなる困難の整理

領域	見えやすい困難	本研究で見えた困難
日本語	日常会話ができない	日本語ができるために説明役・仲介役を担う
学習	授業内容が理解できない	教科語彙や教育制度の移動に伴う学習上のずれが残る
学校生活	学校に通えない	通えていても、違和感や孤立感が家庭に共有されない
親子関係	親と会話できない	話せる関係でも、話しにくい内容が残る
ルーツ	文化差に適応できない	ルーツが日常化する一方、場面によって意識される
支援ニーズ	日本語支援が必要	心理的安心、進路情報、文化的承認、同じ背景を持つ人との横のつながりが必要

出典：本研究の質問票およびインタビュー結果より筆者作成。

この表が示すように、外国ルーツの子どもの困難は、日本語能力の不足だけで説明できるものではない。本研究の対象者の多くにおいて、日本語の壁は主たる困難ではなかった。しかし、日本語の壁が低いことは、支援ニーズが存在しないことを意味しない。むしろ、日本語ができるからこそ、周囲から困難が見えにくくなり、本人も支援を求めにくくなる場合がある。

したがって、「日本語ができる」という状態は、単に支援が不要な状態として捉えるべきではない。日本語ができる子ども世代に対してこそ、制度仲介の負担、教育制度の移動に伴う学習上のずれ、親子間の価値観差、学校生活での違和感、ルーツの意味づけ、心理的安心の不足、同じ背景を持つ人と安心して関われる場の不足といった、見えにくい困難に注目する必要がある。

8.2 日本語支援中心の支援枠組みの限界

第1章および第2章で確認したように、外国ルーツの子どもへの支援では、日本語指導、学習支援、不就学防止、進路情報提供が重要な課題として扱われてきた。これらの支援は、現在もなお不可欠である。とりわけ、途中来日した子どもや、日本語による授業理解に困難を抱える子どもにとって、日本語支援は学校生活への参加を保障するための基盤である。

しかし、本研究が示したのは、日本語支援だけでは捉えきれない層が存在するということである。日本語で生活できる子どもは、支援対象として可視化されにくい。学校では「普通にできている」と見なされ、家庭でも「日本語は問題ない」と捉えられる。その結果、困難が存在していても、日本語支援の対象ではないために、支援の枠組みからこぼれ落ちる可能性がある。

この限界は、支援が日本語能力の有無を基準に設計されやすいことと関係している。日本語ができない子どもは支援が必要であり、日本語ができる子どもは支援が不要である、という二分法では、外国ルーツの子ども世代の経験を十分に捉えることはできない。本研究の子ども世代は、日本語能力に大きな困難を抱えていなくても、親子間の価値観差、教育期待へのプレッシャー、学校生活での違和感、ネパールルーツの意味づけ、相談相手の不足を経験していた。

また、学校に在籍していること自体も、支援の完了を意味しない。学校に通うことができても、教育制度の移動に伴う学習上の空白、教科語彙の理解、学校文化への適応、家庭内での学習支援の困難が残る場合がある。したがって、外国ルーツの子どもへの支援は、学校への在籍や日常日本語の獲得だけで完結するものではなく、子どもが実際に学習し、進路を選択し、自分の経験を安心して語れる環境を整えるものとして捉える必要がある。

この点で、本研究が扱う「日本語支援を主たる課題としない層」は、日本語支援の対象外に置かれるべき層ではない。むしろ、従来の日本語支援中心の枠組みでは見えにくかった困難を明らかにするために、あえて焦点化されるべき層である。支援の焦点を、日本語能力の不足だけでなく、制度理解、親子間コミュニケーション、心理的安心、文化的承認、進路情報、横・縦のつながりへと広げることが必要である。

8.3 分節化された同化理論から見た多様な適応経路

本研究の結果は、ネパールルーツの子ども世代の経験が一様ではないことを示している。同じネパールルーツであっても、出生地、来日時期、教育経験、家庭内言語、学校環境、友人関係、保護者の日本語能力や制度理解、同じ背景を持つ人とのつながりの有無によって、適応のあり方は異なっていた。

この点は、分節化された同化理論の視点から理解できる。分節化された同化理論は、移民第二世代が単一の同化経路をたどるのではなく、家庭、学校、地域、エスニック・コミュニティ、差別経験、重要な他者の存在などによって、異なる適応経路をたどることを示すものである。本研究の事例でも、日本社会への適応とネパールルーツの維持の関係は一様ではなかった。

たとえば、学校生活への適応が安定している事例では、子ども本人はネパールルーツを強く意識せず、日常の中に自然に存在するものとして捉えていた。一方で、保護者は、子どもが日本社会に馴染むことを肯定しながらも、ネパール語や文化との距離が広がることを懸念していた。また、ネパールでの成育経験や学校移動の経験を持つ子どもは、日本社会に適応しながらも、親族関係や過去の学校経験を通じてネパールとのつながりを別の形で保持していた。さらに、同じ家庭内でも、きょうだいによっ

てネパールでの教育経験や日本での成育歴が異なる場合、ルーツの意味づけや進路への考え方にも違いがみられた。

このような経験の違いを生む条件は、次のように整理できる。

表8-2 ネパールルーツの子ども世代の適応経路に関わる条件

条件	経験への影響
出生地・来日時期	日本語、学校文化、ネパールとの距離の感じ方に関わる
教育経路	日本の学校、ネパールの学校、インターナショナルスクール間の移動が学習上のずれを生む
家庭内言語	親子間コミュニケーション、文化継承、制度仲介に関わる
保護者の制度理解	子どもが学校情報を説明する負担の程度に関わる
友人関係	孤立感、安心感、ルーツの肯定に関わる
横のつながり	同じ背景を持つ人との共感、安心感、文化的承認を支える
縦のつながり	進路情報や経験談を得る補助的資源となりうるが、本研究では横のつながりほど中心的には確認されなかった
学校・地域の環境	文化的背景が理解されるか、違和感が見過ごされるかに関わる

出典：本研究の質問票およびインタビュー結果より筆者作成。

この表が示すように、本研究の対象者は、「日本社会に同化した層」や「ネパール文化を維持する層」といった単純な類型に分けられるものではない。むしろ、学校では日本社会に馴染み、家庭ではネパール語や家族の価値観と関わり、進路選択では日本の制度と保護者の期待の間で調整を行い、友人関係やコミュニティの場面では場に応じて自己を調整していた。このような多面的な適応のあり方こそ、分節化された同化理論が示す「適応経路の多様性」と重なる。

ただし、本研究の知見は、分節化された同化理論をそのまま日本のネパールルーツ家庭に当てはめるものではない。むしろ、同理論が示す多様な適応経路という視点をを用いることで、日本語能力や学校適応だけでは見えない経験差を読み解くことができる。本研究において重要なのは、どの対象者がどの類型に属するかではなく、同じネ

パールルーツであっても、家庭、学校、友人関係、保護者の制度理解、つながりの有無によって、困難と支援ニーズの意味づけが異なるという点である。

8.4 選択的文化適応と文化維持の意味づけ

本研究では、子ども世代の多くが、日本社会への適応とネパール文化・家族価値の維持を、必ずしも対立するものとして捉えていなかった。これは、選択的文化適応の視点から理解できる。選択的文化適応とは、受け入れ社会に適応しながらも、親世代の言語や文化、家族の価値観を一定程度維持するあり方である。

しかし、本研究の結果からは、選択的文化適応における「文化維持」の意味が、子ども世代と保護者世代で異なっていることが明らかになった。子ども世代にとって、ネパールルーツは、必ずしも意識的に守るものではなかった。行事、あいさつ、親族関係、家庭内の言語、友人とのつながりなど、日常の中で場面ごとに立ち上がるものとして経験されていた。

一方で、保護者にとってネパール語やネパール文化は、日本社会への適応の中で失われうるものであり、意識的に守り、次世代に伝えるべきものとして語られていた。保護者は、子どもが日本社会に馴染むことを望みながらも、ネパール語や文化、家族の価値観を維持してほしいと考えていた。ただし、その思いは一樣ではない。強く継承を望む保護者もいれば、子どもの自由や幸福を重視し、文化を押しつけないよう距離を取る保護者もいた。つまり、保護者にとって文化維持は重要でありながらも、どの程度、どのように子どもに伝えるべきかについては葛藤を伴うものでもあった。

この違いは、次のように整理できる。

表8-3 文化維持の意味づけにおける世代差

立場	文化維持の意味づけ	本研究における現れ方
子ども世代	日常の中で場面ごとに立ち上がるもの	行事、あいさつ、親族関係、友人関係の中で自然に経験される
保護者世代	意識的に守り、次世代に伝えるべきもの	ネパール語、文化行事、家族価値、宗教的实践を維持してほしい
親子間のずれ	文化維持の重要性ではなく、その方法や温度差	子どもには自然なもの、親には失われうるものとして見える

出典：本研究の質問票およびインタビュー結果より筆者作成。

この点から、選択的文化適応は、単に「日本社会への適応」と「ネパール文化の維持」が両立している状態として理解するだけでは不十分である。本研究で確認されたのは、文化的両立には、意識的な両立と自然な併存の二つの側面があるということである。保護者にとっては、ネパール文化を意識的に維持することが重要である。一方

で、子ども世代にとっては、文化は必ずしも「維持すべきもの」として意識されるのではなく、家庭や行事、人間関係の中で自然に経験されるものでもあった。

したがって、選択的文化適応を本研究に適用する際には、文化維持を一枚岩の概念として扱うのではなく、子ども世代にとっての自然な併存と、保護者世代にとっての意識的継承を区別して捉える必要がある。この視点は、親子間の文化継承をめぐる温度差を理解するうえで重要である。

8.5 新同化理論から見た境界の弱まりと再浮上

第3章で述べたように、本研究では、Alba and Nee (2003) の新同化理論も補助的に参照している。新同化理論は、移民やその子ども世代が受け入れ社会の制度や日常生活に参加する中で、エスニックな境界が弱まっていく過程に注目するものである。

本研究の子ども世代の中にも、年齢が上がるにつれて、ネパールルーツを日常的に強く意識しなくなったと語る者がいた。また、日本での学校生活や友人関係の中で、日本語を使い、日本の学校文化に参加することが日常化していた。この点では、ネパールルーツが日常生活の中で常に強く意識されるわけではなくなるという意味で、新同化理論が論じる境界の弱まりに近い経験がみられる。

しかし、本研究の結果は、境界が一度弱まればそのまま消えるわけではないことも示している。日常生活ではネパールルーツを意識していなくても、外見、名前、国籍、在留カード、学校書類、文化行事、進路選択、家族形成の場面で、ルーツは再び意味を持つ。たとえば、学校生活では日本社会に馴染んでいても、修学旅行や進路選択の場面で国籍を意識させられることがある。また、子ども期には深く考えていなかったルーツが、成人後や家族形成を考える段階で改めて問い直されることもあった。

したがって、本研究における新同化理論の含意は、ネパールルーツが弱まる、あるいは消えるという点にあるのではない。むしろ、ルーツが日常生活の中で一時的に見えにくくなっても、特定の制度的・関係的場面で再び立ち上がるという点にある。このことは、ネパールルーツの子ども世代の経験を、「同化したか／していないか」という二分法では捉えられないことを示している。

本研究では、この状態を「境界の弱まりと再浮上」として捉える。すなわち、子ども世代は、日本社会の中で日常的にはルーツを意識せずに生活することができる一方で、制度、外見、家族、文化行事、進路選択の場面では、ネパールルーツが再び意味を持つ。この視点は、日本語支援を主たる課題としない層の困難を考えるうえで重要である。なぜなら、困難は常に表面化しているわけではなく、特定の場面で初めて立ち上がるからである。

8.6 不協和的文化適応と親子間の価値観差

親子間の価値観差については、不協和的文化適応の視点から考察できる。不協和的文化適応とは、子ども世代が受け入れ社会に親世代よりも早く適応し、その結果、親

子間に価値観や認識のずれが生じる過程を指す。本研究でも、親子間で日本社会への馴染み方、進路観、教育期待、文化維持の意味づけに違いがみられた。

ただし、本研究で確認された親子間の認識差は、単純に「子どもが日本化し、親がネパールの価値観を維持している」という図式だけでは説明できない。保護者の中にも日本社会や学校制度に一定程度適応している者がいた。また、子ども世代の中にも、ネパール語や文化、家族の価値観を大切にしたいと考える者がいた。さらに、親子間のずれが強く語られる事例だけでなく、親が日本社会や学校制度を比較的良好に理解していると子どもが認識している事例もあった。したがって、親子間のずれは、文化適応の速度差だけでなく、同じ経験をどのように意味づけるかの違いとして捉える必要がある。

本研究の親子比較からは、認識差には複数の型があることが見えてきた。

表8-4 親子間の認識差の類型

類型	内容	本研究における現れ方
認識一致型	子ども世代と保護者が同じ経験をおおむね同じように捉える	日本語や学校生活について親子ともに大きな困難はないと捉える
子ども側困難不可視型	子ども本人は違和感や負担を経験しているが、保護者には十分に共有されていない	孤立感、外見による違和感、学校での傷つきが家庭で語られない
期待意味づけ差型	同じ教育期待を、保護者は支えとして、子どもは支えでありプレッシャーとして経験する	親の期待が将来の安定を願うものとして語られる一方、子どもには負担にもなる
文化継承温度差型	保護者は文化継承を意識的に語り、子どもは日常的・自然なものとして経験する	ネパール語、行事、家族価値への関心の強さや方法に差が出る
支援ニーズ焦点差型	保護者は制度情報や進路情報を、子どもは心理的安心や語れる場を重視しやすい	保護者支援と子ども本人への支援が別方向に見える

出典：本研究の質問票およびインタビュー結果より筆者作成。

この表が示すように、本研究における親子間の認識差は、単なる価値観の対立ではない。むしろ、同じ経験が親子間でどのように共有され、どのように共有されないのか、また同じ期待や支援が、親子にとってどのように異なる意味を持つのかという問題である。

特に重要なのは、保護者が子どもの負担にまったく気づいていないわけではない場合にも、認識差が生じていた点である。保護者が子どものプレッシャーや孤立感に一定程度気づいていても、自らの移住経験、言語的困難、将来への不安があるため、教育期待や進路への関与を弱めることが難しい場合がある。つまり、不協和的文化適応は、親子間の単純な無理解や対立としてだけでなく、「気づきながらも調整しきれない状態」としても捉える必要がある。

このことは、不協和的文化適応を、親子間の単純な対立として捉えるのではなく、経験の意味づけのずれとして捉える必要があることを示している。親子間のずれは、保護者が子どもを理解していないことだけから生じるわけではない。子ども世代と保護者世代が、異なる教育経験、移住経験、社会的立場の中で、同じ出来事を異なる角度から理解しているために生じるのである。

8.7 重要な他者と横のつながり

本研究では、重要な他者との関係を、横のつながりと縦のつながりの双方から検討した。横のつながりとは、同じネパールルーツや外国ルーツを持つ同世代・近い立場の人との関係を指す。縦のつながりとは、年上の先輩、メンター、親以外の大人、進路や将来について相談できる人との関係を指す。第3章では、両者をともに分析視角として設定したが、第5章から第7章の結果を踏まえると、本研究の事例では、横のつながりの方がより具体的・実感的な支援資源として確認された。

質問票回答を探索的にみると、同じ背景を持つ友人がいることは、ルーツを肯定的に捉えることと結びついていた。また、同じ背景を持つ友人をもっと必要としていた回答者ほど、同世代や先輩とつながれる場への参加意向も高い傾向がみられた。このことから、横のつながりは、子ども世代にとって、単なる交友関係ではなく、自分の経験を共有し、ルーツを肯定的に意味づけるための関係的資源であったと考えられる。

この点は、自由記述やインタビューの語りからも確認できる。子ども世代は、同じ背景を持つ人との関係について、「同じネパールルーツを持つ人が関わる機会」や「同じルーツの人達の集まりの場をつくる。保護者抜きで」と語っていた。これらの語りは、子ども世代が求めているものが、単なる情報提供の場ではなく、自分の経験を説明しすぎることなく共有できる場であったことを示している。

一方で、縦のつながりについても、進路や将来について相談できる年上の先輩・大人、同じ経験をした年上の先輩やメンター、親以外に相談できる大人を必要とする回答は一定数みられた。しかし、子ども世代の語りにおいて、縦のつながりは主に進路情報や経験談を得る資源として位置づけられており、心理的安心や文化的承認という点では、横のつながりほど実感的な支援資源としては強く確認されなかった。

保護者回答では、年上の先輩やメンターとの縦のつながりへの期待が、子ども世代回答に比べて比較的明確に示された。保護者にとって縦のつながりは、子どもの進路選択やキャリア形成に関する情報を得る場であり、ネパールルーツの先輩や若者から経験を聞く機会として意味づけられていた。このことから、保護者世代は、子どもが

将来困らないための備えとして、縦のつながりを支援資源として期待していたと考えられる。

したがって、本研究において重要な他者は、一律に「先輩」や「メンター」として捉えるよりも、横のつながりと縦のつながりの機能差に注目して整理する必要がある。横のつながりは、共感、安心感、ルーツの肯定を支える関係であり、縦のつながりは、進路情報、経験談、ロールモデルを得る補助的資源として位置づけられる。本研究のネパールルーツ事例においては、特に横のつながりが、子ども世代の見えにくい困難や支援ニーズを理解するうえで重要な意味を持っていた。

8.8 保護者世代の教育期待の両義性

本研究において、教育期待は、親子間の認識差が現れやすい重要な領域であった。保護者は、教育を子どもの将来安定や社会的上昇、家族の安心と結びつけて捉えていた。子どもには安定した職業に就いてほしい、親世代よりも高い教育を受けてほしい、日本だけでなく海外でも通用する進路を選んでほしいという期待は、多くの保護者に共有されていた。

この教育期待は、単なる成績志向や親の押しつけとして理解すべきではない。保護者の多くは、自らが移住後に経験した言語の壁、労働上の困難、制度理解の難しさを踏まえ、子どもには同じ苦労を経験してほしくないと考えていた。そのため、教育期待は、子どもの将来を支える願いであり、移住経験を持つ保護者にとっての愛情や責任の表現でもあった。

一方で、子ども世代にとって、親の教育期待は必ずしも一方向的に支えとしてだけ経験されるわけではなかった。親の期待は、支えや励ましであると同時に、プレッシャーや負担にもなりうる。特に、親の苦労を知っている子どもは、期待に応えなければならないという責任感を持ちやすい。また、親世代が知っている職業や進路の範囲と、子ども世代が日本社会の中で見ている進路や経験の価値が異なる場合、親の期待は本人の選択肢を狭めるものとして受け止められることもある。

この点を整理すると、教育期待には次のような両義性がある。

表8-5 教育期待の両義性

側面	保護者にとっての意味	子ども世代にとっての意味
支え	将来の安定を願う愛情・責任	励まし、自分を見てくれている感覚
責任	親世代の苦労を繰り返してほしくない願い	期待に応えなければならない感覚
不安	日本の制度や将来への不確実性への備え	親の不安を背負う感覚
ずれ	安定した進路への期待	自分の興味、経験、 価値観が理解されにくい感覚

出典：本研究の質問票およびインタビュー結果より筆者作成。

この表が示すように、教育期待は、保護者にとっては子どもの将来を守るための支援であるが、子ども世代にとっては支えとプレッシャーの両方として経験されうる。したがって、教育期待をめぐる支援では、保護者の期待を否定するのではなく、その期待が子どもにどのように届いているのかを親子が共有できる仕組みが必要である。

また、教育期待は、日本の学校制度や進路情報へのアクセスとも関係している。保護者が日本の受験制度や進路制度を十分に理解できない場合、教育期待は抽象的な「頑張ってほしい」という期待にとどまりやすい。その結果、子どもは具体的な制度理解や進路選択を自分で担いながら、親の期待も受け止めることになる。したがって、保護者への進路情報提供は、保護者自身の支援であるだけでなく、子どもが期待と制度仲介を同時に背負う負担を軽減する支援でもある。

さらに、保護者世代の教育期待は、家庭内のすべての子どもに一律に向けられるものではなく、出生順位や日本での成育期間の長さによってもグラデーションを持つ可能性が示唆される。本研究の限られた家族事例（事例D等のきょうだいペア）からの探索的な知見に留まるが、第一子が日本の学校制度や受験制度を家族の中で最初に経験する場合、保護者にとっても制度理解の入口となるため、第一子に対してより強い期待や将来への不安が集中するケースが観察された。一方で、第二子以降においては、年長のきょうだいの経験が家庭内に社会関係資本（情報やリテラシー）として蓄積されることで、保護者の制度理解が一定程度底上げされ、期待のかかり方や不安の表れ方が変容するプロセスがうかがえる。ただし、きょうだい間の出生順位や成育歴の差が、教育期待の受け止め方や制度仲介の役割分担に与える構造的な影響については、本研究の限定的な事例数のみから一般化することは困難であり、今後の重要な検証課題として位置づけられる。

8.9 支援ニーズの再定義

以上の分析を踏まえると、日本で育つネパールルーツの子ども世代と保護者に対する支援は、日本語指導だけでは不十分である。ただし、本研究が示すのは、日本語支援が不要であるということではない。日本語支援は、外国ルーツの子どもの教育参加

を支える基盤として重要であり続ける。しかし、日本語支援を主たる課題としない層においては、困難は言語能力の不足としてだけではなく、制度仲介の負担、教育制度の移動に伴う学習上のずれ、親子間の価値観差、ルーツの意味づけ、進路情報へのアクセス、同じ背景を持つ人とのつながりの不足として現れる。

したがって、支援ニーズは、以下のように再定義する必要がある。

表8-6 本研究からみた支援ニーズの再定義

従来見えやすい支援	本研究で見えた追加的支援ニーズ	支援の対象
日本語指導	日本語ができる子どもの制度仲介負担を減らす支援	子ども・保護者
学習支援	教科語彙、教育制度移動、 受験制度への接続支援	子ども・保護者
進路情報提供	保護者にも届く進路情報、 先輩家庭の経験共有	子ども・保護者
学校適応支援	孤立感、違和感、外見による 境界経験を語れる相談先	子ども
多文化理解	ルーツや文化を肯定的に学べる場、 学校側の文化理解	子ども・学校
保護者支援	学校制度理解、親子間コミュニケーション、 子どもの心理理解	保護者
コミュニティ支援	同じ背景を持つ子ども世代同士が 安心して関われる横の場	子ども・保護者・地域

出典：本研究の質問票およびインタビュー結果より筆者作成

この再定義において重要なのは、支援の対象が子ども本人だけに限定されないことである。保護者が日本の学校制度や受験制度を理解しやすくなることは、保護者自身の不安を軽減するだけでなく、子どもが家庭内で説明役や制度仲介者となる負担を軽減する。また、学校が子どもの文化的背景を理解することは、子どもが自分のルーツを隠したり、違いを一人で抱えたりする状況を減らすことにつながる。

さらに、支援は一つの場所で完結するものではない。学校内の日本語指導や学習支援だけでなく、家庭内の親子コミュニケーション、地域での文化継承、ネパール人コミュニティでの横のつながり、学校外の相談支援が互いに接続される必要がある。

本研究の知見を踏まえると、支援は三つの層で考えることができる。第一に、子ども本人への支援である。ここには、心理的安心、学校生活での違和感を語れる場、進路相談、ルーツを肯定的に学ぶ機会が含まれる。第二に、家庭への支援である。ここには、保護者への進路情報提供、学校制度理解、親子間コミュニケーション支援、子どもの心理やアイデンティティに関する情報提供が含まれる。第三に、学校・地域・

コミュニティへの支援である。ここには、多文化理解、保護者同士の情報共有、先輩やメンターとの接続、ネパール語や文化を学ぶ場づくりが含まれる。

したがって、本研究が提案する支援ニーズの再定義とは、外国ルーツの子どもへの支援を、日本語能力の不足を補うものとしてだけでなく、親子関係、進路、文化継承、心理的安心、制度理解、コミュニティ形成を含むものとして捉え直すことである。特に、日本語支援を主たる課題としない層に対しては、支援ニーズが「日本語ができない」という明確な困難として現れないため、子ども本人と保護者の語りを別々に聞き取り、その一致と不一致を確認することが重要である。

8.10 本研究の理論的含意

本研究の理論的含意は、主に三点に整理できる。

第一に、本研究は、日本語能力の高さを同化や適応の完了として捉えることの限界を示した。日本語ができる子ども世代は、学校生活に参加し、友人関係を築き、日本社会に一定程度馴染んでいるように見える。しかし、その内側には、制度仲介の負担、教育制度の移動に伴う学習上のずれ、外見による境界経験、親子間の価値観差、ルーツの揺らぎといった困難が存在していた。したがって、日本語能力は適応の一側面ではあるが、困難や支援ニーズの有無を判断する十分な指標ではない。

第二に、本研究は、文化適応をめぐる世代間の意味づけの違いを、選択的文化適応と不協和的文化適応の双方の視点から明らかにした。選択的文化適応の観点からみると、文化維持の意味は子ども世代と保護者世代で異なっていた。子ども世代にとって文化維持は、必ずしも意識的に守るものではなく、日常生活の中で自然に併存するものとして経験される場合があった。一方、保護者にとって文化維持は、失われうるものを意識的に伝える営みとして語られた。この違いは、選択的文化適応を単なる「二文化の両立」としてではなく、世代間で異なる意味を持つ文化維持の過程として捉える必要性を示している。また、不協和的文化適応の観点からみると、親子間の認識差は、保護者の単純な無理解によってのみ生じるものではないことが示された。保護者は子どもの将来を願い、支えようとしているが、子ども本人が経験する孤立感、制度仲介の負担、教育期待へのプレッシャーは、家庭内で十分に共有されない場合がある。また、保護者が子どもの負担に気づいていても、自身の移住経験や将来不安から、期待を弱めることが難しい場合もある。この点で、不協和的文化適応は、「気づきながらも調整しきれない親子間の意味づけのずれ」として再考できる。

第三に、本研究は、重要な他者を、とくに同じ背景を持つ同世代・近い立場の人との横のつながりとして捉え直す必要性を示した。従来、重要な他者は、教師、支援者、先輩、ロールモデルなど、子どもの進路形成や社会参加を支える存在として理解されやすい。しかし、本研究では、子ども世代にとって、同じネパールルーツや外国ルーツを持つ友人、似た経験を共有できる近い立場の人との関係が、心理的安心、共感、文化的承認をもたらす重要な関係として確認された。質問票回答を探索的にみても、同じ背景を持つ友人の存在は、ルーツを肯定的に捉えることや、同世代・近い立場の人とつながれる場へのニーズと結びついていた。このことから、横のつながり

は、単なる交友関係ではなく、子ども世代が自分の経験を意味づけ、ルーツを肯定的に捉えるための関係的資源であったと考えられる。一方で、年上の先輩やメンターとの縦のつながりについても、進路情報やロールモデルとしての期待は示された。特に保護者回答では、ネパールルーツの先輩や若者から進路経験を聞く機会への期待が一定程度みられた。しかし、子ども世代の語りにおいて、縦のつながりは主に進路情報、経験談、ロールモデルを得る資源として位置づけられており、心理的安心や文化的承認という点では、横のつながりの方が中心的な支援資源であった。この点で、本研究は、重要な他者を、年上の相談相手だけでなく、同じ背景を持つ横の関係として捉える必要性を示した。

9 結論

9.1 研究結果のまとめ

本研究は、日本で育つネパールルーツの子ども世代とその保護者が、成長過程における困難と支援ニーズをどのように意味づけているのかを明らかにすることを目的とした。特に、日本語支援を主たる課題としない層に着目し、日本語能力だけでは把握しにくい困難や、親子間の認識差を検討した。

第5章では、子ども世代20名を対象とした質問票回答、自由記述、半構造化インタビューおよび補足的インタビューの語りをもとに、子ども世代本人の経験を整理した。その結果、多くの子ども世代は、日本語での日常会話や学校生活に大きな困難を感じていなかった。しかし、学校書類や制度情報を家庭内で説明する負担、親との価値観差、教育期待へのプレッシャー、学校生活における違和感、ルーツをめぐる揺らぎ、同じ背景を持つ友人や近い立場の人と安心して関われる場の不足、メンタルケアへのニーズが確認された。

第6章では、保護者20名を対象とした質問票回答とインタビューの語りから、保護者側の認識を整理した。保護者は、子どもの日本語能力や学校生活については比較的肯定的に認識していた。一方で、受験・進路情報、日本の学校制度理解、ネパール語・ネパール文化の維持、同じ背景を持つ人とのつながりについて強い関心を示していた。保護者にとって支援ニーズは、子どもが現在困っているかどうかだけでなく、将来困らないための備えとしても意味づけられていた。

第7章では、親子ペア事例を比較し、同じ家庭の中でも、子ども世代と保護者が同じ経験を異なる角度から意味づけていることを示した。親子は、日本語や学校生活については「大きな困難はない」という認識を共有しやすい一方で、学校での孤立感、親に話しにくい悩み、制度仲介の負担、教育期待の受け止め方、文化継承の意味づけ、支援ニーズについては認識差がみられた。重要なのは、これらの認識差が、保護者の無理解によって単純に生じているわけではないという点である。保護者は子どもの将来を願い、支えようとしているが、子ども本人が経験する違和感や負担は、家庭内で十分に共有されない場合があった。

第8章では、以上の結果を理論的に考察した。日本語ができることは「困っていない」ことを意味しない。むしろ、日本語ができるからこそ、学校や家庭から困難が見えにくくなり、子どもが制度仲介や説明役を担う場合がある。また、分節化された同化理論、選択的文化適応、新同化理論、不協和的文化適応、重要な他者の観点から、子ども世代と保護者世代の意味づけの違いを整理した。その結果、支援ニーズは日本語指導に限定されず、進路情報、保護者支援、親子間コミュニケーション、文化継承、心理的安心、同じ背景を持つ人との横のつながりを含むものとして再定義する必要があることが明らかになった。なお、年上の先輩やメンターとの縦のつながりについても一定の期待は示されたが、本研究では、横のつながりが中心的であった。

以上を踏まえると、本研究の中心的な結論は、日本語支援を主たる課題としないネパールルーツの子ども世代においても、困難や支援ニーズは存在するということであ

る。ただし、それらは日本語能力の不足としてではなく、制度仲介、教育制度の移動に伴う学習上のずれ、親子間の価値観差、教育期待の両義性、ルーツの意味づけ、心理的安心の不足、同じ背景を持つ人と安心して関われる場の不足として現れる。したがって、支援を考える際には、子ども本人の語りと保護者の語りを分けて聞き取り、その一致と不一致を丁寧に把握する必要がある。

9.2 研究質問への回答

本研究の中心的な研究質問は、「日本で育つネパールルーツの子ども世代とその保護者は、成長過程における困難と支援ニーズをどのように意味づけているのか」であった。この問いに対する本研究の答えは、次のように整理できる。

第一に、子ども世代は、日本語や学校生活に一定程度適応している一方で、その適応の内側に見えにくい困難を抱えていた。子ども世代にとっての困難は、日本語が話せないことや学校に通えないこととしてではなく、学校書類や制度情報を家庭内で説明する負担、親に話しにくい悩み、親の教育期待へのプレッシャー、学校生活の中での違和感、外見や名前によって外国人として見られる経験、ルーツをどう意味づけるかという揺らぎとして現れていた。したがって、子ども世代は、自分を「困っている子ども」として明確に位置づけていない場合でも、成長過程の中で複数の調整や負担を経験していた。

第二に、保護者は、子どもの日本語能力や学校生活については比較的肯定的に捉えていた。保護者にとって、子どもが日本語を使い、日本の学校に通い、友人関係を築いていることは、子どもが日本社会に適応していることの重要な指標であった。一方で、保護者は、日本の学校制度や受験制度、進路情報、ネパール語・ネパール文化の維持、子どもの将来安定について強い関心を持っていた。保護者にとって支援ニーズは、現在の困難に対応するためだけでなく、子どもが将来不利な状況に置かれないための備えとして意味づけられていた。

第三に、親子間には、日本語や学校生活についての認識の一致がみられる一方で、孤立感、制度仲介、教育期待、文化継承、支援ニーズについて認識差がみられた。子ども本人は、親に心配をかけたくない、話しても伝わりにくい、自分の学校生活に親の価値観を持ち込まれたくない、あるいは当時は困難として言語化できなかったという理由から、悩みを家庭内で十分に共有していない場合があった。一方で保護者は、子どもが学校に通い、日本語で生活できていることを手がかりに、子どもが比較的安定していると判断していた。そのため、親子間の認識差は、保護者が子どもを理解していないという単純な問題ではなく、子ども世代と保護者世代が異なる社会的経験、教育経験、文化的背景の中で、同じ出来事を異なる角度から意味づけていることによって生じていた。

第四に、これらの認識差は、文化適応、教育期待、家族内コミュニケーション、同じ背景を持つ人との横のつながりの観点から説明できる。子ども世代は、日本社会に馴染みながらも、家庭や行事、親族関係の中でネパールルーツを自然に経験していた。これに対し、保護者は、ネパール語や文化を意識的に守り、次世代に伝えるべき

ものとして意味づけていた。また、保護者の教育期待は、移住経験や将来不安に根ざしており、子どもにとって支えであると同時にプレッシャーにもなりうるものであった。さらに、同じ背景を持つ友人や近い立場の人との横のつながりは、子どもにとって、共感、安心感、文化的承認を得るための重要な関係として意味を持っていた。一方で、年上の先輩やメンターとの縦のつながりについては、進路情報やロールモデルとして期待は示されたものの、本研究の語りにおいては、横のつながりほど直接的な支援資源としては確認されなかった。

したがって、本研究の研究質問に対する最終的な回答は、次のようにまとめられる。日本で育つネパールルーツの子ども世代と保護者は、困難と支援ニーズを、日本語能力の不足としてだけではなく、親子間の意味づけ、文化適応、教育期待、制度仲介、ルーツの再解釈、同じ背景を持つ人との横のつながりの中で捉えていた。日本語ができることは、困難が存在しないことを意味しない。むしろ、日本語ができるからこそ見えにくくなる困難があり、その困難は、子ども本人と保護者の双方の語りを比較することによって初めて明らかになる。

9.3 本研究の学術的意義

本研究の学術的意義は、日本語支援を主たる課題としない外国ルーツの子ども世代に焦点を当てた点にある。従来の外国ルーツの子どもに関する研究や支援では、日本語指導、学習支援、不就学、進路保障が重要な課題として扱われてきた。これらは現在も重要であるが、日本語ができる子ども世代の困難は、支援対象として見えにくくなりやすい。本研究は、日本語能力が一定程度ある子ども世代においても、制度仲介、心理的違和感、親子間の価値観差、教育期待への負担、ルーツの揺らぎが存在することを示した。

また、本研究は、ネパールルーツの子ども世代と保護者に着目した点にも意義がある。日本における外国ルーツの子ども研究では、ブラジル、中国、フィリピンなどを対象とした研究が蓄積されてきた一方で、ネパールルーツの子ども世代や家庭に焦点を当てた研究は限られている。ただし、本研究は、他の外国ルーツ集団との比較によって、ネパールルーツ家庭の固有性を実証するものではない。むしろ本研究の意義は、外国ルーツの子どもをめぐる既存研究で論じられてきた日本語支援、親子間の認識差、文化継承、進路情報、心理的支援といった課題が、ネパールルーツ家庭においてどのような形で現れるのかを具体的に示した点にある。本研究の対象者においては、保護者の教育期待が、移住経験、家族の将来安定、海外でも通用する進路への期待、ネパール語・文化維持への願いと結びついて語られる傾向がみられた。この点は、ネパール社会における教育達成や海外移動の意味づけを踏まえて理解する必要がある。

さらに、本研究は、子ども世代と保護者の双方を対象にした親子ペア分析を行った。子ども本人の語りだけでは、保護者がどのような思いで教育期待や文化継承を意味づけているのかを十分に把握することは難しい。一方で、保護者の語りだけでは、子ども本人がどのように違和感やプレッシャーを経験しているのかが見えにくい。本

研究は、親子双方の語りを比較することで、同じ出来事が親子間で異なる意味を持つこと、また親子間の認識差が保護者の無理解だけではなく、異なる経験と立場から生じる意味づけのずれであることを示した。

理論的には、移民第二世代の文化適応に関する理論を、日本で育つネパールルーツの子ども世代の経験に即して捉え直した点に意義がある。本研究は、分節化された同化理論を、対象者を類型に分類するためではなく、家庭、学校、友人関係、進路、コミュニティによって適応経路が異なることを理解する視角として用いた。また、選択的文化適応については、子ども世代にとっての自然な文化的併存と、保護者世代にとっての意識的な文化継承を区別して捉えた。さらに、新同化理論については、ルーツが日常生活の中で弱まる一方、外見、名前、国籍、学校書類、進路選択、家族形成の場面で再び意味を持つ「境界の弱まりと再浮上」として整理した。

重要な他者については、とくに同じ背景を持つ同世代・近い立場の人との横のつながりに注目した。本研究では、当初、横のつながりと縦のつながりの双方を検討対象とした。その結果、同じネパールルーツや外国ルーツを持つ友人、同じような経験をした人との関係が、子ども世代にとって心理的安心、共感、文化的承認をもたらす可能性が示された。この点で、本研究は、外国ルーツの子どもへの支援を、まずは同じ背景を持つ人同士が安心してつながれる場の形成として捉える必要性を示した。

9.4 本研究の実践的意義

本研究の知見は、支援を「日本語能力の不足を補うもの」から、親子関係、進路、文化継承、心理的安心、制度理解、コミュニティ形成を含むものへと再定義する必要性を示した(8.9)。ここでは、その再定義を踏まえ、学校、保護者、地域・コミュニティという各主体が、具体的に何に取り組めるのかを示す。

学校現場に対しては、日本語ができる子どもを「支援の必要がない子ども」として扱わないことが求められる。具体的には、成績や出席状況だけでは見えない孤立感や違和感を語れる相談の機会を、日本語指導の枠外にも設けることが考えられる。また、外国ルーツの子どもの文化的背景を本人に説明させるのではなく、教員や周囲の生徒が理解する機会(多文化理解の授業や研修等)を設けることも有効であろう。

保護者に対しては、学校制度や受験制度に関する情報を、日本語能力にかかわらず届く形で提供することが重要である。たとえば、やさしい日本語や母語での説明資料、同じ背景を持つ先輩保護者による情報共有の場は、保護者自身の不安を軽減するとともに、子どもが家庭内で説明役を担う負担を間接的に軽減する。

地域・コミュニティに対しては、保護者を介さずに、子ども世代同士が安心して経験を共有できる場をどう作るのが課題となる。本研究では、横のつながりが縦のつながりよりも実感的な支援資源として確認されたことから(8.7・8.10)、まずは同世代・近い立場の人との交流の場を優先的に整備し、年上の先輩やメンターとのつながりは、進路情報を補う二次的な資源として位置づけることが現実的である。

このように、本研究が示す実践的意義は、支援ニーズの内容そのものよりも、それぞれの主体が今何をできるかという行動の設計に関わる。日本語支援を主たる課題と

しない層への支援は、特別な制度を新設することよりも、既存の学校・家庭・地域の関わり方を、日本語能力を基準にしない形へ調整することから始められる。

9.5 本研究の限界

本研究には、いくつかの限界がある。

まず、対象者数と一般化可能性に関わる限界である。本研究は、子ども世代20名と保護者20名への質問票調査、親子ペアを含む半構造化インタビュー、および社会人の子ども世代への補足的インタビューをもとにした探索的研究であり、本研究の結果を、日本で生活するすべてのネパールルーツの子ども世代や保護者に一般化することはできない。特に、親子ペアとして詳細に比較できた事例は限られており、親子間の認識差のあり方を網羅的に示すものではない。この点は、対象者の募集方法とも関わっている。本研究の対象者は、ネパール人コミュニティ内の人的つながりを通じて募集されたため、日本で長期的に生活し、ある程度コミュニティとの関係を持つ家庭が多く含まれている。こうした家庭では、20年以上にわたる日本での生活経験や、保護者同士の助け合い、情報共有を通じて、教育や文化継承に関する認識が似通っている可能性がある。したがって、本研究で示した保護者回答の共通性は、在日ネパール人保護者全体の一般的傾向としてではなく、コミュニティ内部のつながりを持つ保護者層にみられた認識傾向として慎重に理解する必要がある。

また、本研究の対象が、日本語支援を主たる課題としない層を中心としている点も限界の一つである。本研究は、日本語による日常生活や学校生活に大きな困難を抱えていない子ども世代に焦点を当てたため、日本語指導を必要とする子どもや、来日直後の子ども、不就学や進路上の深刻な困難を抱える子どもの経験を十分には扱っていない。したがって、本研究の知見は、日本語支援が不要であることを示すものではなく、日本語支援に加えて見えにくい困難にも目を向ける必要があることを示すものである。

さらに、本研究は回顧的な語りに依拠している。中学生、高校生、大学生、社会人を含む子ども世代に、過去の学校経験や成長過程を振り返ってもらったため、語られた経験は、当時の出来事そのものではなく、現在の立場から意味づけ直された記憶である可能性がある。特に、ルーツの意味づけや親子関係への評価は、年齢や進路段階、家族との関係の変化によって変わりうる。この点は、本研究の限界であると同時に、成長後に経験がどのように再解釈されるのかを示す資料でもある。

加えて、社会経済的背景、ジェンダー、きょうだい順位、在留資格や国籍、学校種別の違いを十分に分析しきれていない点も限界として挙げられる。本研究では、事例のようにきょうだい間の教育経路の違いにも触れたが、それを体系的に分析するには至らなかった。また、公立学校、私立学校、インターナショナルスクール、ネパールでの学校経験の違いが、子ども世代の困難や支援ニーズにどのように影響するのかについても、今後さらに検討する必要がある。同様に、横のつながりと縦のつながりの違いについても十分に検証しきれていない。本研究では、同じ背景を持つ同世代・近い立場の人との横のつながりが、子ども世代にとって安心感や共感をもたらす可能性

が示された一方で、年上の先輩やメンターとの縦のつながりについては、進路情報やロールモデルとしての期待は示されたものの、具体的な支援資源としての有効性を十分に確認するには至らなかった。したがって、縦のつながりの効果や限界については、今後さらに検討する必要がある。

最後に、研究者の位置性に関する限界がある。研究者は、日本語とネパール語の双方を理解し、対象者と一定の文化的・言語的背景を共有している。このことは、対象者が語りやすい環境をつくる利点を持つ一方で、研究者自身の経験や理解が解釈に影響する可能性もある。本研究では、語りの意味を確認し、分析において慎重な解釈を行うよう努めたが、研究者の位置性がデータの生成と解釈に影響した可能性は限界として認識する必要がある。

9.6 今後の課題

今後の課題は、第一に、対象者を拡大し、より多様なネパールルーツの子ども世代と保護者の経験を比較することである。本研究では、コミュニティ内の人的つながりを通じて対象者を募集したため、長期滞在者やコミュニティとの関係を持つ家庭が中心となった。今後は、地域差、滞在年数、来日時期、学校種別、家庭の社会経済的背景、保護者の日本語能力や職業、子どもの年齢層を広げて調査する必要がある。

第二に、縦断的研究の必要性である。本研究では、子ども世代が過去の経験を振り返る語りを含めて分析したが、困難や支援ニーズが成長段階に応じてどのように変化するかを十分には追跡できていない。小学校、中学校、高校、大学、就職、家族形成といった移行期ごとに、ルーツの意味づけ、親子関係、進路選択、支援ニーズがどのように変化するかを継続的に調査することが求められる。

第三に、日本語支援を必要とする層との比較である。本研究は、日本語支援を主たる課題としない層に焦点を当てたが、日本語指導を必要とする子どもとの比較を行うことで、日本語の壁がある場合とない場合で、困難や支援ニーズがどのように異なるのかを明らかにできる。これにより、外国ルーツの子どもへの支援を、日本語能力の段階に応じてより具体的に設計することが可能になる。

第四に、他の外国ルーツ集団との比較である。本研究はネパールルーツの子ども世代に焦点を当てたが、同様の課題は、フィリピン、中国、ベトナム、ブラジルなど、他の外国ルーツの子ども世代にも存在する可能性がある。一方で、教育期待、家族観、文化継承、コミュニティ形成のあり方は、出身国・地域によって異なる可能性がある。今後は、ネパールルーツの事例を他の外国ルーツ集団と比較し、何が共通し、何が固有であるのかを検討する必要がある。

第五に、同じ背景を持つ人との横のつながりを、実際にどのように設計できるのかを検討することである。本研究では、子ども世代にとって、同じネパールルーツや外国ルーツを持つ人との関係が、安心感、共感、文化的承認をもたらす可能性が示された。今後は、保護者主導ではなく、子ども世代本人が安心して参加できる交流の場、経験を共有できる場、ルーツを肯定的に捉えられる場をどのように継続的に作ることができるのかを検討する必要がある。なお、年上の先輩やメンターとのつながりにつ

いては、進路情報や経験談を得る補助的な資源として位置づけ、横のつながりとの違いや有効性を今後さらに検証する必要がある。

第六に、学校現場における支援の具体化である。本研究は、学校生活における違和感や、文化的背景が十分に理解されにくい経験を明らかにした。今後は、学校が外国ルーツの子どもを「日本語支援が必要な子ども」としてだけでなく、複数の文化的背景を持つ子どもとしてどのように理解し、支援できるのかを検討する必要がある。特に、教員研修、多文化理解教育、スクールカウンセラーとの連携、進路指導における保護者支援のあり方を具体的に考えることが重要である。

第七に、親子間コミュニケーションを支える実践研究である。本研究では、親子間の認識差が、単純な対立ではなく、同じ経験を異なる角度から意味づけることによって生じることを示した。今後は、親子が教育期待、進路、文化継承、学校生活の悩みについて安心して話し合える場をどのように作ることができるのかを検討する必要がある。その際、子どもが親に合わせることを求めるのではなく、保護者が子どもの経験を理解し、子どもも保護者の移住経験や不安を理解できるような双方向的な支援が求められる。

以上の課題に取り組むことで、外国ルーツの子どもへの支援は、日本語支援や学習支援にとどまらず、子ども本人、保護者、学校、地域、コミュニティをつなぐ包括的な支援として発展していくことが期待される。本研究はその出発点として、日本語支援を主たる課題としないネパールルーツの子ども世代と保護者の語りから、見えにくい困難と支援ニーズを明らかにした。今後は、この知見をより広い対象と実践の中で検証し、外国ルーツの子どもが、自らのルーツを否定することなく、日本社会の中で安心して学び、将来を選択できる環境を整えていくことが求められる。

文献

- Alba, Richard and Victor Nee, 2003, *Remaking the American Mainstream: Assimilation and Contemporary Immigration*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Banstola, Ratna Shila and Sachiko Inoue, 2023, “Difficulties in Adapting at School Among Nepalese Immigrant Children in Japan,” *SAGE Open Nursing*, 9, doi:10.1177/23779608231173288.
- Basnet, Neha, 2022, “Parental Decisions and Influence on Young Women’s Education to Work Transitions and Possible Selves Futures in Nepal,” *Journal of Applied Youth Studies*, 5: 135-150.
- Berry, John W., 1997, “Immigration, Acculturation, and Adaptation,” *Applied Psychology: An International Review*, 46(1): 5-34.
- Berry, John W., 2005, “Acculturation: Living Successfully in Two Cultures,” *International Journal of Intercultural Relations*, 29(6): 697-712.
- Bista, Krishna, Shyam Sharma and Rosalind Latiner Raby eds., 2019, *Higher Education in Nepal: Policies and Perspectives*, New York: Routledge.
- Braun, Virginia and Victoria Clarke, 2023, “Toward Good Practice in Thematic Analysis: Avoiding Common Problems and Be(com)ing a Knowing Researcher,” *International Journal of Transgender Health*, 24(1): 1-6, doi:10.1080/26895269.2022.2129597.
- Everest International School, Japan, n.d., “Welcome to EISJ,” Everest International School, Japan, (2026年7月3日取得, <https://eisj-edu.com/>) .
- Gordon, Milton M., 1964, *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion, and National Origins*, New York: Oxford University Press.
- Harris, Kathleen Mullan and Ping Chen, 2023, “The Acculturation Gap of Parent-Child Relationships in Immigrant Families: A National Study,” *Family Relations*, 72(4): 1748-1772.
- Inoue, Sachiko and Ratna Shila Banstola, 2025, “Adjustment and Adaptation Issues Affecting the Social, Emotional and Psychological Well-Being of Immigrant Children in Japanese Schools,” *SAGE Open*, 15(2), doi:10.1177/21582440251340627.

International Labour Organization, 2015, *Jobs and Skills for Youth: Review of Policies for Youth Employment of Nepal*, Geneva: International Labour Office.

Koirala, Saroj, 2025, “ ‘Everyone Is Leaving, So Am I’ : The Role of Culture in Shaping Migration Behaviour in Nepal,” *Comparative Migration Studies*, 13: 30, doi:10.1186/s40878-025-00427-1.

Kölbel, Andrea, 2013, “(De)Valuing Higher Education: Educated Youth, Generational Differences and a Changing Educational Landscape in Kathmandu, Nepal,” *Comparative Education*, 49(3): 331-343.

Martinez, Charles R., Jr., Heather H. McClure and J. Mark Eddy, 2009, “Language Brokering Contexts and Behavioral and Emotional Adjustment Among Latino Parents and Adolescents,” *The Journal of Early Adolescence*, 29(1): 71-98.

Portes, Alejandro and Min Zhou, 1993, “The New Second Generation: Segmented Assimilation and Its Variants,” *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 530: 74-96.

Portes, Alejandro, Patricia Fernández-Kelly and William Haller, 2009, “The Adaptation of the Immigrant Second Generation in America: A Theoretical Overview and Recent Evidence,” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, 35(7): 1077-1104.

Sharma, Uttam, Dirgha J. Ghimire and Prem Pandit, 2025, “Aspirations for Education and Employment Abroad among Youth and Parents in Chitwan,” *Studies in Nepali History and Society*, 30(1): 107-136.

Shukla, Serena, Ryan J. Smith, Anastasiia Burik, Dillon T. Browne and Hali Kil, 2025, “When and How Do Parent-Child Acculturation Gaps Matter? A Systematic Review and Recommendations for Research and Practice,” *Clinical Psychology Review*, 117: 102568, doi:10.1016/j.cpr.2025.102568.

大野恵理・原瑞穂, 2016, 「外国につながる子どもたちの保護者の教育参加——『母』としての移住女性のかかわりに注目して」『上越教育大学研究紀要』35: 105-115.

川本綾, 2020, 「外国にルーツを持つ親子への支援にかんする地域社会の課題——『外国にルーツのある親子の実態とニーズに関する調査』報告より」『外国にルーツを持つ子どもの支援と包摂型移民政策』大阪市立大学都市研究プラザ, 13-24.

清水睦美, 2021, 「日本の教育格差と外国人の子どもたち——高校・大学進学率の観点から考える」『異文化間教育』54: 39-57.

清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平，2021，『日本社会の移民第二世代——エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店。

出入国在留管理庁，2025，「令和7年6月末現在における在留外国人数について」出入国在留管理庁，（2026年7月3日取得，https://www.moj.go.jp/isa/publications/pres/s/13_00057.html）。

徳永智子・角田仁・海老原周子，2023，「外国につながる若者の居場所づくりとキャリア支援——都立定時制高校における三者協働の実践」『日本語教育』184：19-33。

中矢礼美・須藤とみゑ・橋本康男・二宮皓，2006，「異文化を背景とする子どもたちへの教育支援に関する研究」『広島大学留学生教育』10：43-58。

西川朋美・劉蓉蓉，2020，「日本で育つ外国ルーツの子ども・若者と継承語学習——日本の学校に通う子どもたちが家庭外で継承語を学ぶ場に関する文献調査——」『子どもの日本語教育研究』3：18-37。

宮本恭子，2026，「新たな多文化共生の局面——『ことばのヤングケアラー』問題に着目して」『経済科学論集』52：1-27。

文部科学省，2026，「令和7年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査の結果について」文部科学省，（2026年7月3日取得，https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/09/1421569_00007.htm）。

矢野裕俊，2020，「外国にルーツを持つ子どもに対する教育と支援——大阪市住吉区東部の小中学校での調査結果から」『外国にルーツを持つ子どもの支援と包摂型移民政策』大阪市立大学都市研究プラザ，25-36。

付録

付録1 若者向け事前質問・回答補足

(個人が特定できる質問の回答は本稿上では控える．質問番号は原本のまま記載)

注：質問11～51，55～56は，主に5件法で回答を求めた．5件法では，1を「全くそう思わない」，5を「とてもそう思う」とした．質問52，53は複数選択，質問54は単一選択，質問57～59は自由記述である．

1. (事前に伝えられている方は) 親子照合用のペアコードを入力してください．
2. 年齢を教えてください．
3. 性別を教えてください．
4. 生まれた国・地域を教えてください．
5. 来日した年齢を教えてください．途中帰国などがある場合は，在日年数で回答しても構いません．
6. 現在の所属を教えてください．
7. 主に経験した学校を教えてください．
8. 日本での受験経験を教えてください．
9. 家庭で主に使う言語を教えてください．
10. これまでの学校生活を振り返って，ネパールルーツであることによる悩みや，進路・親子関係の難しさを一番強く感じた時期はいつですか．
11. 日本語での日常会話に困難を感じたことがある．
12. 日本語で学校の授業を理解することに困難を感じたことがある．
13. 私にとって，日本語の壁は学校生活や日常生活における主な困難だった．
14. 日本語ができるために，周囲から「困っていない」と思われたことがある．
15. 私は日本社会に馴染んでいると感じる．
16. 私は日本の学校文化に馴染んでいたと感じる．
17. 学校生活の中で，孤立感を感じたことがある．
18. 周囲の日本人の友人には，自分の悩みを理解されにくいと感じたことがある．
19. 学校や周囲の人に，自分の背景を十分に理解されていないと感じたことがある．
20. ネパールルーツであることを誇りに思う．
21. ネパール語やネパール文化を大切にしたいと思う．
22. ネパールルーツであることは，自分の将来にとって強みになると思う．
23. 日本人でもネパール人でもないような感覚を持ったことがある．
24. 場面によって，自分のネパールルーツを出したり隠したりしてきたと感じる．
25. 学校の悩みを親に話しやすい．

26. 友人関係の悩みを親に話しやすい.
27. 進路の悩みを親に話しやすい.
28. 親は自分の悩みを理解してくれていたと思う.
29. 親に話しても、自分の悩みは伝わりにくいと感じたことがある.
30. 親と自分で、大切にしている価値観が違うと感じたことがある.
31. 親は、自分が感じていた孤立感や疎外感を十分には知らなかったと思う.

32. 親から勉強や進路について強い期待を感じたことがある.
33. 親からの期待は、自分にとって支えになった.
34. 親からの期待は、自分にとってプレッシャーになった.
35. 親の苦労や移住経験を考えて、「期待に応えなければならない」と感じたことがある.
36. 親が望む進路と、自分が望む進路に違いを感じたことがある.

37. 同じネパールルーツ、または外国ルーツの友人がいる.
38. 同じ背景を持つ友人と悩みを共有できている.
39. 同じ境遇の友人や仲間は、自分にとって重要だと思う.
40. 同じ背景を持つ友人がいることで、自分のルーツを肯定的に捉えやすくなった.
41. 同じ背景を持つ友人がもっと必要だったと思う.

42. 進路や将来について相談できる年上の先輩・大人がいる.
43. 目標にしている人物や参考になっている人物がいる.
44. 同じ経験をした年上の先輩やメンターは、自分にとって重要だと思う.
45. 進路を考えるうえで、参考にできるネパールルーツの先輩がもっと必要だと思う.
46. 親以外に、進路や将来について相談できる大人が必要だと思う.

47. 日本で教育を受けたことは、自分の将来にとって良かったと思う.
48. 日本で将来生活することに希望を感じる.
49. 将来、ネパールと関わり続けたいと思う.
50. 将来、日本以外の国で学ぶ・働くことに関心がある.
51. 将来の選択肢について、親と十分に話し合えていると思う.

52. 日本で育つネパールルーツの子どもの経験について、次の四つの説明のうち、あなた自身の経験に近いものはどれですか。複数選んでも構いません。
 - A. 日本社会に馴染みながら、ネパールの文化や家族の価値観も維持している.
 - B. 自分の方が親よりも日本社会に早く馴染んだことで、親との価値観や考え方に距離が生まれた.
 - C. 年齢が上がるにつれて、ネパール人であることが日常生活や進路に与える影響が小さくなった.

D. 家庭，学校，友人，経済状況，差別，相談相手などの条件によって，人によって異なる適応の仕方をしている．

53. 自分にとって必要だった，または必要だと思う支援を選んでください．複数選択可．

54. 最も必要だと思う支援を一つ選んでください．

55. ネパールルーツの若者向けに，同世代や先輩とつながれる場があったら参加したい．

56. ネパールルーツの若者向けに，同世代や先輩とつながれる場はもっと必要だと思う．

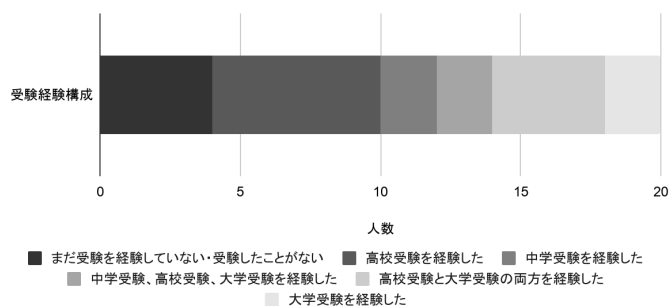
57. 日本で育つネパールルーツの若者にとって，どのような支援が必要だと思いますか．

58. これまでの経験の中で，親や周囲に理解してほしかったことがあれば自由に書いてください．

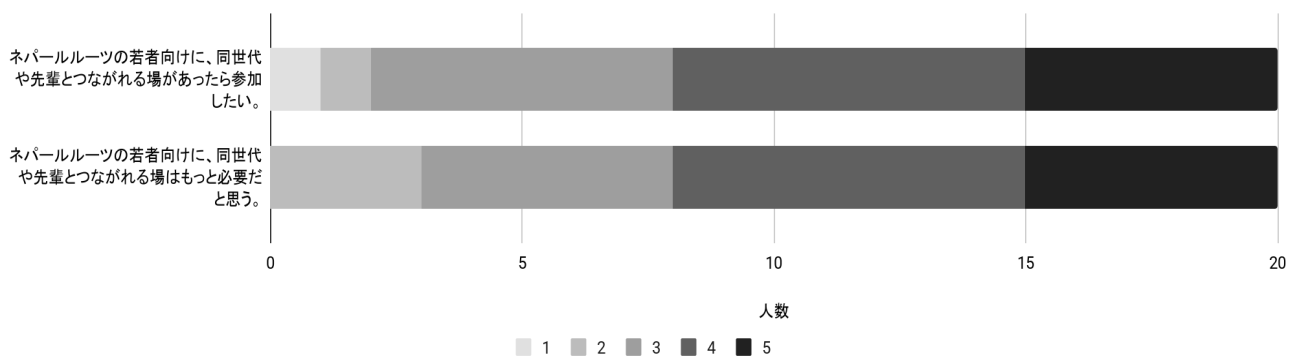
59. この研究について伝えたいことや，補足したいことがあれば自由に書いてください．

本文中に未記載の回答補足および自由記述欄回答

図：回答者の日本の受験経験（質問8）



つながれる場のニーズ（質問55、56）



57. 日本で育つネパールルーツの若者にとって、どのような支援が必要だと思いますか.

- ・日本での学習支援（歴史とか）やネパール文化を知る支援
- ・日本社会でのキャリア形成に関する情報
- ・同じネパールルーツを持つ人が関わる機会
- ・言語習得が難しい人なら基礎的な言語を学びやすい場，言語に問題がない人だったら特になし
- ・多様性を受け入れるような考えを子どもたちに学校で教えるべき
- ・同じルーツの人達の集まりの場をつくる．保護者抜きで．
- ・自分の文化をもっと理解してもらう
- ・同じようなルーツを持つ人々のコミュニティでネパールの文化を学べるような支援

58. これまでの経験の中で，親や周囲に理解してほしかったことがあれば自由に書いてください.

- ・推しは推せるうちに推したいので，躊躇なくファンクラブに入れて欲しかった．
- ・どちらのコミュニティにも100%属しきれない．「日本で育ったネパールルーツの自分」というありのままの存在を，グラデーションのままで認めてほしい．
- ・文化や価値観の違い
- ・大学時代，サークルとバイトに時間を使いすぎだと親に言われていた．でも今振り返ると，そこで得たコミュニケーション能力・リーダーシップ・人前で話す力が，今の自分を一番支えている気がする．
- ・日本国内でも転校が多く，日本とネパールの学校の転校もあったため，新しい環境と教育システムに適応するのに時間がかかったこと．
- ・大学E判定を6校受けたのは無理があった

59. この研究について伝えたいことや，補足したいことがあれば自由に書いてください.

- ・授業での『私たち日本人は』という一括りの表現に，寂しい違和感を抱くことがある．
- ・教育システムが日本とネパールというように大きく変わったときに，学習支援がもっとしっかりしていたらよかったと思う．小学校は充実していたが，特に中学校はもっとシステムがあればよかったと感じる．幸い私はいじめを受けなかったが，見た目でいじめを受けていた友人がいた．グローバル化が進んだ今，多様性を受け入れる考えをもっと広めるべきだと思う．

付録2 保護者向け事前質問票・日英併記質問項目

注：本付録は，保護者向け事前質問票の質問項目を，日本語と英語で併記したものである．質問12～52，55～56，58～74は，主に5件法で回答を求めた．5件法では，1を「全くそう思わない／Strongly disagree」，5を「とてもそう思う／Strongly agree」とした．質問53，75は複数選択，質問54は単一選択，質問57，76～80は自由記述である．

1. 個人コードを入力してください．

Please enter your personal code.

2. あなたとお子さんとの関係を教えてください．

Please describe your relationship with your child.

3. お子さんの年齢を教えてください．複数のお子さんについて回答する場合は，全員の年齢を記入してください．

Please enter your child's age. If you are answering about more than one child, please enter the ages of all children.

4. お子さんの性別を教えてください．

Please indicate your child's gender.

5. お子さんはどこで生まれましたか．

Where was your child born?

6. あなたは日本にいつ来ましたか．または，日本に何年住んでいますか．

When did you come to Japan, or how many years have you lived in Japan?

7. お子さんの現在の所属を教えてください．

What is your child's current educational or occupational status?

8. お子さんが主に経験した学校を選んでください．複数選択可．

Please select the main type(s) of school your child has attended. Multiple answers are allowed.

9. お子さんの日本での受験経験を教えてください．

Please indicate your child's experience with entrance examinations in Japan.

10. 家庭で主に使う言語を教えてください．

What language(s) are mainly used at home?

11. お子さんが，ネパールルーツであることによる悩みや，進路・親子関係の難しさを最も強く感じている時期はいつだと思いますか．

At what stage do you think your child most strongly experienced difficulties related to being of Nepali background, career choices, or parent-child relationships?

12. お子さんは，日本語での日常会話に困難を感じたことがあると思いますか．

Do you think your child has experienced difficulties in daily conversation in Japanese?

13. お子さんは、日本語で学校の授業を理解することに困難を感じたことがあると思いますか.

Do you think your child has experienced difficulties understanding school lessons in Japanese?

14. お子さんにとって、日本語の壁は学校生活や日常生活における主な困難の一つだったと思いますか.

Do you think the Japanese language barrier was one of the main difficulties in your child's school life or daily life?

15. お子さんは、日本語ができるために、周囲から「困っていない」と思われたことがあると思いますか.

Do you think your child has been seen by others as “not having difficulties” because they can speak Japanese?

16. お子さんは、日本社会に馴染んでいると思いますか.

Do you think your child feels accustomed to Japanese society?

17. お子さんは、日本の学校文化に馴染んでいる、または馴染んでいたと思いますか.

Do you think your child is, or was, accustomed to Japanese school culture?

18. お子さんは、学校生活の中で孤立感を感じたことがあると思いますか.

Do you think your child has experienced feelings of isolation in school life?

19. お子さんは、周囲の日本人の友人には自分の悩みを理解してもらいにくいと感じたことがあると思いますか.

Do you think your child has felt that Japanese friends around them had difficulty understanding their worries?

20. お子さんは、学校や周囲の人に、自分の文化的背景や家庭背景を十分に理解してもらえていないと感じたことがあると思いますか.

Do you think your child has felt that people at school or around them did not sufficiently understand their cultural or family background?

21. お子さんは、ネパールルーツであることを誇りに思っていると思いますか.

Do you think your child is proud of being of Nepali background?

22. お子さんは、ネパール語やネパール文化を大切にしたいと思っていますか.

Do you think your child wants to value the Nepali language and Nepali culture ?

23. お子さんは、ネパールルーツであることを将来の強みとして捉えていると思いますか.

Do you think your child sees being of Nepali background as a strength for the ir future?

24. お子さんは、自分が日本人でもネパール人でもないように感じたことがあると思いますか.

Do you think your child has experienced feeling as if they are neither Japanese nor Nepali?

25. お子さんは、場面によってネパールルーツを見せたり隠したりしたことがあると思いますか.

Do you think your child has sometimes shown or hidden their Nepali background depending on the situation?

26. お子さんは、学校での悩みを親に話しやすい、または話しやすかったと思いますか.

Do you think your child finds it, or found it, easy to talk to you about worries at school?

27. お子さんは、友人関係の悩みを親に話しやすい、または話しやすかったと思いますか.

Do you think your child finds it, or found it, easy to talk to you about worries related to friendships?

28. お子さんは、進路や将来の悩みを親に話しやすい、または話しやすかったと思いますか.

Do you think your child finds it, or found it, easy to talk to you about worries related to future educational or career choices?

29. あなたは、お子さんの悩みを理解できていたと思いますか.

Do you think you were able to understand your child' s worries?

30. お子さんは、親に話しても自分の悩みを十分に理解してもらえないと感じたことがあると思いますか.

Do you think your child has felt that their worries were not fully understood even when they talked to you?

31. あなたは、お子さんと自分では大切にしている価値観が違うと感じたことがありますか.

Have you felt that you and your child value different things?

32. あなたは、お子さんが経験していた孤立感や疎外感について、十分に知ることができていなかったと思いますか.

Do you think you did not, or do not, fully know about the feelings of isolation or exclusion that your child experienced?

33. あなたは、お子さんの勉強や進路に対して高い期待を持っている、または持っていましたか.

Do you have, or did you have, high expectations regarding your child's studies and future path?

34. あなたの期待は、お子さんにとって支えになっている、または支えになっていたと思いますか.

Do you think your expectations are, or were, a source of support for your child?

35. あなたの期待は、お子さんにとってプレッシャーになっている、またはプレッシャーになっていたと思いますか.

Do you think your expectations are, or were, a source of pressure for your child?

36. お子さんは、親の苦勞や移住経験を理由に、期待に応えなければならないと感じている、または感じていたと思いますか.

Do you think your child feels, or felt, that they must meet expectations because of your hardships or migration experience?

37. あなたが望む進路と、お子さん本人が望む進路には違いがあると思いますか.

Do you think there is a difference between the future path you hope for and the future path your child hopes for?

38. お子さんには、同じネパールルーツや外国ルーツを持つ友人がいますか.

.

Do you think your child has friends of the same Nepali background or other foreign backgrounds?

39. お子さんは、同じような背景を持つ友人と悩みを共有できていると思いますか。
Do you think your child is able to share worries with friends who have a similar background?

40. お子さんにとって、同じような立場の友人や仲間は重要だと思いますか。
Do you think friends and peers in similar situations are important for your child?

41. 同じような背景を持つ友人がいることで、お子さんは自分のルーツを肯定的に捉えやすくなったと思いますか。
Do you think having friends with a similar background has made it easier for your child to view their roots positively?

42. お子さんには、もっと同じような背景を持つ友人が必要だったと思いますか。
Do you think your child needed more friends with a similar background?

43. お子さんには、進路について相談できる年上の先輩や大人がいると思いますか。
Do you think your child has older peers or adults they can consult about their future path?

44. お子さんには、目標にしたり参考にしたりできる人がいると思いますか。
Do you think your child has someone they look up to or use as a reference?

45. お子さんにとって、同じような経験をした年上の先輩やメンターは重要だと思いますか。
Do you think older peers or mentors with similar experiences are important for your child?

46. お子さんが進路を考えるうえで、参考にできるネパールルーツの先輩がもっと必要だと思いますか。
Do you think there should be more older peers of Nepali background whom your child can refer to when thinking about their future path?

47. お子さんには、親以外に進路について相談できる大人が必要だと思いますか。
Do you think your child needs adults other than parents whom they can consult about their future path?

48. お子さんにとって、日本で教育を受けたことは将来にとってよかったと思いますか。
Do you think receiving education in Japan was good for your child's future?

49. お子さんは、将来日本で生活することに希望を持っていると思いますか。

Do you think your child feels hopeful about living in Japan in the future?

50. お子さんは、将来もネパールとつながっていたいと思っていますか。

Do you think your child wants to continue being connected to Nepal in the future?

51. お子さんは、将来、日本以外の国で学んだり働いたりすることに関心があると思いますか。

Do you think your child is interested in studying or working in countries other than Japan in the future?

52. あなたは、お子さんと将来の選択肢について十分に話し合えていると思いますか。

Do you think you have had enough discussions with your child about future options?

53. お子さんにとって必要だった、または現在必要だと思う支援をすべて選んでください。複数選択可。

Please select all types of support that you think were, or are, necessary for your child. Multiple answers are allowed.

54. お子さんにとって最も必要だった、または現在最も必要だと思う支援を一つ選んでください。

Please select the one type of support that you think was, or is, most necessary.

55. ネパールルーツの若者が、同じ背景を持つ友人や年上の学生・若者とつながる機会があれば、お子さんを参加させたいと思いますか。

If there were opportunities for youth of Nepali background to connect with peers or older students/young adults, would you want your child to participate?

56. ネパールルーツの若者が、同じ背景を持つ友人や年上の学生・若者とつながる機会はもっと必要だと思いますか。

Do you think more opportunities are needed for youth of Nepali background to connect with peers or older students/young adults?

57. 日本で育つネパールルーツの若者には、どのような支援が必要だと思いますか。

What kind of support do you think is necessary for youth of Nepali background growing up in Japan?

58. あなたは、日本の学校制度を十分に理解していると思いますか.

Do you think you sufficiently understand the Japanese school system?

59. あなたは、日本の受験制度について必要な情報を得られていると思いますか.

Do you think you have received the necessary information about entrance examinations in Japan?

60. あなたは、学校の先生と十分にコミュニケーションを取れていると思いますか.

Do you think you have communicated sufficiently with school teachers?

61. あなた自身の日本語能力は、お子さんの教育や進路を支えるうえで壁になったことがありますか.

Has your own Japanese language ability been a barrier in supporting your child's education or future path?

62. 日本でお子さんを教育することに不安を感じたことがありますか.

Have you felt anxious about educating your child in Japan?

63. 教育は、お子さんの将来の安定にとって最も重要なことのひとつだと思いますか.

Do you think education is one of the most important things for your child's future stability?

64. お子さんには、親世代よりも高い教育を受けてほしいと思いますか.

Do you want your child to receive a higher level of education than you, as parents, did?

65. 日本に移住した理由の一つは、お子さんの教育や将来に関係していると思いますか.

Was one of the reasons for migrating to Japan related to your child's education or future?

66. お子さんには、親として自分が経験した苦労を経験してほしくないと思いますか.

Do you not want your child to experience the hardships that you experienced as a parent?

67. お子さんの進路は、お子さん本人だけでなく家族全体に関わるものだと思いますか.

Do you think your child's future path is related not only to the child but also to the whole family?

68. お子さんには、安定した職業に就いてほしいと思いますか。

Do you want your child to have a stable occupation?

69. お子さんには、日本だけでなく海外でも通用する進路を選んでほしいと思いますか。

Do you want your child to choose a future path that will be useful not only in Japan but also internationally?

70. お子さんには、ネパール語を維持してほしいと思いますか。

Do you want your child to maintain the Nepali language?

71. お子さんには、ネパール文化や家族の価値観を大切にしてほしいと思いますか。

Do you want your child to value Nepali culture and family values?

72. お子さんが日本社会に馴染むことと、ネパール文化を維持することは両立できると思いますか。

Do you think it is possible for your child to become accustomed to Japanese society while maintaining Nepali culture?

73. お子さんの考え方が、自分の世代とは違うと感ずることがありますか。

Do you sometimes feel that your child's way of thinking is different from that of your generation?

74. お子さんがネパール語やネパール文化から離れていくことに不安を感じたことがありますか。

Have you felt anxious that your child may become distant from the Nepali language or Nepali culture?

75. 日本でお子さんを育てるうえで、保護者自身に必要なだった、または現在必要だと思う支援をすべて選んでください。

Please select all types of support that you, as a parent, needed or currently need while raising your child in Japan.

76. 日本でお子さんを育てる中で、難しかったことや不安だったことがあれば自由に書いてください。

Please freely describe any difficulties or anxieties you experienced while raising your child in Japan.

77. お子さんについて、「もっと早く気づけばよかった」「もっと理解したかった」と思うことがあれば自由に書いてください。

Please freely describe anything about your child that you wish you had noticed earlier or understood better.

78. お子さんが親には話していなかった悩みがあるとすれば、どのような悩みだったと思いますか.

If your child had worries that they did not tell you about, what kind of worries do you think they were?

79. 日本で育つネパールルーツの若者とその家庭に、今後どのような支援が必要だと思いますか.

What kind of support do you think is necessary in the future for youth of Nepali background growing up in Japan and their families?

80. この研究について伝えたいことや、補足したいことがあれば自由に書いてください.

Please freely write anything else you would like to add or tell us about this research.

本文中に未記載の回答補足および自由記述欄回答

57. Other than the ones stated above, what kinds of support do you think young people of Nepali heritage growing up in Japan need? / 日本で育つネパールルーツの若者にとって、どのような支援が必要だと思いますか.

- Nepali need environment to assimilate.
- 差別がなく，安心，安定して勉強できる政策環境になってほしい.
- 特に発達障害の子供への支援が活発的に議論すべき
- Since Japan is localized society, it is difficult to imagine cultural communities/growth related support to young immigrants in Japan.
- Nepali language classes
- ネパール語の教育
- Cross culture program
- 東京（都市）以外の各地（郊外でも）でネパール語勉強できる場が必要です. 週一回だけでもネパールの文化，社会などを学べる場所が欲しいです.
- Educational information for higher education
- Cultural or such gatherings (not only academic or career related)

76. Please describe any difficulties or concerns you have experienced while raising your child in Japan. / 日本で子どもを育てる中で、難しかったことや不安だったことがあれば自由に書いてください.

- Sometimes worrying about child not getting proper socializing.
- 現在外国人に対しての政策が厳しくなってきたため、子供の教育を続けるかどうかすごく不安に思っています.
- Schooling and career development
- 習い事を選択
- 言葉と文化の壁で家のなかと外の世界は全く違うと感じたこと
- Language problem in initial days

77. Please describe anything about your child that you wish you had noticed earlier or understood better. / お子さんについて、「もっと早く気づけばよかった」「もっと理解したかった」と思うことがあれば自由に書いてください.

- 高校受験のため早めに塾に入学すれば良かった.
- Try to Be like a friend not father or mother

78. What kinds of concerns or difficulties do you think your child may have had but did not discuss with you? / お子さんが親には話していなかった悩みがあるとすれば、どのような悩みだったと思いますか.

- Maybe school environment.
- Relationship with her friends
- 友達関係
- Relation with friends at school

79. What kinds of support do you think young people of Nepali heritage and their families in Japan will need in the future? / 日本で育つネパールルーツの若者とその家庭に、今後どのような支援が必要だと思いますか.

- Creating more frequent parent teacher meeting. Effective communication.
- 子供がいる家庭に日本での教育の大切さを理解するため、日本人との交流しやすい環境になってほしい.
- 人と人の繋がり大切さ. 嘘は絶対につかわないこと. 感謝の気持ちを表すことと間違えた時, 嘘を逃げるのではなく, キッチンと謝る習慣.
- If someone join Japanese school in middle or come Japan after elementary school, they may have problem of learning in Japanese but no such problems with kids born in Japan.
- Systems in Japan (education, medication, social security etc)

- 日本文化とネパール文化の共存
- 自分の国の言葉守るためネパール語でも教育
- Career support
- 学校，大学の選択勉強などに支援，職場選ぶときご相談できる場所，心の話できる先輩か仲間たちが欲しいです.
- Bringing grownup children here is a big issue. Various problems are arising because of cultural difference
- I want to support them regarding to Nepalese culture and tradition
- Support from Japanese community and schools for improving the Japanese language proficiency of young Nepali people, while also maintaining Nepali language and cultural background.
- Language support in initial days and career support after graduation

付録3 若者インタビューガイド

注：本インタビューは、質問票回答を踏まえた半構造化インタビューとして実施した。質問票では、日本語、学校生活、ルーツ、親子関係、教育期待、横・縦のつながり、将来展望、支援ニーズに関する回答を得たため、インタビューでは同じ質問を繰り返すのではなく、それぞれの回答の背景にある具体的な経験や意味づけを自由に語ってもらうことを重視した。以下の項目を基本としつつ、対象者の年齢、教育経験、来日時期、質問票回答の内容に応じて、質問の順序や追加質問を調整した。それぞれの項目から2、3問ほど質問した。

1. これまでの経験を振り返って

まず、これまでどこで育ち、どのような学校生活を送ってきたのか、自由に話してください。

小学校、中学校、高校、大学・社会人期の中で、一番印象に残っている時期はいつですか。

その時期は、楽しかった時期でしたか。それとも大変だった時期でしたか。

今振り返って、「あの時は自分にとって大きかった」と思う出来事がありますか。

2. 学校生活の中で感じた違和感や困難

学校生活の中で、自分が周囲と違うと感じたことはありましたか。

それは、日本語、外見、名前、家庭の文化、宗教、親のこと、進路など、どのような場面でしたか。

当時、その経験を誰かに話していましたか。話していなかった場合、それはなぜですか。

先生や友人、学校に「もう少し理解してほしかった」と思うことはありますか。

3. 日本語や家庭内での役割

日本語で困った経験よりも、日本語ができることで担った役割や負担はありましたか。

学校の書類、先生とのやり取り、進路情報などを、親に説明した経験はありますか。

その役割を、当時どのように感じていましたか。

今振り返ると、その経験は自分にどのような影響を与えたと思いますか。

4. ルーツやアイデンティティの意味づけ

ネパールルーツであることを、子どもの頃はどのように感じていましたか。

年齢が上がる中で、ルーツに対する感じ方は変わりましたか。

ネパールルーツであることを出しやすい場面、出しにくい場面はありましたか。

「日本人でもネパール人でもない」と感じたことがある場合、それはどのような場面でしたか。

ネパール語、ネパール文化、家族の価値観について、今はどのように感じていますか。

5. 親子関係と相談しやすさ

学校生活や友人関係、進路の悩みを親に話していましたか。

親に話しやすかったことと、話しにくかったことは何ですか。

親に心配をかけたくない、話しても伝わりにくい、価値観が違うと感じたことはありますか.

親にもっと理解してほしかったことはありますか.

今振り返って、親子の間にどのような支援があればよかったと思いますか.

6. 教育期待・進路選択

親からの期待をどのように感じていましたか.

その期待は、自分にとって支えでしたか、プレッシャーでしたか.

親が望む進路と自分が望む進路に違いを感じたことはありますか.

進路を考えるとき、誰に相談していましたか.

進路選択のときに、もっと必要だったと思う情報や支援はありますか.

7. 横のつながり・縦のつながり

同じネパールルーツや外国ルーツの友人は、自分にとってどのような存在でしたか.

同じ背景を持つ友人とは、どのようなことを共有できましたか.

逆に、同じ背景を持つ友人にも話しにくいことはありましたか.

年上の先輩や、同じような経験をした人に相談したかったことはありますか.

どのような人が身近にいたら、もっと安心できたと思いますか.

8. 今振り返って必要だった支援

子どもの頃や学生時代に、どのような支援があればよかったと思いますか.

日本語支援以外で、必要だったと思う支援はありますか.

メンタルケア、親子間コミュニケーション、進路情報、文化理解、同じ背景の人とのつながりの中で、特に重要だと思うものはありますか.

学校、家庭、地域、ネパール人コミュニティに対して、今伝えたいことはありますか.

最後に、この研究に関して補足したいことがあれば自由に話してください.

付録4 保護者インタビューガイド

注：本インタビューは、保護者向け質問票回答および子ども世代の質問票・インタビュー結果を踏まえた半構造化インタビューとして実施した。質問票では、子どもの日本語、学校生活、ルーツ、親子関係、教育期待、つながり、将来展望、支援ニーズに関する保護者の認識を把握したが、インタビューでは同じ質問を繰り返すのではなく、子ども世代の回答や語りとの違いや共通点を明らかにすることを重視した。特に、親子間で認識が異なる可能性があると考えられた項目については、その背景にある経験や価値観を掘り下げて聞き取ることを目的とした。以下の項目を基本としつつ、子どもの年齢、教育経験、保護者の在日年数、質問票回答の内容に応じて、質問の順序や追加質問を調整した。それぞれの項目から2, 3問ほど質問した。

1. 日本で子どもを育ててきた経験

日本で子どもを育ててきた経験を自由に教えてください。

子どもが小さかった頃、特に不安だったことや大変だったことはありますか。

日本の学校に子どもを通わせる中で、印象に残っている出来事がありますか。

保護者として、どの時期が一番大変だったと感じますか。

2. 子どもの学校生活をどう見ていたか

お子さんは学校生活に馴染んでいたと思いますか。

友人関係や学校生活で困っている様子はありませんか。それを家で保護者に伝えてくれたことはありますか？

子どもが悩んでいると感じた場面はありましたか。どんな悩みでしたか？

当時は気づかなかったけれど、今振り返ると気になっていることはありますか。

学校や先生にもっと理解してほしいことはありますか。制度のことで、言語的なことでも大丈夫です。

3. 日本語・学校制度・保護者としての困難

お子さんの日本語について、心配したことはありましたか。

保護者自身が、学校の書類、連絡、制度、受験情報などで困ったことはありましたか。

お子さんに学校の情報を説明してもらったり、手伝ってもらったりした経験はありますか。

日本の学校制度や受験制度について、もっと早く知りたかったことはありますか。

学校とのコミュニケーションで難しかったことはありますか。

4. ルーツ・文化継承への思い

子どもには、ネパール語やネパール文化をどのように受け継いでほしいと思っていましたか。

日本社会に馴染むことと、ネパール文化を維持することは両立できると思いますか。

子どもがネパール語やネパール文化から離れていくことに不安を感じたことはありますか。

家庭の中で文化を伝えるうえで難しかったことはありますか。

家庭以外に、ネパール語や文化を学ぶ場が必要だと思いますか。

5. 親子関係と価値観の違い

お子さんは、学校生活や友人関係、進路の悩みを話してくれていたと思いますか。
親には話していなかった悩みがあるとすれば、どのようなことだったと思いますか。
子どもの考え方が、自分たち親世代とは違うと感じたことはありますか。
その違いを、どのように受け止めていましたか。
親子でうまく話し合うために、どのような支援が必要だと思いますか。

6. 教育期待・進路への願い

子どもの教育や進路について、どのような期待を持っていましたか。
なぜそのような期待を持つようになったと思いますか。
親として経験した苦勞を、子どもには経験してほしくないと感じたことはありますか。
子どもが望む進路と、保護者として望む進路に違いを感じたことはありますか。
進路や受験について、もっと必要だったと思う情報や支援はありますか。
子どもの将来について、どのようなことを一番願っていますか。

7. 同じ背景の人とのつながり

お子さんにとって、同じネパールルーツや外国ルーツの友人は必要だと思いますか。
同じ背景を持つ友人や先輩がいることで、子どもにどのような影響があると思いますか。
進路や将来について相談できる年上の先輩や大人は必要だと思いますか。
保護者自身にとって、ネパール人保護者同士のつながりは必要でしたか。
同じような経験を持つ先輩や保護者から、どのような話を聞いたかったですか。

8. 必要だった支援・今後必要な支援

日本で子どもを育てる中で、保護者自身に必要だった支援は何ですか。
子どもにとって必要だった支援は何だと思いますか。
学校制度、受験・進路情報、学校とのコミュニケーション、子どもの心理理解、文化継承、保護者同士のつながりの中で、特に必要だと思うものはありますか。
日本で育つネパールルーツの若者とその家庭に、今後どのような支援が必要だと思いますか。あなたの経験を踏まえて教えてください。

9. 子どもの経験に関する類型理解

若者向け質問票では、日本で育つネパールルーツの若者の経験に近い説明として、以下の四つの選択肢を提示しました。お子さんは、この中でどれに近い経験を選んだと思いますか。複数選んでも構いません。

- A. 日本社会に馴染みながら、ネパールの文化や家族の価値観も維持している。
- B. 自分の方が親よりも日本社会に早く馴染んだことで、親との価値観や考え方に距離が生まれた。
- C. 年齢が上がるにつれて、ネパール人であることが日常生活や進路に与える影響が小さくなった。
- D. 家庭、学校、友人、経済状況、差別、相談相手などの条件によって、人によって異なる適応の仕方をしている。

そう思うのは、お子さんのどのような姿や場面を見てきたからですか。

お子さんが日本社会に馴染んでいると感じる場面はありますか。

お子さんがネパール語，ネパール文化，家族の価値観を大切にしていると感じる場面はありますか。

親子の間で，価値観や考え方に距離があると感じた場面はありますか。

年齢が上がるにつれて，お子さんがネパールルーツを意識する場面は変化したと思いますか。

お子さんの適応や進路は，家庭，学校，友人，経済状況，相談相手などの条件によって影響を受けていると思いますか。

保護者から見たお子さんの姿と，お子さん本人の自己理解には違いがあると思いますか。

最後に，この研究に関して補足したいことがあれば自由に話してください。